旧制富山高等学校設立 100 周年記念事業

記念講演会及び
国際シンポジウム

日 時：2024 年 2 月 10 日 (土) 13 時 00 分～ 18 時 10 分

場 所：富山大学人文学部棟 3 階第 6 講義室

富　山　大　学

付記

本原稿は、2024 年 2 月 10 日（土）に開催された旧制富山高等学校設立 100 周年記念講演会および国際シンポジウムの録音を書面に転記したものである。報告書として刊行するにあたって、文体を改め、また各登壇者の先生方にも内容のご確認をお願いすると同時に、全体の体裁をワーキンググループで整えさせていただいた。

なお、ワーキンググループの一員である中島のヘルン文庫紹介は割愛させていただいたことと、ルイ・ソロ・マルティネル氏の報告は通訳者による翻訳のみを掲載させていただいたこと、質疑のうちフランス語で行われたものも通訳者による翻訳のみを掲載させていただいたことをお断りしておく。

すべての文責は本記念講演会および国際シンポジウム実施運営委員会にあることもここに記させていただく。

2024 年 3 月 29 日

旧制富山高等学校設立 100 周年記念講演会および国際シンポジウム
実施ワーキンググループ　　代表　大西宏治

【司会】それでは定刻となりましたので、旧制富山高等学校100周年記念事業、記念講演会および国際シンポジウムを開催します。記念講演会とシンポジウムの司会を仰せつかっております富山大学人文学部の中島です。今日は一日どうぞよろしくお願いします。

それでは、講演会・シンポジウム開催に先立ちまして、富山大学人文学部を代表しまして、副学部長の大西よりご挨拶申し上げます。

【大西】皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました、副学部長の大西と申します。本来であれば、ここは学部長がご挨拶申し上げるところを、また後で説明させていただきますが、残念ながら学部長はご病気で今日参加することがかなわないということで、私が代わりにご挨拶させていただきます。

皆様ご多忙のところお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。この度は旧制富山高等学校設立100周年を記念して講演会とシンポジウムを開催させていただく運びとなり、大変光栄に思っています。さて、ご挨拶ですが、私からというよりは学部長から文書を預かっておりますので、そちらを代読させていただく形で最初のあいさつとさせていただきます。

【学部長挨拶（大西代読）】

富山大学人文学部長の齊藤大紀と申します。本日はお忙しい中、旧制富山高等学校設立100周年記念事業記念講演会および国際シンポジウムにお越しいただき、心より感謝申し上げます。また、Zoomにてご参加の皆さまも、お忙しい中ありがとうございます。

私自身、この企画を立ち上げてからの関わりで、今日の日を心から楽しみにしていたのですが、思ってもみなかったことに、先月から体調を崩してしまい、学内某所、と申しましても、要するに附属病院の病室から、Zoomにての参加を余儀なくされてしまいました。不適切にも程があるとのそしりを受けるかもしれませんが、何とぞご容赦いただければ幸いです。

さて、この記念講演会および国際シンポジウムの趣旨をご説明申し上げたいと思います。趣旨は大まかに3つあります。まず1つ目は、皆さまもご承知のとおり、旧制富山高等学校は1924年4月に、東岩瀬の篤志家、馬場はる氏の多額の寄附によって、富山県立の七年制高等学校として開校しました。

馬場はる氏は、ご自身の子息も含めた富山の優秀な青年たちが、県内に高等学校がないため、金沢の第四高等学校をはじめとする県外の高等学校に通学せざるを得ないのを見て、富山における高等学校の設立を決意されたといわれています。

それから100年、後を継いだ富山大学人文学部もまた、県内唯一の人文系高等教育機関として、富山県内外の優秀な若者を集めています。馬場はる氏の志の灯は、今なお本学に受け継がれているものと申せましょう。この灯を現今の大学改革の嵐の中で、風前の灯としてはなりません。この灯を我々が引き継ぎ、さらに未来の若者たちに受け渡し、次の50年、100年と、灯し続けなければならないと思う次第です。

2つ目として、今から100年前の富山は、大正7年に水橋や魚津での米騒動をはじめとして、大正デモクラシーの波が沸き起こっていました。初の本格的政党内閣である原敬内閣が成立し、男子の高等普通教育を完成させる教育機関である高等学校令が改正され、七年制の公立学校、私立学校の設置が認められたのです。当時の岩瀬においても、米騒動、岩瀬における大隈重信の講演会の開催など、大きなデモクラシーの波が押し寄せていて、その土壌があったからこそ、全国的にもユニークな七年制の公立高等学校の設置が目指されたとも伺っています。

そしてより大きな背景としては、従来のナンバースクールにおける教育とは異なった、デモクラシーの時代にふさわしい新たな知性を持った青年の育成が目指されたことが挙げられるでしょう。もしもこの青年たちについて、自分の人生の在り方を自ら決定していく近代的な個の確立が目指されたのだとしたら、古典的なことかもしれませんが、現在の富山大学人文学部の理念にも、脈々と引き継がれているような気がしてなりません。それは、古い灯かもしれませんが、やはり受け継ぐべき灯であろうかと思います。偉そうに申し上げましたが、実のところ私の話は素人の浅知恵に過ぎません。本日は田中智子先生の記念講演で、プロフェッショナルの含蓄深いお話を堪能していただければと思います。

3つ目は、富山大学の至宝ともいうべきヘルン文庫についてです。ヘルン文庫は言うまでもなく、南日恒太郎初代校長、馬場はる氏のご尽力によって、富山高等学校の所蔵するところとなった、ラフカディオ・ハーンすなわち小泉八雲の蔵書です。ラフカディオ・ハーンという、洋の東西を股にかけた希代の知識人の蔵書が、この隣の附属図書館に収蔵されているわけです。ある人の蔵書は、その人の思想の在り方を示すものであろうと思います。そう考えますと、すぐそこにラフカディオ・ハーンの脳内の小宇宙があるというわけです。

本日はラフカディオ・ハーン研究の最前線について、那須野絢子先生、西成彦先生、ルイ・ソロ・マルティネル先生、中島淑恵先生という、またとないナビゲーターにご登壇いただきます。まさしくこれは、「ドキドキじゃないんだよ。ズキズキワクワクなんだよ」ではないでしょうか。

【大西】ここは、朝の連ドラの草彅剛の物真似で話せという学部長の命令でしたが、なかなかそうはできませんでした。申し訳ありません。ご本人が今ここで聞いていて、無理な命令を出

したと思っているかもしれません。
【学部長（大西代読）】
本日の記念事業の開催に当たっては、お忙しい中、ご登壇をご快諾いただいた先生方に心より感謝申し上げます。旧制高等学校 OB の皆様には、70 有余年の星霜を経て、今なおあせることのない富山高等学校愛に背中を大きく後押ししていただきました。富山大学人文学部の同窓会の皆さま、富山八雲会の皆さまにも多大な協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。
また、内輪の話になりますが、本記念事業のために半年以上にわたって議論を重ねた本記念事業ワーキンググループの人文学部教員の皆さま、細かな手配をこなしていただいた人文学部職員の皆さまにも、厚く御礼申し上げます。そして在学生、卒業生の皆さん、本日の記念事業によって、自分の学び舎が、かくも理想高き誇るべきものであることを知り、今後の皆さんの人生の糧となり、自分で納得できる人生を歩むための一助となることを、私どもは心より願っています。それでは記念講演、シンポジウムを存分にお楽しみください。
【大西】代読は以上です。それでは本日はよろしくお願いします。

【司会】どうもありがとうございました。記念講演に移りますが、その前に先立ちまして、2点ご案内させていただきます。本日の講演会およびシンポジウムは、Zoom にて同時配信させていただいています。また記録のためレコーディングもさせていただいていますので、ご了承ください。Zoom でご参加の方は、もし思うことなどがありましたら、チャット等でコメントを随時入れていただいて結構です。
ご講演の後に質疑の時間を設けますが、その質疑の際に、チャットでしたら随時ご質問を入れておいていただいて結構ですが、お答えするのは講演の後ということになりますので、ご了承ください。また、手を挙げてご発言ということについては、講演の後の質疑の時に随時受け付けますので、途中でのご発言等はなさらないように、Zoom でお入りの方はマイクとカメラはオフで聴講していただければと思いますので、よろしくお願いします。
さらに本日、この記念講演会のために、縁路はるばる南日恒太郎初代校長の曽孫に当たられます南日賢様がこの会場にいらしてくださっています。本当に嬉しいことで、こうしてご縁をつないでいただけるということで、一言お言葉をいただければと思います。よろしくお願いします。
【南日】南日恒太郎の曽孫の南日賢です。大変僭越ながら、一言ご挨拶させていただきます。
ヘルン文庫創設の時期にちょうど関東大震災という大きな出来事があり、その混乱の中で、富山高等学校ができ、ヘルン文庫ができました。そこから 100 年経ったところで能登の地震が起きたことには非常にご縁を感じます。そうしたいろいろなことがある中ですけれども、何にせよ馬場はる刀至から非常に多大なご寄附をいただいたおかげで、富山高等学校、のちの富山大学ができて、ヘルン文庫ができたということがあると思っています。
亡き父も、晩年富山に何度もお呼びいただきまして、このヘルン文庫についていろいろとお話しさせていただきました。今後もぜひ富山の皆さんにヘルン文庫の志を継いでいただいて、また、当然ですけれども、世界の皆さんにご活用いただけたら、これ以上の喜びはないと思います。本日はどうもありがとうございます。おめでとうございました。

【司会】南日様、ありがとうございました。本日はどうぞよろしくお願いします。
【司会】それでは記念講演会に移らせていただきます。京都大学教授の田中智子先生に「旧制高校設立史の中の富山高等学校―歴史的位置と意義―」という題目でお話しいただきます。簡単に田中先生の紹介をさせていただきますが、ご出身は横浜で、京都大学に入学後文学部史学科で日本近現代史を専攻なさいました。京都大学で文学博士号をお取りになっています。

田中先生は、近代日本の旧制高等学校や中学校、帝国大学、あるいはキリスト教をはじめとする宗教系の学校や医学校などの歴史を、地域との関わりから研究していらっしゃいます。また、自治体史の編纂・執筆や文化財に関わる仕事、女性史なども手掛けていらっしゃいます。大谷学、同志社大学を経て、現在京都大学で教鞭を執っておられます。それでは田中先生、よろしくお願いします。

【田中】田中です。今日はどうぞよろしくお願いします。先ほどご紹介いただいたとおりの経歴の持ち主ですが、いま一度軽く自己紹介をさせていただいて「旧制高校設立史の中の富山高等学校」という題目でお話させていただきたいと思います。

私は京都でずっと学んでいまして、旧制高校の中の三高と呼ばれる第三高等中学校、第三高等学校をまず初めに研究対象としました。そこから始まりまして、旧制高校、特に最初は５つできるのですけれども、三高も含めての学校がどのように地域に、なぜその場所に置かれるようになったのかを研究してきた次第です。

それから、これは今日のためにやってきたわけではないのですが、中学校の形成史をずっと共同プロジェクトで研究しています。その中でたまたま石川県と富山県という２つの県を、高知県とともに担当しました。そのような経験も踏まえながら、旧制富山高校については知見がない状態から、逆に全国的に、あるいは別の学校のケースを通して見た時に、富山高校の設立過程はどのように見えるかという観点からお話ができればと思っています。

特に「地域」という視点を盛り込みたいと思っていますが、地域にとっての高等学校を呼ぶ時に、どう表現していいか常に迷っています。「ハイレベルな教育機関」といいますと、何か今日的な香りが強くなってしまいます。当時、ハイレベルと称していたわけではありません。また、中等教育機関や高等教育機関というように段階的には分かれてしまうものをひとまとめにして、どのように表現したらいいのかとなかなか悩んでいるところです。

史料用語で言いますと、「高尚な学校」という言い方が法律の中によく出てきます。恐らくそれが当時の用語としては適切な表現だと思っています。この「高尚な学校」として、富山県に旧制の富山高等学校が出てきたという過程を、高等学校史・高等学校制度全体の性格を、見つめ直すことにつなげていければと思っています。

本日の話ですが、まずひとつ目に高等学校ができる以前の話、要するに富山県の「中学校」が高尚な学校だったわけですけれども、これが大体明治の初めから1880年代の前半にどのよ

うに形成されてきたのかということをお話しします。それからその次に、いわゆる四高が金沢にできた時に、富山県はどのように位置付けられていたかという話をします。

それから三番目に、高等学校の誘致と呼ばれる現象が各地で起こってきた1890年代の終わり、世紀転換期、日清・日露戦間期ということになりますが、その時代において、富山県はどのような位置付けになっていただろうかということを考え、そして最後にようやく今回の主役たる富山高等学校の誕生が、これまでの話の上に、どのように乗っかってくるかという形で、話を組み立てられればと思っています。

ですから私の話は、学校がどのように地域にできてくるかという趣旨になってしまいます。本来、学校の歴史というのは、その中でいかなる教育的営みが学科内・学科外で営まれてきたかということ、教員・学生を主人公として、語られるべきものだと思っていますけれども、その辺に触れることができない枠組での話となることをご了承いただければと思っています。

まず、高等学校設立の前史として、富山県の中学校の話をします。富山県は、戦前であれば義務教育に当たる初等教育、すなわち小学校ですが、ここを超える「高尚な教育」をどのように考えていたのかということです。ここで押さえておかなくてはならないのは、富山県がそもそもどのような県なのかということになります。

既に皆さまご承知のこととは思いますが、この県は廃藩置県以降10年ほど複雑な経緯をたどりつつ、富山県の今日のような体裁を整えていったということになります。大まかに分けますと、1つ目の時代が、明治4年に新川県が設置され（西のほう、射水郡は七尾県に属しているという時期もありましたが)、た時代です。

それから2つ目に、石川県に富山県が入ってしまった時代です。石川県時代が明治9年からありました。そして3つ目に富山県が再置される時代を迎えます。この3つの時代に分けて、それぞれの時代における、富山県の初等教育を超える部分の教育構想というものを考えてみたいと思います。

まず新川県の時代ですが､この時代には中学校は置かれません｡中学校は構想止まりに終わった時代だといえます。しかしこの県は、文部省の中央集権的な学制という、まさに絵に描いた餅的な法令が出されるわけですけれども、これに基づいて中学区を県内5つにブロック分けして設け、それぞれに各1校中学校を置こうという構想までは立てていました。

東のほうから、魚津に1校置く、それから富山町を神通川で仕切って東西に1校ずつ置く、これで3つです。それから高岡に1つ、それから福野に1つ置くという形で、一応構想としては中学を5つ置こうということが提起されてはいました。そこまでいったところで、先ほど申しましたように、石川県に併合されてしまうことになったわけです。

しかし、この石川県時代になって、中学校が誕生します。

明治10年、1877年に、行政区としては石川県ですけれども、今の富山県域内に致遠中学校が誕生しています。ただ、石川県はこの中学校に対して予算を組んではいませんでした。予算を組まずに、地元の町村の住民が経費を支出する形で、維持することが目論まれた中学校だったことになります。

では、この時期の石川県の中等教育行政、中学校をどのようなものにしようとしていたかという構想ですが、石川県には中学校なるものは、「石川県中学校」という形では置かれてはい

ません。石川県の中の金沢区に中学校が置かれるのですけれども、石川県として予算を組んで維持をしている中学校はない状況です。

この時期は、現在の福井県の一部も合併しているような「大石川県」時代でしたが、この石川県は、中心部ではなく周辺部、もしくは金沢区のような、県よりも小単位が設置するもの、それが中学校だという構想を持っていました。

ですから置かれた中学校は、今申しました金沢区の中学校や、あるいは県の支出がない形での富山県域の致遠中学校や、あるいは大聖寺のほうに置かれる中学校で、石川県として予算を組んで維持するのは、より高度な「専門学校」という段階の学校であるべきだという構想を持っていたことになります。

しかし、先ほど申しましたように、新川県時代にはなかった中学校なるものが、現富山県域に石川県時代に誕生したことになる、それが致遠中学校です。ただし、現富山県域の中学校がこの致遠中学校だけだったかというと、それは微妙なところです。1881 年には高岡に越中義塾という学校が開校しています。これは中学校とは見なされませんが、実質的には致遠中学校より規模も大きかったですし、同程度の教育を行う、今日の目から見ると中学校程度の中等教育機関だったということになるかと思います。

この時期の中学校研究をすることの魅力でもあり、ややこしいところでもあるのは、中学校というものは何をもって中学校とするのかということが、そもそも決まっていなかったところです。ですから、この時期に『文部省年報』という形で、各府県がそれぞれの教育の実情を文部省に報告するのですけれども、県によって何を中学校と見なしているかといえば、全くばらばらです。県によっては、中学校は１つしかないと言ってみたり、ある県はありとあらゆる漢学塾に至るまでの教育の場を、全て中学校だと呼称してみたり、要するに中学校というもの自体があやふやな、何をもって中学校と呼ぶのかということ自体が定まっていないという時代でした。

富山県が再発足する前の石川県時代においては、取りあえず致遠中学校は、地元町村の住民が経費を支出しているのだけれども中学校、一方、高岡の越中義塾、これは中学校とは位置付けない、ただしこちらのほうが規模は大きいという状況でした。

このことからわかりますのは、中学校と呼ぶにせよ、呼ばないにせよ、中等教育レベルの「高尚なる」地域の学校、いわゆる義務教育を超える部分の教育を、民間が資金提供して維持する、そういう文化が、むしろ石川県の周縁部と位置付けられていたが故に継続し得るという構造があったといえると思います。

そして、富山県がいよいよもう一度石川県から分離・発足する時期になります。この時期、1885 年１月に富山県立中学校が成立することになります。この富山県立中学校ですが、一体誰がこの県立中学校を主導して成立せしめたのでしょうか。よその県では、民権運動などが地域の動きとして盛んな中で、ほとんど政治結社がイコール学校と呼ばれる学びの場となる形で、中学校相当の機関ができるパターンもあります。

しかし富山県の場合には、そうした動きの結果というよりも、長州出身の国重正文（この人は富山県令になる前に、京都府で学事に関わっていたという前歴を持つ官僚です）や、よそから来た県の官員が主導する形で、県立中学校が生まれたと考えています。

この時点になりますと、富山県がきちんと地方税という形で県予算を組んで、設立・維持していくことになりましたけれども、やはり有志の7,000円の寄付があったことが、欠かせない金銭的な裏付けであった事実が確認されます。

一方で、そういえば高岡エリアにおきましては越中義塾が存在しましたが、これを県立中学校の分校と位置付けようという計画も、県会の中では審議されています。

この時期、私立の学校は全国でおしなべて厳しい状況にありました。これは慶應だろうが、早稲田の前身の東京専門学校であろうが、同志社であろうが、同じです。1883年の暮れに徴兵令が改正されまして、官公立以外の私立学校に関しては、徴兵猶予の特典を付与しないという法令改正があり、どこの私立学校でもこれによって生徒が激減することが非常に危惧される状況になっていました。

これは富山県下とて同じことです。越中義塾は、あのように富山に置かれている致遠中学校をしのぐほどの勢いを誇った学校ではありましたが、この徴兵令改正によって窮地に立たされることになりました。そしてこれを県立中学校の分校と位置付ける話も出ましたし、かつての構想を振り返り、県会では福野や魚津にも分校を置こうという構想も出ますけれども、いかんせんそれが予算の面で果たされることはなく、次の時代を迎えていくことになりました。

ですから、この富山県が再置された時期というのは、富山県としての「高尚なる」学校として、県立中学校がその地位にあるということを確立していく発端です。ただしその背後には、民間の資金も存在している状況だったと思います。

さて、その次に、四高ができる時代です。金沢にある四高ですけれども、私がずっと「よんこう」と呼んでいたら、四高のOBの方々に「しこう」と言えと言われて、ある時期から非常に気を付けて、「しこう」と言おうと心してきました。高等学校になるのは1894年のことですが、その前に高等中学校と呼んでいた時期があり、実はこの時期こそが大変重要な時期だったと思っています。この第四高等中学校ができた時期のことを、石川県の立場や金沢の立場からはよく説かれるところですけれども、富山県の立場から振り返りたいというのが、次の話です。

1886年4月10日に中学校令が公布されました。これは世に言う森有礼文政期の諸学校令と呼ばれるものの中の一つです。

この諸学校令というものの特徴は、諸学校令という一つの法令があったわけではないところです。すなわちその前の学制や教育令、今日の学校教育法や教育基本法に当たるような教育制度全般に関わる根本法といいますか、そうしたものが出ることなく、便宜的に「諸学校令」とまとめて呼ばれたようなものです。すなわち帝国大学令があり、小学校令があり、師範学校令があり、中学校令があり、諸学校通則があると。それの総体を諸学校令と呼んでいるだけであって、中身は別々の学校ごとの法令になっているところが特徴です。

ですから、実は非常に危うい法制度といいますか、総則的なものがなく、何をもって官立学校と呼ぶのか、何をもって公立学校と呼ぶのか、何をもって私立学校と呼ぶのかといった基本的な定義付けがないままに、それぞれの階梯の学校が走り出す状態でした。

この一つに中学校令というものがありまして、よく考えてみれば、普通に小中大でいいところを、なぜ今日に至る小中高大という四階梯になっているのだろうという、その制度の始まりがここです。中学校が高等中学校と尋常中学校に分かれ、そしてこの中学校がその後、1894

年になって高等学校になることで、今もその残滓（ざんし）として、小中高大という４つの教育課程が続いているわけです。

中学校令の中で定められたところのまず１つが、高等中学校制度というものです。ここで明確に官立だと述べていないところが、なかなかにくいところなのですけれども。文部大臣が管轄する学校ということのみが法令に記載され、そして発足します。そしてこの中学校令は９条までありますが、第４条の中で、全国５カ所に設置することが決まっていました。

先ほど触れました1872年の最初の学制は、絵に描いた餅と言いましたけれども、例えば全国を８大学区に分けて、それぞれの拠点はここに置く、そしてそれをさらに32個の中学区に分けてという形で、拠点や分け方をきちんと示した上で始まった制度です。

しかしそれは、そのようにうまくいくはずもなく、全国を８大学区に分けてそれぞれに大学を置くなどと言いましたけれども､結局は東京大学が少したってできるぐらいのところでして、つまるところ８つの大学などは全く影も形もないというのが学制の時代でした。

そしてこれがまたにくいところといいますか、うまいところといいますか、緩いところといいますか、曖昧なところといいますか、このいわゆる諸学校令という時代には、学制のようにどこに拠点を置くといったことを定めませんでした。取りあえず全国５カ所に置くということだけを述べて、そして走りながら考えたところが、現実対応的といいますか、地域の反応を見ながら決めようという柔軟性を持った法令だったと考えています。

ここでヘルンさんゆかりの五高を含みます全国の５カ所の高等中学校が、別添しました表Ａに示すように定まってきます。ただしこれは、後で申しますように、最初から場所が決まっていたのではなく、一種のオーディション方式というか、５カ所に置きますよと言って、そして反応がいいところに置いていく形で発足したところがミソです。それから県立中学校は尋常中学校になりまして、ですから富山県の中学校も、ここで富山県の尋常中学校ということになります。

しかし県のお金を支出するのは１校に限るということになりました。富山県の場合には、幸いにして富山県立中学校１校しかありませんでしたので、さしたる変化もなかったのですが、よその県におきましては、幾つも県の中学校をつくっていたのに、このような中学校令が出たので、ひとつという最低限にまとめなくてはいけないということで、右往左往する状況もありました。

そして11月になりまして、全国５カ所に置きましょうといった中のひとつの、第四高等中学校が金沢に置かれることが決定したわけです。この５つの高等中学校の場所が決まっていく経緯は、誘致ではなく、文部省の側が「お宅どうですか」というふうにさりげなく投げ掛けて、それを地元府県が受け入れたかどうか、受け入れと呼ぶほうがまだいい段階ではないかと思っています。

その中でも唯一、ここは誘致と呼んでもいいとの反応をみせたのが、石川県でした。石川県の県会議員たちが、東京都に陳情に行く、あるいは文部高官が来た時に接待をするという活動を繰り広げまして、ここだけは誘致運動があったと呼んでいい場所だと思っています。

そしてこの時、大事だったのは、設置に当たっての初期費用を支弁できるかどうかが、全国５カ所のひとつになれるかどうか、そこに置かれるかが決められる際のポイントになっていま

した。大体一律 10 万円出せばという話で、当時の府県の総予算の 4 分の 1 ほどの額になりますけれども、第四高等中学校の場合には、旧藩主の前田家が 8 割方を支出する形で、残りは県の役人の寄付などで、この 10 万円が揃えられました。ですから、ここに関しましては、第四高等中学校という文部大臣の管轄する学校ではありましたけれども、まるで藩校といってもいい形で誕生したと思います。

表 A にまとめましたが、地元での支弁の仕方もいろいろでした。前田のお殿様はこうしたことにお金をぽんと出す殿様で、8 割方を支弁しますが、仙台の第二高等中学校の場合には、伊達の殿様はしぶしぶ 5,000 円出すかと言っていますが、確認したところでは、どうも出した形跡がありません。　この時、仙台は天災もあってなかなか大変だったのですけれども、ほとんど税ではないかと思うような、直接恩恵を受けないような、宮城県の郡部に至るまで、まるで今の町内会費のように小口のお金が集められて、耳を揃えた状況になっています。

その他、熊本の細川のお殿様は、前田ほどではないけれども出したようだ等々、それぞれ違います。例えば京都の三高の場合ですと、もともと大阪にあったものが京都に来る形になるのですけれども、地域の寄付というよりも、京都府会で予算を組んで、初期費用を支弁するという形で（当時の地方税規則、府県会規則などに照らすとおかしなことだったのですけれども）、初期費用が調えられるところもありました。

石川県の場合には、まるで藩校と申しました。けれども、1880 年代の終わりから 90 年代にかけては、やはり士族の町金沢ではありつつも、だんだん新たに商工業者層の力も増してきていて、その階層が第四高等中学校を自分たちの学校だと思い、また懐もはたくという姿勢が見えてきているのも特徴かと思います。

これと並行しまして、第四高等中学校の「設置区域」、いわゆる学区ですが、これがどこなのかということが、後付けで決まりました。

スライドに北海道・沖縄を除く全国のこの時にできたブロック割の図を示しましたが、この第四区は、構成県の数が極端に少ないという特徴を持っています。例えば京都を含む第三区ですと、15 府県が第三区に所属しています。それと比較して、この第四区は 4 つしか県がないという、非常にアンバランスなブロック割が生じたことになります。

おそらく、最初に全国に 5 つ置きますよということを漠然と公布し、地域の反応を見ました。多分文部省の最初の構想としては、岡山や広島あたりに 1 つ置くのが地域バランス的にはいいと思っていたのだろうと、今のところ想像しています。ところが、最初の設置費用を出せるかどうかをポイントにした時に、石川県・金沢が予想外に頑張りを見せてしまって、仕方がないから 5 つの枠のうち 1 つを、この金沢に置かざるを得ないことになってしまった。その上で、では全国をどのようにブロック割しようかと考えた時に、やむなく北陸 4 県で構成する第四区を置かざるを得ないことになったと考えています。

北陸 4 県というくくりについて、ぜひこれは皆さまにご知見を仰ぎたいところなのですけれども、「北陸」というのは一種の融通無碍（むげ）なところがあり、北陸 2 県と言ったり、北陸 3 県と言ったり、北陸 4 県と言ったりします。読売新聞が配られているのは北陸 2 県で、石川・富山だけですと言われたこともありますし、福井を含めて北陸 3 県という区割りにお目にかかったこともあります。私は今のところ、新潟を含めての北陸 4 県というくくりは、もしか

すると高等中学校制度の設置区割りに起源を持つのではないかと思っているのですけれども、異論があればぜひ教えていただきたいところです。

なぜこのブロック割の問題が大事かといいますと、中学校令の第5条は、「設置区域」を、学校をつくる初期投資だけではなく、それを恒常的に毎年維持していく維持費用の単位とも考えていて、それが大問題になってしまう理由でもありました。文部大臣管轄下にある学校なのだけれども、維持費用は国と府県とが折半で出すこともできるという条文が挟まっています。この学校は全国どこからも来られるのですけれども、ブロックの中では通学区的な無試験入学も可能という機能も果たしている同時に、経費負担区でもあるという区割りです。

そして、経費を4つの区の中の県でもってどのように割ろうかという、連合委員会というものが開かれます。今日も時々話に出ます、府県広域連合のような会議が開かれることになりまして、高等中学校の通常経費を巡って4府県が相談することになりました。各県会から3人が出てきまして、都合12名を構成員とする府県連合委員会が開かれたわけです。

この時に生じた動きの特徴は、石川県以外の3つの県が、なるべく多くの負担を石川県に押し付けようとしたことです。本来、これは文部省から大体の青写真が示されていて、第四高等中学校が置かれる石川県が、全体的に2.5割多く持てばいいという原案を示していました。

しかし表Bにもありますように、全国どこでもそれぞれいろいろな動きが起きました。例えば第三区であれば、京都に三高本体は置かれるけれども、医学部は岡山に置かれます。第一区であれば東京に一高はあるけれども、医学部は千葉に置かれます。五高もそうで、熊本に本体があるけれども医学部は長崎にするなどです。そういう分置が行われていましたが、この第四区は医学部も石川に置いていますし、もっと石川県に負担をさせてしまえということで、3.5割を石川県に押し付ける新案が、この合議体で決定することになりました。

その他の負担に関しましては、それぞれの県がどれくらい裕福か、要するに税収入がどれくらいあるかを基準に、割り振られることになっていました。その結果、表Bを見ていただくといいのですけれども、結局この高等中学校制度の下で、全国で一番損をしたのは新潟県だろうという状況になりました。どういうことかといいますと、新潟県は福井や富山に比べても、言ってみれば裕福な県です。ですから地方税を基準に分担を決めるということになると、石川県は設置地ですから、あらかじめ多く課しておくことにしても、残りを裕福度に準じて分けると、新潟県に多くの分担金が来てしまうことになります。

それに加えて、新潟の言い分は、誰が金沢などに行くかという話です。鉄道がいつ敷かれたかをご参考までに記しましたけれども、北陸本線の金沢・富山駅間が開通するのが19世紀の終わりごろ、そして新潟・富山駅の間も1913年になってようやく、という状況です。考えてみますと、金沢の学校には新潟県の子弟は行かない。まだ東京や仙台のほうが便利で行きやすい。それなのにこのブロック割が存在して、新潟県は第四区ということになり、多くの負担を課せられるということで、大変な抵抗をすることになります。

新潟県は、このような現実を認められるものか、単独で高等中学校をつくってしまえという運動を1887年に繰り広げることになります。この高等中学校制度は、大変柔軟性のある曖昧な、他の言い方をするといいかげんな制度でしたので、全国に5校といっても、5校しかつくってはいけないと言っているわけではないというところがミソでした。

諸学校通則によって、地域の側がきちんと設置・維持費用を支弁できるならば、官立並みの扱いにして高等中学校を建てることもできるということになっていました。山口であれば毛利家や、当時のときめく官僚たちの財を元にした、今日も存在している地域の教育支援団体ですけれども、防長教育会の財によって、山口高等中学校という単独のものができています。鹿児島の場合も、島津家の財によって造士館という高等中学校が誕生しています。

このことを想起せよと、新潟県では知事以下の呼びかけがあり、県下一円から50万以上寄付金を集めれば、新潟に単独の高等中学校をつくることができるとして、寄付金集め運動を展開することになります。文明を成り立たせるには智富兼有が必要で、新潟県は富のほうはあるけれども、智はこれからだから、ぜひ高等中学校が単独で欲しい、それは制度的にも認められることだからという話でしたが、やはりあまりにも達成困難な額であり、実現に至りませんでした。

そうした経緯がありましたので、先ほど見ました第四区の4県連合委員会や、あるいは新潟県の県会においては、第四区などに入れられていては大損をしてしまうので、続いて第一区に移りたい運動を繰り広げることになります。確かにそのとおりで、第一区に移れば、ここは11府県ありますので、同じ1校を維持するにも分担金が少なくて済みます。そして先ほど申しましたように、新潟県にとってみれば、縁もゆかりもない金沢などに行くよりも、東京に行くほうがまだイメージが湧くということで、第一区への移動を図ろうとしたのです。

それから福井県の場合、また違った成り立ちをしています。これも廃藩置県の時のまだごちゃごちゃとした時代から、福井県・敦賀県になって、福井県は足羽県と呼ばれるようになり、そして1873年に敦賀県となり、76年に石川県と滋賀県に分割される時期を経て、81年に福井県が再置されるという経緯をたどっています。

ですから、大くくりに申しますと富山県と同じで、大・石川県に東のほうが含まれていた時期がある県ですけれども、先ほど見ました第四区連合委員会におきましては、福井県からも金沢の第四高等中学校に行く者はいないだろうという発言が出ます。これが福井県の県会議員から出ているのではなく、新潟県の県会議員から捨てぜりふ的に、反乱分子の仲間探し的に出ているというのも、なかなか面白いところです。

要するに福井県の場合には、半分は滋賀県に入っていたこともありますし、交通事情を見ても、第三区の高等中学校がある京都や、あるいは高等中学校が京都に来る前は大阪に所在していましたけれども、そちらへの交通ルートは、むしろ金沢に向かうよりも早くから整っている状況でした。では実質的には誰の、どこのための第四高等中学校なのかという状態にになっていたわけです。その時の富山県は、言ってみれば、結局、新潟県や福井県のような「第四高等中学校との疎遠さ」とは無縁で、いわば忠実な第四区の、金沢に置かれた第四高等中学校の設置区域の構成員であり、傘下県であったと捉えることができると思われます。

それでは次に、この高等中学校が1894年、日清戦争の少し前に高等学校になり、そしてその後、いわゆる世紀転換期を迎える時期の状況を見ていきたいと思います。この時期のキーパーソン、高等教育といいますか「高尚な学校」を考える上での、一種のイデオローグ的な役割を果たしたのが、外山正一という人物です。

この人はミスター帝大、ミスター東大のような人で、もともとは幕臣上がりで、蕃書調所か

ら開成所を経まして、ミシガン大学などの英米留学なども経験している1848年生まれの人物です。職歴で申しましても、この東大系の流れ、東京開成学校から東京大学で教べんを執り、帝大の文科大学長になり、文部大臣なども歴任した人物で、通称赤門天狗などともいわれ、ハイカラなマントなどを来て闊歩していたといわれる人物です。

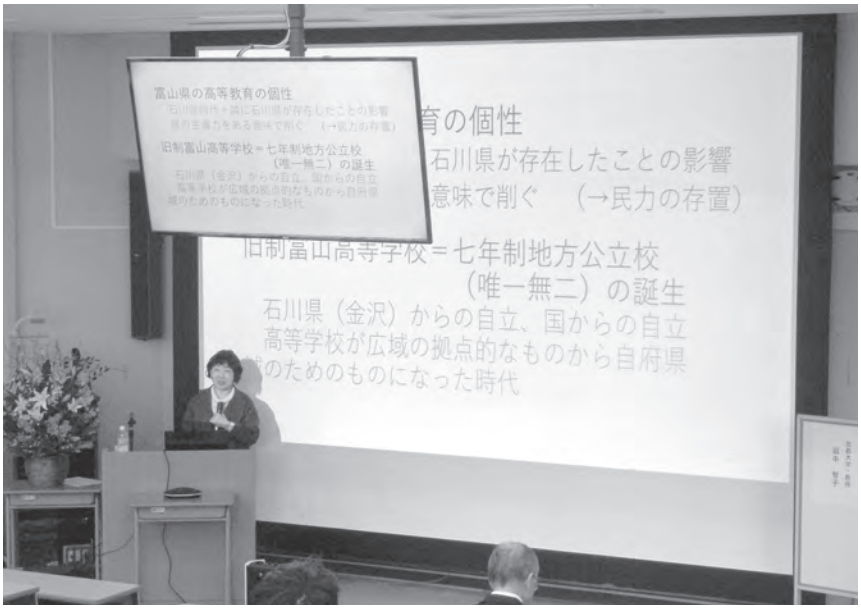
文部大臣になる前、そして文部大臣を辞めてからの晩年にも、各地を講演して回るのですけれども、彼こそが1890年代の後半に自前の高等中学校設立、あるいは高等学校設立を各地の講演会で促し、高等教育の自生を主張した一番の人物です。

この外山正一が、演説記録などを元にしながらそうした構想をまとめ上げたのが、『藩閥の将来』と呼ばれる書物です。題名が本の中身をあまりうまく表していないので、題名は置いておくとして、どういう中身を持つ本だったかといいますと、教育程度から見たいわば県の格付けランキングを示したような一書です。

延々とこの人が語っているところを、長いので表にまとめて作りましたのが、添付しました表Cです。どれぐらい各府県から高等な中央レベルの学校に人材が進学できているかということを示した格付け順位です。これを彼は全国的に説いて回ったのです。

このように、各府県を内心競わせながら、そして近世以前の郷土の偉人を想起させて、教育振興を呼びかけるという話しぶりになっている本です。「わが輩は各府県人に忠告するのである。彼らの祖先がその地方に与えたる名誉を、今日、われらの代に至りて失っては決してならぬということを、わが輩は忠告するのである」と言いました。例えば愛知県に対しましては、この時期はまだ第八高等学校も置かれていないのですけれども、「何をしているのだ。自分たちで金を準備して、高等学校を自前でつくらなければいけないのだ。織田信長が泣いているぞ。豊臣秀吉が泣いているぞ」と説いて聞かせる形になっています。

この時期、学事のみならず、例えば鉄道もそうですし、内国博覧会のようなイベントもそうですけれども、いわゆる誘致合戦が、県同士の争い、あるいは県内での都市の争いとして本格化したと考えていいかと思います。先ほどの1886年の第四高等中学校の時分には、金沢を除いては、まだ誘致という動きはなく、文部省に言われるのでおそるおそる学校を置いたのが実態だったと思います。しかし、この時期になりますと、各府県が競わせられるような形で、教育施設をつくるべしとハッパをかけられることになります。



文部省の仕事というのは大学教育を行うこと、教員養成を行うこと、義務教育を行うことである、であるから高等学校というのは、

各府県が自力でつくるべきものであって、官がつくるべきものではないというのが、外山の発想の根底にあったところでした。

しかし実態としましては、地元の側は文部省が官立校をつくって維持してくれればいいと期待します。そして文部省の側は、官立校を置いてやるけれども、初期費用は地元が負担してほしいと考える。そういう官と地元との関係の下に、戦前の日本の官立学校というものは、高等学校に限らず、つくられていくというのが、基本的な構図だったと考えられると思います。

そしてこの表C、外山が煽るように呼びかけてきた各府県の進学実績格付けランキングですけれども、はてさて富山県はどこに位置しているのか。探すのが、なかなか難しいところです。

富山県は、帝大、高等学校、高等商業、その他専門学校に学ぶ文学生の数で言いますと、富山県は35位に付けています。実際に帝大に進む人の数も全国33位、高等学校26位、高等商業42位、慶應義塾41位、その他専門学校38位ということで、帝大の学生の県内人口比の割合でいうと、全国第29位ですから、半分よりも下ということになり、さして進学実績が奮う県ではなかったということになると思います。

県によっては、海軍兵学校や陸軍士官学校などに行く武学生の数でいえば、文学生よりもいい成績を示しているという県も見当たるのですけれども、富山県の場合はそういうわけではなくて武学生のほうも多くはなく、さらに低いところに位置しているという状況が、この世紀転換期の富山県の進学実績だと確認することができます。

この時期、1899年に、文部省は一種のグランドデザインとして、八年計画という大風呂敷を広げています。樺山資紀という薩摩出身の文部大臣だった時ですけれども、明治40年までの8年間に、各種の官立高等教育機関を増設していくという計画を立てました。この時、岡山に六高を置くことが決まりかけている時期ですが、高等学校を5校から明治40年までに12校まで増やす計画を立てました。結局、計画は青写真止まりになりまして、ご存じのようなナンバースクール8校の設置にとどまったのが実態です。

ただし、このような大きな風呂敷を文部省が出していることが各地の新聞で盛んに報道されるようになり、すわ、と各地が色めき立って、置くならばうちに置いてくれという誘致合戦の状況を呈するのが、1899年あたりの全国的な様子でした。

よく知られていることですけれども、岡山と広島では、どちらが第六高等学校の設置地になるかということで、衆議院議員が帝国議会の廊下でもみ合いをしたとか、岡山と広島のそれぞれの地方紙が、いかにわが県が教育にふさわしい都市であり、お隣は教育にふさわしくない都市であるかを口汚くののしり合ったりしたとかいう時期です。

この時期、富山界隈で大きな運動を繰り広げていたのが、先ほど見た新潟です。先ほど申しましたように新潟は、1886年に高等中学校制度ができた時に、結局は単年度で終わりますけれども、設置維持のための資金、分担金を多く課されて、しかも何のメリットもないということで、単独で高等中学校をつくりたいと考える。しかしそれはやはり無理だという経緯がありました。ここで再びその夢をということで、1899年あたりに新潟で高等学校設立運動が再燃しています。

地域の地方議会の議員、地域から選出された衆議院議員、地域から中央官僚になった人、それから地方紙、これらが一緒くたに一大キャンペーン、設立運動を広げるような時期です。新

潟新聞が5月4日に、これはこのような区割りをつくって、そして新潟に新たに高等学校を置いてはどうだということを、文部省がどう言うかも考えず、勝手に自己提起しているというのがこの図です。

これを見ますと、新潟、長野や福島の一部、山形、秋田、青森の西半分をブロックにしようという区割りが想定されています。新潟の頭の中では、富山との接続が全く意識されていなかったということが、この地図でもわかるところです。要するに、この世紀転換期の時点でも、富山というのは、この地図で新潟が認識しているように、金沢にくっつく地域であると、よそからも想定されていました。

この時、新潟県が主に敵と考えているのは富山県ではなく長野県なのですけれども、長野は長野で、同じ県の中で松本VS上田VS長野の戦いを繰り広げている状況です。しかし、富山はどこ吹く風といいますか、忠実な四高の傘下県としてまだ過ごしている状況であったかと思います。

その後、さらさらと時が流れまして、大正期を迎え、いよいよ本日、本題にしなくてはならない富山高等学校の誕生に話が立ち至るわけです。先ほど学部長のお話にもありましたけれども、1918年、第一次大戦後に新しい高等学校令が出ました。ここで高等学校は公立、私立としても設置できるということが明示され、また七年制の高等学校制が本来あるべき姿として提示されることになりました。七年制、すなわち尋常科4年と高等科3年がひとまとまりで、男子の高等普通教育を構成するというビジョンが示されたことになります。

しかし、よくいわれますように、例えば三高などもそうですけれども、実態としては七年制ではなく、従来の大学予科というのを高等科に変えただけで、それが主流として続いているのは、変わらない部分でもあったといえます。ともあれ、この時期に七年制高校は、次のような形で生まれています。

官立の新設七年制高校は、大正期は東京、それから植民地としていた台北の2つのみで、私立として武蔵、甲南、成蹊、成城ができます。そして公立として富山、浪速、昭和期に入り東京府が東京府立と、七年制の学校が順次置かれていきます。

このラインナップを見ていただいてもおわかりのように、官立、公立や私立も含めて、大都市中心にこれらの学校は基本的にできていて、進学希望者の激増を背景にした大都市中心の官立あるいは私立・公立の七年制。、そこで富山に、というのは、誰が見ても異質な存在として際立っていることになろうかと思います。

1924年に富山高等学校が誕生しましたが、全国初の公立で、そして唯一の県の地方の中学として誕生しているため、先ほどの文脈を踏まえますと、赤門天狗外山正一が見たらさぞかし喜んだであろう、地域の力でもって高等学校が設置・維持されるのは、彼に言わせると、これぞ理想の形態というべきものであっただろうと思われます。

そして皆さまもよくご存じのように、馬場家から大きな私財の寄付があったことが、設立資金の裏付けとして大事でした。初期の設置費用、数年間の維持費用、それから10万円の使い道として優秀な教員の確保・教育のために外国留学基金というものが設けられている点は、ひとつの特徴と見るべき点かなと思っています。

この馬場家の話は、私などよりも皆さまのほうがよほどお詳しいところなので、この話自体

を深く掘り下げることはお任せしまして、これを全国的な動向の中において、相対化して見てみようと思います。

まず、先ほども挙げましたような私立の新設校がどのように設置資金を調達しているかと申しますと、例えば武蔵ですと東武鉄道などで知られる実業家・根津嘉一郎の資産が元手になっています。それから学習院、これは七年制というよりも、既に初等6年、中等5年を持っている華族の学校でしたけれども、これを拡張していく形で高等学校も増設されていきます。

それから甲南は、東京海上や後の川崎造船でも知られる関西の財界人・平生釟三郎らの資産が元になっています。成蹊や成城は、教育家と呼べるような人物の、このような教育を行いたいという、いわゆる大正デモクラシーの大正新教育というような流れも汲んではいますけれども、その新しい教育構想を実現するには、成蹊の場合には三菱や今村銀行の財が背後にあり、成城の場合も、生徒の保護者でもありましたが、広岡さんたちの資産がバックにある形になっています。

では官立の場合はどうかということです。先ほど申しましたように、戦前の日本の官立学校というのは、官立の学校といいつつも、国が丸々金を出しているケースが意外に少なく、地域の側が何らかの形で工面して、その設置地のポジションを得る形で設置されていました。富山高等学校も、最終的には官立のいわゆる地名校としてここに加わることになりますが、それらの学校がどのような地元の動きや負担を元に出来上がってきたか表にしたのが、表Dです。

まずはじめに、新潟・松本・山口・松山の4つの学校ができていますけれども、新潟は言ってみれば1886年以来、実に30年以上の宿願といいますか、臥薪嘗胆（がしんしょうたん）の思いをようやくここで実現したことになります。官立ができて万歳、ではありましたけれども、実際に寄付金、土地買収費などを県の側で支弁することが条件になっています。

新潟の場合もそうですけれども、官立校ができる時に一番多いパターンとして、府県と市とでどちらが多く負担するか、負担を押し付け合うかという泥仕合が繰り広げられています。

このパターンが、ほぼ全ての官立地名校の設置地に見られました。要するに、最初に地域の側がこのような地方税支弁と地域有志の寄付という形で、設立のための資金を出し、それによって設置地になるというポジションを得る。大体この①のパターンになります。

ところが、そうではないパターンも見られます。例えば山形高等学校があります。ここは第二高等中学校が仙台に置かれた時をほうふつとさせるのですけれども、地元の住民に賦課するという形での捻出過程が見られるというのが、山形の一つの特徴でもあります。

それから、まだ消えぬか藩主家という感じなのですけれども、大正期になっても、やはり旧藩主家からの拠金があるパターンも複数見られました。例えば山口の場合には毛利家が金を出しますし、ヘルンさんゆかりの松江の場合も松平家がお金を出します。高知の場合も、山内家の私財の拠出が確認されるところです。

これらは①②③④ときれいに分かれるわけではなく、各地で複合型となりますけれども、④の資産家の拠金が、設置に当たって一番のベースになっているところがあります。山口は毛利家も金を出していますが、藤田財閥や久原財閥などもお金を出して、それによって山口高等学校が出来上がっていることになります。

一方水戸の場合、当時、船成金といわれた内田という人物が創設資金として100万円を寄付

することのみで最初の設置資金が賄われたことになっています。

では富山の場合を、先ほど見た私立のパターン、今踏まえた官立校のパターンを踏まえて見ますと、私立各校や④、資産家のタイプということになるかと思います。ただし先ほど見ましたような、例えば高知であれば明治期に発展した岩崎さん、水戸であればまさに直前の第１次世界大戦によって財を成した内田さんなどと異なり、近世以来の地域の廻船（かいせん）問屋という有力な資産家の財が用いられている点において、独特さが見られると思っています。

この後はよく知られた話になります。馬場家の子弟の保護者という形で、寄附を主導したはる氏に言わせますと、自分の子どもが慶應大学に入学したけれども、その試験勉強のために苦労するのを見ているとなかなかふびんである。本県には高等商業や薬事専門学校があるけれども、高等学校が本県にあったならば他県に出る必要もないそして中等科から高等科へ入学試験を経ずして進める七年制の学校を求めたという話です。

言ってみればここで富山県に「高尚な学校」が自立したといえると思いますが、その背景には中等教育の発展があることは、確認できるところです。「師範学校、中学校、実科高等女学校、高等女学校、工業学校、商業学校、農業学校、商船学校、女子職業学校、総計 30 校を算し」と富山県知事が文部大臣に対して述べています。こうした中等教育の充実ということがあって、高等学校設置がもたらされたことはあるといえると思います。

しかし、この時の富山県の幾つかの本音がうかがえる記事が新聞紙上にあります。「隣県の石川、新潟、長野には既に高等学校の設置があるにもかかわらず、独り本県にはいまだその設置を見ず」という言い方が地元紙に出てきました。ここでようやく、富山県にも競争意識が生まれているというか、隣の県にほぼすべて既に官立の高等学校があるという状況の認識が、確認されるところです。

一方、「文部省に交渉してこれを官立校となすべく、政府当局の了解に努めなかったのは遺憾であって、官立校としないと教授の人選上、はたまた生徒募集に困難な状況に陥ることが憂慮されるが、石川、新潟、松本に既に官立高等校があって、しかし文部省にはその気がなくて県営の計画を立てた」ということで、富山県としては教授人選や生徒募集ということを考えれば、やはり官立校としてつくりたいというのが本音であったのだということが確認できるところです。

文部省の側は、入学志望者の募集については「県内のものなるが故に、入学上の優先権を与えるがごときは認めない方針である」とします。文部省もなかなか都合がいいことを言うなといったところですけれども、県が設置するからといって、県内に入学上の優先権を与えないと文部省は言っていたということがわかります。この辺りに、高等学校を巡る文部省と県の側との一種の緊張関係を見とることができると思います。

このような全国唯一無二の地方における公立の七年制の富山高等学校でしたけれども、1943 年に文部省に移管され、官立ということになったということも、もうご承知のところかと思います。官立高等学校は結局、敗戦時にどれぐらいの府県に置かれたかといいますと、この時（東京は既に都になっています）、47 都道府県のうち大体半数強に官立の高等学校があって、それで敗戦を迎えた状況です。このうちの一角に富山は収まることになります。

やはりその背景には維持経費の膨張があります。最初のうちは馬場さんが財の一部を維持経

費にキープしておいて、利息などで支弁することになりましたけれども、1930年代に入りますと、地方の他の官立地名校と同等の予算を組まざるを得ない状況になっていました。そしてやはり県でもってこれを維持していくことは厳しいというのが、官立化の背景の大きな理由と考えることができます。

最終的に、敗戦時で見てみますと、今示した部分の青色が官立高校の所在府県になっています。富山県は結局、官立校を敗戦時に3つ持っている県になります。高等学校が公立から官立になり、あとは薬事と高等商業がありましたので、3つです。

沖縄県を除いて、敗戦時には北海道も含めて全ての府県に、帝大や高等学校、他の専門学校など、官立校が何らかの形で置かれていました。平均2前後ぐらいの数字ですので、富山県は全国的に見ると、官立校が3つで終戦を迎えたというのは、結果的には多いほうということになります。第四区で見ますと、結局、石川県は4つ持って終戦となりまして、新潟は3つ、福井は1つという状況です。

最後のまとめに入ります。現行の学校教育法は、学校というのは国、地方公共団体、学校法人が設置することができ、国立学校とは国の設置する学校、公立学校とは地方公共団体の設置する学校、私立学校とは学校法人の設置する学校をいうと明確に定めています。第5条においては、学校の設置者が設置する学校を管理し、法令に特別の定めがある場合を除いては、その学校の経費を負担するということが明確に示されているのが、現行の学校教育法です。

しかし戦前は、最初のほうで申しましたように、中学校令が出た時の諸学校令という通称の法体系の時代から、総則に当たるような法がない中において、何を官立と呼び、何を公立と呼び、何を私立と呼ぶのかという明確な規定がないままに、個別法の中で官立高等学校と呼ばれてみたり、公立学校もつくっていいとされたり、というように規定が動いていった時代です。

特に明治の初めの時期の、あるいは中期にかけての高等中学校というのを見ていただきますと、国が置いたはずの高等中学校なのに、その設置費用は地元が支弁することが当たり前になっています。そして最初の頃だけで、地域の側の反発が起きて、制度としては崩壊してしまいますが、維持経費ですら、官立校の維持経費を国と地域で折半するということが行われていた。とにかく「足りない」時代であるから、今のような国立・公立・私立の垣根が非常に曖昧であり、融通無碍であった期間、そのような時代の一端が、今日ご紹介してきたような話になります。

富山県の高等教育の個性ということをあらためて考えますと、大・石川県に含まれていた時代があり、そしてその時代が解消されて、富山県が独立して以降も、隣に石川県が常に厳然と存在していたという特性が大きいことが確認できるわけです。これが一種、県の主導力をそいだ面はあるだろうと考えます。

しかし、第四高等中学校以前の時代からの、中学校の時からを確認しましたけれども、「民」が金を出す文化。伝統と呼んでいいかはまだわかりませんけれども、中学校の時分でも、致遠中学校は、石川県に予算を組んでもらえていない、地元住民のおかげで出来上がっている。富山県中学校になっても、地方税も組まれるけれども、地域からの寄付金もあった。あるいは高岡には中学校と呼ばれないけれども、中学校以上にの求心力をもつ学校があり、それが地元によって維持されている。

こうした民力といいますか、それがあったということ。うまく馬場さんの時代まで話として

つながるかは、いろいろ実証として詰めていかねばならない部分はありますけれども、突然馬場さんが出てきたというよりは、「民」が、地域の高尚なる学校に金を出すという来歴は、もっと前の明治前半のほうまでさかのぼることができるといえるかと思います。

旧制富山高等学校の設置は、本当に唯一無二の高等学校の誕生ということでして、石川県からの自立であり、本来官立にしたかったという思いはあるにせよ、国からの自立でもありました。高等学校は、最初は５つ置くというところに始まった、広域のブロックをつくっての拠点的なものだったのですが、それが一つ一つの府県の域のためのものになっていく過程の中での、象徴的な位置付けを与えられる存在かと思います。

最後に、この学校の歴史が今日に何を語りかけているのかということですけれども、高等教育に熱心な地域というのはどういうものなのでしょうか。官立学校を呼ぶことでしょうか。あるいは自前での教育を続けることでしょうか。私は本来、京都の歴史をひもとくことが多いのですけれども、京都という学校は「官立」が好きです。

最初、第三高等中学校を大阪から剥がしてきた時には、あまり成算がなかったというか、果たしてこのようなよくわからないものを受け入れてよかったのかという不安のなかで、首をかしげながらの官立校の設置だったと思います。しかし、その事実を負の遺産に終わらせないかのごとく、その後、京都帝国大学ができ、奈良に取られてしまいますけれども、女子の高等師範学校を京都に置いてほしいという運動もしています。広島にあった師範学校の設置の際にも、京都は実は手を出していますし、常に官立を欲しがる学都、官立好きな学問の都として、近代を歩んできます。

大阪はその京都に言わせると、あそこは商売の町で、教育に関心がないから、第三高等中学校も大阪から京都に移してしまったなどという話がありますけれども、果たしてそれは教育不熱心といえるのでしょうか。分野にはよりますが、官立に頼らないで自前で教育をするというのが、大阪の一つのスタンスとしてはあります。果たしてどちらが教育熱心といえるのかということは、考えどころです。

そしてさらに、「他に任せる」ことは教育不熱心なのか。官立校あるいは他府県に任せることは、果たして教育不熱心といえるのか。先ほどの日本地図をみていただいても、例えば神奈川県などの東京周りのところは、東京に行けば学校があるということで、官立設置にも、自前の教育というものにも必ずしも熱心ではないということに、結果的になっています。

ではそれは教育不熱心といえるのかどうか。富山県の場合にも、石川県に任せていた時代があったと解釈することはできますが、これが教育不熱心だということには必ずしもつながらず、教育熱心とはどういうことなのか、という問題をよく提起している存在であるように思います。

翻ってみますと、地域における高等教育の自主性とは一体何なのだろうということを、富山

県の歩みは非常によく物語っています。現在の富山県の富山大学というのは、この時期に照らし合わせると官立校ということになりますけれども、この学校も今、地域との連携ということが言われていますが、「地域における高等教育の自主性」を考えさせるのに、十分な歴史を持っている場所と拝察しています。

それでは、私の話はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】田中先生、ありがとうございました。大変興味深いお話で、よくぞ富山でしてくださったと思います。多分フロアの皆さんも、新潟や石川とのせめぎ合いのところなど、田中角栄が最初ではなかったのだと私も初めて気が付きまして、大変面白かったです。

少し時間がありますので、ご質問がおありの方がいらっしゃいましたら、手を挙げていただきましたらマイクを回しますので、会場の方、よろしくお願いします。Zoom のほうからもコメントや質問が寄せられているのですけれども、ひとまず会場のほうから。後ろのほうにまず手を挙げている方がいらっしゃいますので、お願いします。申し訳ありません、お名前と、もし富山高等学校とのご縁がおありでしたら、ご所属というか関係を言っていただけるとありがたいです。よろしくお願いします。

【小松】：小松裕といいます。実は田中先生の先輩に当たられるかと思うのですが、筧田知義という旧制富山高校出身で、富山出身の先生がおられました。京大から富山県立大学に来られた時に、私は少し関わりがあり、お付き合いさせていただいた者です。

筧田先生の『旧制高等学校の成立』や『旧制公立学校の発展』、あるいは富山県立大学で発表された『旧制高等学校教育の終焉』という本を読ませていただきました。その後、あるいは竹内洋さんが『学歴貴族の栄光と挫折』という本を書いて、教養教育に対する疑問といいますか、そういうものを出されています。

私自身は予備校の寮で寮生活を経験したこともあり、木下広次さんが寮生活の旧制高校生活を最初に始められたとか、あるいは旧制教育では、武学を中心に教養教育をされたということで、それなりに評価しています。そういったエリート教育だという批判に対して、今、旧制高校を研究する意義といいますか、そういったものは先生はどのように感じていらっしゃるか、お聞かせいただければと思います。

【田中】ありがとうございます。最初に申しましたように、私はあまり教育の内容のほうに踏み込むことができませんで、設立の過程を追うという形になってしまったのですけれども。今おっしゃったような話が、本来旧制高校の持っている一番の遺産でもあり、考えるべきところなのかと思っています。

私の立場から申しますと、私もまだ、どこでも旧制高校の OB 組織が現役で、寮歌祭などもやっていたような時代も少しは知っています。私は三高の OB 組織にかなり長くお世話になっていたのですけれども、その人たちの持っている、いわゆるノブレス・オブリージや、知的好奇心のようなもの、特にその人たちが旧制高校の当事者だったこともそうですけれども、いわゆる戦後の高度経済成長期を支えたのがちょうどその世代という感じで私は接してきていましたので、この方々の「遺産」は非常に大きいと感じています。

帝大のつながりよりも、旧制高校のつながりであり、三高の場合には必ずしもスムーズにい

くのがいいわけではなく、梅棹忠夫などもそうですけれども、たくさん留年するほうがいいという文化もあり、そうしたいわゆる自由と言われるところは、端で見ていても、どちらかというと、私の目には好ましく映っていました。当然、男文化ですので、自分が排除されている立場であることは頭ではよくわかってはいたのですけれども、接している時にはどちらかというと、感じのいい人たちだという感覚を持っていました。

ですから、パブリックスクールやギムナジウムなどと比較され、否定されることもよくある教育課程ですけれども、洋の東西を問わず、あの時期の男子、青年の、世間と隔絶されつつ、そして若干の鼻持ちならなさは持っていたかもしれないけれども、何かを心得ていた人たちの精神のようなものは、具体的にそれを支えたカリキュラムや教員の分析は必要ですけれども、私としては残ってほしいと思います。特に今、実際の世代がもうほとんど亡くなりつつある時代なので、どうしたらそれが残るのかを考えている状況です。

【司会】ありがとうございます。もう1点ほど、会場のほうからご質問を。松原さん。

【松原】松原と申します。私の亡くなった父親が旧制富山高校の卒業生で、その後京都大学へ進んでいますけれども、こだわりが強くて、京都大学ではなく京都帝国大学と言っていました。一方で母親は南日恒太郎の孫であり、南日さんと同じく私もひ孫に当たるのですけれども…。質問は、レジュメの17ページに、1924年1月に富山高等学校開校と題されてあるのですが、1923年10月に認可を受けて、組織としての富山高校が設立されて、その後、生徒とともに翌年の4月に開学したと、そのような実質的スタートかと私は認識していました。24年1月に開校というのは初めて目にしたのですが、これはどのような状態をおっしゃっているのでしょうか。それと、その後の文章で、唯一の県の中学と書いてあるのは、高等学校ではなく中学でよろしいですか。その2点です。

【田中】これは中学と書いてありますけれども、高等学校です。失礼しました。中学課程のところも、尋常科として含みますけれどもという意味で、これは高等学校です。それから今おっしゃいましたように、その前の年の10月に設立認可受けているのはそのとおりです。なかなかこの辺は、どれをもって開校と見なす日付とするのか、いつも迷うところです。表Dを作りましたけれども、こちらは官制が公布されたところをもって、記しているということです。実際にその後、開校式が行われた時や授業が始まった時、これはどの学校でも、どの日を取るのかなかなか迷うところです。

表のほうにも書きましたように、富山高校の場合、10月に文部省より設置認可を受けているのは、今おっしゃったとおりです。

【中島】ありがとうございます。牧野さん、短ければ少しだけお願いします。

【牧野】：富山八雲会の牧野と申します。そもそも8ページにある大学区制の区割りは、第四区だけ4つで、大変いびつという感じがします。これで言うと単純に4つぐらいにすればいいのに、5つに分けて、その第四区が4県というのは、大変小さいわけですけれども。

例えば昔、福井県と京都の、琵琶湖の間に運河計画というのがありましたよね。ですからそちらのほうだと、当然近畿のほうに意識的には近いだろうと思います。また新潟というのは、多分この当時は東京府よりも大きい、全国で一番くらいの人口がある県のはずです。ですからそういう県を、今から考えると、常識的に、石川県にくっつけておくよりも別にしたほうが、

新潟県や福井県の人の意見のほうが分かる気もするのですが、たった4つの県で第四学区をつくったのは、何か意図があったのでしょうか。他の学区に比べると大きさから見るとアンバランスな気がします。

【田中】申しましたように、法令と聞くと、さぞかしきちんと決めて、隙がないようにできたものだろうと思ってしまうのですが、この諸学校令期に関しては、曖昧というか、いいかげんというか、そうした法体系になっていました。

なぜここで最初に5つと言ってしまったのだろうというのは問題ですけれども、この前の年に全国の教育行政の区割りとして、5つの区割りを置く制度がもう発足していたので、多分それに合わせて、高等中学校も5つ置きますと言ってしまっていたと。しかしブロック割は決めていなくて、何となく頭の中では、多分広島あたりにもう1校置くつもりだったと思うのです。

そうすると、先ほど申しましたように、予定外のことで石川県でやたらと運動が盛り上がってしまったので、もうここに置かざるを得ないことになってしまいました。それではどのようにしたらいいかとなった時に、青写真的には福井は恐らく第三区に入っていたはずなのですが、これを石川県に近いからということで持ってくる。

新潟県も、第一区のほうにそれまで入っていることが多かったのですけれども、これも仕方がないからくっつける形で、金沢のせいでかなり人工的に第四区をつくらざるを得ず、それの被害に遭ったのが、福井と新潟。富山県は常に一緒だからくっつけておいて、ともかくも被害？をその最小限にとどめておこうという、本当にいんちき極まるというか、場当たり的な。

ただこれがナンバー8までそろった時には、ようやくこのアンバランスさが解消されたというか、6が岡山に置かれ、8は名古屋になりますので、ようやくここできれいな区割りになりました。ですから、最初にその区割りビジョンを示さずに、手を挙げたところのオーディション方式のようにしたところが、このアンバランスさのゆえんだったと思っています。

【司会】ありがとうございました。時間も押していますので、Zoomでご質問・コメントをいただいているのですが、記録で残っていますので、よろしければまた改めて田中先生にも見ていただいて、機会があればということにしたいと思います。先生ありがとうございました。

【司会】ここで、この続きのアジェンダをご説明させていただきます。ヘルン文庫を今日公開していますので、これからご訪問いただけるのですが、私のほうから簡単にヘルン文庫のご紹介をさせていただきたいと思っています。と申しますのも、私は県外や、よそでだいぶヘルン文庫のご紹介をしているのですけれども、なぜか学内や富山県であまりご説明をさせていただく機会がありませんでしたので、少しお話をさせてください。

今から5分ほどお手洗い休憩をさせていただきます。その後3時ちょうどから10分ほどで、私が資料に基づいてヘルン文庫のご案内をさせていただき、その後自由に図書館のほうでヘルン文庫においでいただきましたら、司書がそちらにおりますのでご案内させていただきます。

それから、人文学部の建物の２階にアーカイブ資料室がありまして、今日、鍵を開けていまして、見学していただけるようになっていますので、そちらもご覧いただければと思います。その後４時10分からシンポジウムを始めたいと思います。シンポジウムのほうも引き続き聞いていただければと思います。

（ヘルン文庫の説明）

【司会】それでは、少し時間が押していますが、定刻を過ぎましたので、これから国際シンポジウム「旧制富山高校の至宝『ヘルン文庫』を未来に生かす」ということで、シンポジウムを行わせていただきます。シンポジウムの進行は、引き続きまして中島が務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします。

今回、少しだけ趣旨をお話しさせていただきます。先ほどの富山高等学校設立の経緯という田中先生のお話に続きまして、富山高等学校が今日のわれわれにもたらしてくれたものは幾つもあるわけなのですけれども、その財産の一つがヘルン文庫であろうということです。

ただ、ヘルン文庫に関しましても、ヘルン研究というか、ラフカディオ・ハーン研究という立場から見ても、それからラフカディオ・ハーンの愛好家の方々は、日本全国に八雲会という組織があり、そういう組織の中で愛好会がそろっているのですけれども、正直に言って、世代交代がなかなかうまくいっていません。若年層の方をうまく入れていけないことがあるということです。

また、研究という領域から見ても、さまざまな文化系の学会が、若手の研究者をなかなか呼び込めないというか、特に文化系の研究には逆風が吹いていまして、大学の教員の職にありついてご飯が食べられたのも、われわれか、那須野先生あたりがぎりぎりセーフという感じで、今後大学教員として若い方が研究者をやっていけない状況になっています。

これまでの研究成果、ラフカディオ・ハーン研究一つ取っても目覚ましいものがあるのですが、それを若い世代に継承していきたいと。またヘルン文庫から学んで分かってきたことがいろいろありまして、そういうものを次世代につなげていきたいと。学生さんもそうですけれども、一般の方々にも、ここからこういう展望が開けるのだということで、お三方のお話をしていただく中から、これをどのようにして次世代につなげていくのかを提言、アドバイスをいただきたいというのが、今回のシンポジウムの趣旨です。

そのお三方のうちの、まずトップバッターとして、常葉大学外国語学部助教を務めていらっしゃる那須野絢子先生にお話しいただきたいと思います。私の意図としては、一つは若手代表

で、もう一つは、長らく焼津の小泉八雲記念館というところで、開館当時から学芸員を務めていらっしゃいました。

焼津というのは、先ほど私がお話ししたかどうか失念したのですけれども、小泉八雲が特に東京時代の晩年、焼津の地を愛しまして、夏休みには必ず家族を連れて焼津にいました。しかも少し遊びに行ったのではなく、1カ月など長逗留していました。焼津は素晴らしい地で、私も伺ったことがあるのですが、世界規模で見ますと、一つは富士山が遠くに見えて、焼津の港が見えて、ちょうどマルティニークに景色が似ているのではないかと。私は、実はお恥ずかしながらマルティニークに行ったことがないのですが。

それからこの間、私ごとながら、9月にダブリンに行きまして、ハーンが子ども時代に大叔母に連れられて避暑に行っていたトラモアというところがあるのですが、このトラモアの海岸がまた焼津にそっくりだったのです。多分、ハーンの心象風景の中で、焼津が本当に、ただ避暑地としてよかったというだけではなく、一つのすごく大事なところだったから、ハーンも焼津についてもちろん書いていますし、大事なところだったのだろうと思うのですけれども。

焼津の皆さんが、また地域資源として小泉八雲記念館というのは非常によくできた記念館で、行くたびに私もうらやましく思っているので、そういうところから、地方発の活動ということでも、ご提言いただけるかと思います。

今、ご紹介の半ばで途切れているようになってしまいましたが、そういうわけで、焼津の小泉八雲記念館で学芸員を務められて、2021年から同じ静岡の常葉大学外国語学部英米語学科の助教になられました。今は同じく記念館の非常勤学芸員として資料調査にも携わっていらっしゃいます。専門は比較文学で、主に英語圏、日本の妖精や妖怪文学を研究され、それから近年は全国の文学館や文学資源に関する調査も行っていらっしゃいます。

一つだけ申し上げます。質問事項ですけれども、今日、3人の方がお話しいただいた後で、まとめて、先ほど講演いただいた田中先生にも交じっていただいて、先生方にお話をした後で、質問を受けながら全体討論という形にさせていただきたいと思います。特に絶対に今この瞬間に聞いておきたいということがなければ、後でお三方まとめての質問コーナーという感じでやらせていただきたいと思います。Zoomの方もコメントで入れておいていただいて結構ですけれども、それまではマイク・カメラオフでお願いします。

それから質問事項は、先ほどと同じように、時間が押したらお答えできないこともあるかもしれませんが、レコーディングさせていただいていますので、またお答えできる機会があれば

という形で思っておいていただければと思います。失礼しました。それでは那須野先生、よろしくお願いします。

【那須野】皆さん、こんにちは。今、中島先生から紹介いただきました、常葉大学の助教の那須野と申します。今日はこのような素晴らしい講演会とシンポジウムにお招きいただきまして、中島先生をはじめ、関係者の皆さまに感謝します。本当にありがとうございます。

私のほうからは、こちらに出ているタイトルのとおり「焼津における地域資源としての小泉八雲～静岡県の文学資源との比較を交えて～」というタイトルで、焼津と八雲の関わりと、あとはそういった文学の資源を、地域の観光や地域の振興に生かしながら、焼津で行っている活動の事例をお話しさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

こちらに出ているとおり、私は静岡県の焼津市から、昨日遠路はるばる富山にやってきたのですけれども、小泉八雲のことを知っている方は、恐らく焼津と八雲に関わりがあるということはご存じかと思います。ただ一般的に見ると、まだまだ他の八雲ゆかりの地と比較すると、広く周知されている関係ではありませんので、今日は私から、少し私なりの視点も踏まえて、八雲と焼津の関わりを最初に紹介させていただきたいと思います。

今日は、配布資料を1枚用意させていただきました。この配布資料の順番でお話をさせていただきつつ、こちらに少し写真の資料も持ってきましたので、こちらをご覧になってお話を聞いていただければと思います。

まず八雲と焼津ですけれども、先ほど中島先生が少しお話ししてくださったとおり、小泉八雲が東京にいた時に、彼が避暑地として愛した場所が静岡県の焼津です。晩年、6度の夏を焼津の地で家族と過ごしたと紹介をされているのですが、晩年の6回の夏を焼津で過ごしたという表現ですと、少しさらっと流されてしまう感覚がありますので、もう少し分かりやすくお話しします。

八雲が日本に来たのが1890年で、それから亡くなるまで14年間の年月を日本で過ごしています。その後半の7年間､日本に滞在している14年のうちの丸半分を焼津という町と触れ合っていました。これはちょうど神戸から東京に移って、帝大、そして早稲田で教べんを執っていた時代と重なるのですけれども、このような言い方をすると、八雲との関わりが希薄なものではない感じがしますので、私はいつもこのような説明をしています。その7年間のうち、6回の夏を息子さんや、時には書生も引き連れて焼津にやってきて、7月から8月の1カ月から2カ月の間を、散歩や海で水泳をしてくつろいだ生活を送っていたといわれています。

八雲がなぜ焼津に来たかということを、私なりに少し皆さんに解説をさせていただきたいと思います。ただ何となく汽車に乗って、海の見える焼津の町を選んだわけではありません。こちらのスライドに用意させていただいた一覧に、いろいろな人間関係が出ていて、あまり深く

お話しすると時間がなくなってしまうので、さらっと解説をします。

こちらのスライドに出ている田村豊久という人物に焼津の地を紹介されて、八雲は焼津行きを決めたといわれています。この田村という人は、小泉八雲が松江時代からの親友の西田千太郎を介して知った人物です。西田千太郎は八雲を取り巻く人間関係を語る上では非常に重要な人で、彼が日本で築いた数少ない信頼関係で結ばれた友人の一人なのですけれども、八雲は焼津に1897年の8月に初めてやってくる前年、島根県の松江や出雲でこの西田とともに夏を過ごしています。

八雲は海が好きで、いろいろな海で泳いでいるのですが、むやみに色々な場所で泳いでいるわけではなく、日本では主には日本海の出雲地方の海と、静岡県の駿河湾、焼津の海で泳いでいるのみです。焼津の海と出合う前は、松江を去った後も、割と松江に行っては松江で夏を過ごしたことが多かったようで、その前の年、西田千太郎と一緒に夏を過ごしていた時に西田から紹介されたのが、この田村という人物です。その時、西田は体調があまりよくなかったので、小泉八雲の身の回りのお世話役を田村に任せたともいわれていますが、そのように2人は知り合いました。

この夏、西田と八雲は、来年の夏もぜひ松江で会いましょうとお別れをしたということが西田の日記にも書かれているのですけれども、年が変わって3月に西田が亡くなってしまいました。そして、友人を失い非常に落ち込んでいた小泉八雲に焼津行きを勧めたのが、この田村でした。西田のいない島根の海に行くよりも、新しい静岡県の海で泳いではどうかと、田村が小泉八雲に焼津行きを勧めました。

そして同じく田村のつてで、焼津の海岸の浜通りと呼ばれる通りがあるのですが、そこで魚屋さんを営んでいた山口乙吉という人物を紹介され、八雲はこの山口乙吉の2階を逗留先の宿として決めて、夏を過ごすことが恒例となりました。

田村に紹介された山口乙吉という人物とも、八雲は非常に強い信頼関係で結ばれました。こういった関係を見ますと、亡き親友の西田が田村という人物を経由して紡いで出会わせてくれたのが、焼津の山口乙吉なのではないかという、八雲らしい少しスピリチュアルな一面が見えてきます。この山口乙吉がいなければ、八雲は6度もの夏に焼津に来なかったと思われます。

山口乙吉に出会ったことも、八雲が焼津を気に入った大きな理由の一つではあるのですけれども、もう一つ忘れてはならないのは、先ほど中島先生も少しお話ししてくださったとおり、焼津の海が非常に気に入ったということです。八雲は毎年焼津に来ると、朝昼晩と1日に3回ぐらい、多い時は4回ぐらい海で泳いでいました。

左上にあるこの絵ですけれども、「The view of Yaidzu（焼津の眺め）」と書いてあるのですけれども、毎年、駿河湾に横たわる焼津の町と、そして奥には富士山、こういったスケッチを何枚も残しています。今日、富山大学のヘルン文庫のほうでも、このスケッチが4種類ほど展示されていましたが、こういった絵を描くほど、八雲は焼津の海を愛していました。

この下に用意した2枚の写真は、このアングルは比較的分かりやすいと思いまして、焼津の古い明治期の古写真から選んできたものです。左側の写真には、うっすらと富士山が見えます。この焼津の海の風景は、残念ながら、埋め立てが進んでしまって、現在はこのような殺風景な風景になっていますけれども、奥には富士山が見えます。

焼津の海は非常に波が荒くて深く、あまり海水浴に適しているとはいえない海です。私も焼津で育ったのでよく分かっているのですけれども、あまり焼津の海で好んで海水浴をする人はいなくて、海で泳ぐのが好きな人は近隣の浅瀬の海に行きます。先ほど、八雲は焼津に田村という人物の紹介で来たというお話をしました。実はその前に、静岡県の浜松の舞阪という海水浴場を紹介されていて、1泊ほどそこで泊まっているのですが、海が浅くて気に入らなかったようで、焼津を紹介してもらって、この海の深くて波の荒いところが気に入ったということです。

八雲は、ご存じのとおり目が非常に悪くて、あまり視覚を通して物事を捉えることができなかったので、恐らく海に入って、海と一体になって、海から何らかの文学的な霊感を得たい時には、聴覚を働かせていたと思うのです。そういう意味でも、波がとどろく音が聞こえてくる焼津の海は、非常に八雲の文学を書く上でも適していた海かと思われます。東京時代の7年間を八雲は焼津に行って過ごしていたという話をしたのですけれども、東京時代の7年間は、彼が『怪談』を執筆していた時期にぴたりと当てはまるのです。旅が好きで、いろいろなところを旅する性質があった八雲ですけれども、東京にいた時は、体調のこともあったと思いますが、いろいろなところに出向いてフィールドワークをすることはなく、彼の唯一の旅先がこの静岡県の焼津市だったということは、作品としては直接表われていないかもしれませんが、怪談の執筆に非常に強い文学的刺激を、焼津の地から得ていたのではないかということは、常日頃感じることです。とはいえ、焼津を描いた作品も幾つか書いています。レジュメには幾つか紹介させていただいていますので、ぜひ読んでいただけたら幸いです。

このようなつながりのある小泉八雲と焼津ですけれども、比較的、八雲を顕彰する活動が本格的に始まったのはそれほど早くはなく、焼津小泉八雲記念館が2007年にオープンしています。まだ20年たっていません。ですから、本格的に市民に向けての八雲の普及活動がスタートしたのが、ここの記念館ができてからかと思います。もちろん記念館ができる前も、焼津市の民間団体の小泉八雲顕彰会の方々や焼津市が、節目の年にはいろいろな事業をやっていたのですけれども、コンスタントにイベントをやっていたわけではないので、焼津の八雲の顕彰が出遅れた感じがします。

また焼津は残念ながら、小泉八雲が逗留していた避暑の家はこちらの写真ですけれども、これは今残っていなくて、愛知県の明治村のほうに移設されてしまっている関係で、目に見える形で八雲を感じるものがないというのも、顕彰が遅れた一つの原因かと思っています。しかし、八雲の文学を発信する拠点ができたことで、劇的に焼津市民の方の小泉八雲への認識も変わったのではないかと思います。

記念館ができたことで焼津市が集めていた貴重な小泉八雲の資料を、一般の市民の方に公開することもできるようになりましたし、あとは定期的に企画展や講演会を通して、多角的に小泉八雲の業績を広めることができるようになったことは、非常に有意義なことだと思います。今日一緒にパネリストを務めてくださる西先生も中島先生も、焼津に来て講演をしていただきまして、そういった事業に参加してくださいました。

そのような小泉八雲ですけれども、なかなか若い世代の人に親しんでもらえなかったり、文学が好きな方は好んでここを訪れてくださるのですけれども、それ以外の方は、こういった文

学施設をスルーしてしまう傾向が、八雲だけではなく、一般的に見られるのが文学に関する今の状況だと思います。そのような中、文学を地域の資源として生かして、観光や町づくりに活用していく取り組みを、焼津でも2016年あたりから行うようになりました。これは恐らく、2015年にSDGsが提唱されて、あとは日本遺産というものが文科省で同じ年に認定されるようになったことなど、世の中の潮流もあると思うのですけれども、いろいろなところで無形・有形文化財問わず、資源として活用しようという動きが出ていく中で、焼津のほうもその潮流にのって事業を行うようになりました。

レジュメのほうに3つほど紹介させていただいているのですけれども、まず静岡の県立大学の国際関係学部のゼミと焼津小泉八雲記念館、そして観光協会と共同で焼津＆八雲YYプロジェクトというプロジェクトを立ち上げています。これは小泉八雲を観光に生かしていこうとで立ち上がったプロジェクトです。まず初めに学生さんたちのアイデアで、観光客が焼津に来て、記念館に来た時に、何かお土産で買っていくようなグッズの開発から始めました。用意させていただいた写真が、静岡の県立大学生さんが作ってくれた八雲手ぬぐい、そして妖怪手ぬぐいです。今ではクリアファイルやシールなど、いろいろなかわいいグッズの開発が進んでいて、記念館のミュージアムショップを彩ってくれています。

この学生とのプロジェクトの一端といってもいいのかもしれないのですけれども、今度はさらに連携を広げて、小川国夫や加藤まさを、藤枝静男などの人物を顕彰している藤枝文学館と、あとは夏目漱石の弟子だったことでも知られる中勘助が一時期疎開していた場所に開館している中勘助文学館と連携して、3館を巡るバスツアーを2019年から始めました。とはいえ、翌年にコロナ禍にはまってしまいましたので、今はこの代わりとしてスタンプラリーを行っているのですけれども、こちらのツアーは、ゆくゆくは、静岡に来てくださった方が現地で体験する着地型観光として、自治体と一緒に手を組んで商品化していけたらいいという考えの下、始動したものです。コロナもそろそろ落ち着きましたし、またそういったツーリズム等の関わり合いで、バスツアーを復活できればいいと思っています。

また近年、映画やアニメ、文学のゆかりの地を巡る巡礼というものが非常にはやっています。皆さんも一度や二度はメディアなどを通して聞いたことがあると思うのですけれども、このような、いわゆるコンテンツツーリズムといわれる巡礼のブームにのっとりまして、うちの記念館でもDMM GAMESが配信する「文豪とアルケミスト」とコラボレーションした展示会を開催しました。このような感じで、日本近代文学の文豪たちがゲームの中でイケメンになって登場してくるようです。私はあまりこのゲームをやっていないので詳しくは知らないのですけれども、20代、30代、40代くらいの、普段はあまり文学館に来ないような若い世代の方たちが、非常にこのゲームを好んでやって、自分の推しのキャラクター、つまり文豪のゆかりの聖地を巡礼することがはやっているそうです。

他の日本各地の文学館でも、このゲームとコラボした企画が次々に行われていきましたので、焼津でもその流れにのっとって、このゲーム会社とコラボをして、展示会を開催しました。コラボといっても、展示会の中で何人かの八雲と関わりのあった文豪のパネルを館内に設置しただけですけれども、これだけで本当に驚くほど、北は北海道、南は九州から多くのお客さまが来てくださって、いろいろなグッズを買って、さらには駅前でレンタサイクルを借りて市内を観光してくださるという、非常に理想的な現象が起きました。これに関しても、この後、もう一度別の文豪の組み合わせで展示をされるなどして、恐らくまた次年度も１回くらいはできるのではないかと思っています。

そしてこちらは、私が自分の大学のほうの地域連携事業で学生と一緒にやっている「浜 to me（浜当目）」というプロジェクトです。これは学生が名付けたのですけれども、焼津にゆかりのある小泉八雲と、焼津の地名の由来にもなったヤマトタケルがいるのですが、この２人の人物をナビゲーターとして、焼津を紹介していこうという考えの下に立ち上がったプロジェクトです。学生たちが２人の人物をイケメンのキャラクターに仕立てて、これを市内のいろいろな場所に設置したり、地元の、例えばコーヒーの焙煎をしている方とコラボして、八雲コーヒーや、タケルさんのコーヒーを考案するということもやっています。

今こういうものを発展途上で頑張っているのですけれども、まだまだ課題もあります。焼津は県庁所在地ではないので、どうしても小泉八雲という人物が、静岡県レベルでの文学資源とは捉えられていないのが現状です。恐らく静岡に観光に来てくださる方は、まず静岡市を目掛けて来て、そこから自分たちの興味のある素材を見つけてその他の地域に行くのが観光の流れだと思います。そういう時に、静岡県レベルで小泉八雲をどこかで紹介していただければ、もっと焼津と八雲の関わりが広まって、焼津だけではなく、静岡県の方が小泉八雲を自分たちの県のゆかりの文学だと認知してくれるのではないかと思います。

ただ静岡の場合は、私の推測ですが、なかなかこれがうまくいかない事情があります。静岡は文学資源が非常に豊かで、恐らく静岡の地を描いた文学作品や、静岡に逗留したことのある作家の数で言うと、47 都道府県の中でもかなりトップに躍り出るのではないかと思います。

というのも、静岡の東部の伊豆がものすごい文学の宝庫なので、静岡県では、静岡の文学というよりは、伊豆の文学という呼び名で光が当たりがちです。私も伊豆文学が非常に好きで、伊豆も大好きな土地でたびたび足を運ぶのですけれども、ただやはりそうなると、せっかくいい文学資源があっても、静岡県の中部や西部の文学にはあまり光が当たらなくなっているという問題も起きます。

静岡県は、非常に伊豆の文学の顕彰に力を入れていまして、毎年伊豆文学フェスティバルを開催しています。私も文学賞の関係の仕事に毎年携わっていますが、実際には伊豆文学フェスティバルとはいえ、静岡全体の文学を顕彰するイベントなのです。しかしやはり県のほうでは伊豆という名前を出したいということで、やはりそのようなイメージ、静岡の文学ではなく伊豆の文学というイメージが付いてしまっている現状があります。

昨日、少し早めにこちらの富山に来ることができたので、高志の国文学館にお邪魔したのですけれども、大伴家持から始まり、現在の作家まで余すところなく、県内の文学資源を拾って紹介していらっしゃって、本当に素晴らしいと思いました。

静岡県には伊豆文学の他にも小泉八雲や藤枝静男、小川国夫、加藤まさを、西の掛川のほうには吉行淳之介の記念館もありますし、すごくいい文学資源があるので、なかなかその辺りが、知名度が上がらないところを何とかしたいと思っている次第です。

横の連携というものが非常に大事で、これからは伊豆のほうの文学館とも一緒に手を組んで、県立の文学館をつくるのはなかなか難しいと思うので、静岡県全体の文学マップを作ったり、あとは静岡県レベルでのスタンプラリーを行ったりなどの連携が取れていけば、小泉八雲という存在も県の文学資源として認知度が上がって、いろいろな方が八雲に親しんでくれるのではないかと考えています。

また、先ほど中島先生のお話にもあったとおり、小泉八雲という人物が非常にいろいろなところに旅をしたおかげで、日本国内だけでもいろいろなところにゆかりの地があります。こういったゆかりの地が連携をして、小泉八雲の文学の発信を一緒になってやっていければ、すごくいい形で未来に小泉八雲という人物の文学がつながっていくのではないかと考えています。

ちょうどいい時間になりましたので、私の発表はこのくらいにさせていただきたいと思います。皆さん、ご清聴ありがとうございました。

【司会】ありがとうございます。やはり焼津はハーンが大好きだったことがよく分かる、富山にはハーンが来たことがないのですけれども、それから見ると本当にうらやましい土地です。海が好きで、確かに焼津の海もいいところなのと、それからハーンが旅をしたマルティニークにも似ているし、トラモアの子どもの頃の体験にも似ているし、それからニューオーリンズや松江にも大きな水があるということですごく似ているので、うらやましいと思います。また後で全体討論という形で質問を出していただいたり、田中先生も交えて4人のコラボという形でお話を伺いたいと思います。

【司会】次の話題提供として、立命館大学特任教授の西成彦先生にお話をいただきたいと思います。簡単に西先生をご紹介しますが、その前に私のほうからちょっと申し上げておくと、ハーンの特性は単に『怪談』を書いて日本の文化を英語圏に紹介しただけではなく、世界のいろいろなところを経巡って、いろいろなところを見てきたところにあると思います。

今、那須野先生から焼津のことにフォーカスしたお話がありましたが、西先生はまた別の、アメリカ時代のハーンから日本のハーンへとつながっていくお話もありまして、私のほうからご紹介するまでもなく、大変広い視野で比較文学研究をしてくださっている先生なのですけれども、ご紹介させていただきます。

まず東欧文学研究から始まり、ポーランドですけれども、イディッシュ文学など、地域や時代に縛られずに、越境的な比較文学研究を進めていらっしゃいました。今年はハーンの没120年であると同時に、カフカも没100年だそうです。うっかりしていましたが、先ほど伺いました。これまでの成果を本でまとめる予定でいらっしゃるということです。

たくさんのハーン関連の著作をお持ちなのですけれども、富山のヘルン文庫に関しては、ザッヘル・マゾッホという作家のフランス語訳を、またこれからマゾッホについてもおまとめになるという話を伺っていますが、それを1987年ごろにヘルン文庫においでになって研究してく

ださったこともあると伺っています。

それよりも何よりも大事なことは、ラフカディオ・ハーン研究自体を若い世代につなげていきたいという気持ちがあるのと同時に、ラフカディオ・ハーン没後、日本ではラフカディオ・ハーン研究は大きな盛り上がりを見せました。西先生方が私たちの先輩格というか、お兄さま世代なのですけれども、もう一つ上の平川祐弘先生や父親世代といいますか、その世代から、日本は広くハーン研究を、世界の研究を引っ張ってくる形で行ってきました。

今、私の世代というと口はばったいのですが、そういうものをお預かりして、このお預かりしているものを次の世代にどのように接続していくのかということも、私も毎年必死で考えています。こう見えましても、定年まであと5年になりましたので、残された5年間で私が何をどう若い世代につなげていって、若い方たちを巻き込んでいくのかを一生懸命考えながら、前の先生方が残してくださったこれまでの実績を若い人たちにつなげるのにどうしたらいいだろうか。それから『怪談』で日本を紹介したというハーンの一面だけではなく、もっと世界的な視野からハーンを今までも捉えてきたということについて、有意なお話が伺えると思います。

そういう提言をしていただくという意味で、ここで今回、西先生にいらしていただけたというのは、私としては本当にうれしく、この会場の方だけではなくZoomで聞いていらっしゃる方も、それからここからまた次の世代、次の方々へとつないでいただける方も、今日のお話をぜひ聞いて、ハーンはこういう面もあったのかということを思い出していただければありがたいと思います。長くなってしまいましたが、西先生、どうぞよろしくお願いします。

【西】今ご紹介にあずかりました西です。そういうわけで富山には、今からすると40年近く前、まだまだ若かった時代にお邪魔しから、これで5回目ぐらいになるかと思います。最後に来たのは堀田善衛の没20年、生誕100年の年にあたった2018年でした。1918年といえばちょうどシベリア出兵があった時で、米騒動があって、富山が民衆運動の中心だったともいえる、そういう時代でもあり、その年に生まれた堀田善衛に関しては、彼はアジア・アフリカと関わっていましたから、比較文学をやっている僕としても興味があったので、そこで来たのが最近だったと思います。その前にもこちらにお招きいただいて、何度かの東大比較文学や熊本大学関係の仲間とこの教室で記憶を温めたりもしました。

今日の私が求められているのは、これからの若い人たちにどのようにつなげていくのかということですが、僕はポーランド文学から始めた人間ですが、ポーランド文学だけでは食っていけなかったわけなので、てあたりしだいにいろいろな仮面をかぶりながらきました。

まず1つは比較文学です。先ほど名前が出た平川祐弘さんという方は、東京大学の比較文学専攻をリードしてくださった先生です。例えば彼などからすると、夏目漱石であれ森鴎外であれ、ラフカディオ・ハーンであれ、彼らはいわゆる日本文学研究者に任せてはおけない、彼ら

の研究は日本語しかできないやつらにはできない、つまり漱石をやるにはまず英語ができなければいけないし、鴎外をやるにはドイツ語ができなければいけない。それだけではないのです。

というのは、漱石は英語でダンテも読んでいますし、もちろん聖書なども読んでいます。漱石は英語の先生をしていましたけれども、英語を通じて世界のさまざまな文学に出会っています。それが彼の南画を愛し、漢詩を呼んだりもする東洋的な感性とうまくミックスして彼の作品が生まれていきました。

鴎外も同じです。彼はドイツ語で主に読んでいますけれども、フローベールなどはフランス語で読んでいるし、エドガー・アラン・ポーの作品も半分英語とドイツ語訳を使って読んでいます。彼は『諸国物語』等では、ドイツ文学に限らず、ロシア文学まで翻訳してしまったような人です。ですから、明治時代のいわゆる文学者たちは、世界に目を向けているわけです。

今度は逆に、そのような世界に目を開こうとしている若い帝国大学の学生さんたちは、まさにラフカディオ・ハーンの講義に目を開かれて、ラフカディオ・ハーンは英文学講座のお雇い外国人教師で、彼は英語を使って授業をするにはしましたが、その中ではフランス文学やさまざまな文学についての話題もちりばめていました。

平川さんの言い方を借りれば、彼こそ日本の大学の教壇で、しかも帝国大学の教壇で比較文学の授業をした最初の人間であるということです。つまり、その後出てくる上田敏などが『海潮音』という翻訳詩を出しますけれども、それはまさにフランス語と英語の最も新しい最先端の詩を訳したわけです。そういう機運が、明治のハーンがいた時期にはあったわけです。

ただハーンは、そういう人たちを片目でにらみながら、また彼なりにいろいろな刺激を与え、教養を授けながらも、しかし一番関心があったのはインテリではなく、むしろ文字の読み書きもできないような庶民たちの感性の中に潜んでいる世界観や生命観でした。ハーンは単なる文学者にとどまるわけではなく、いわゆる民俗学者や人類学にも通じるような、人間とは何か、ただ単に西洋中心的に、西洋人こそ人類を牽引していくべきだという考え方とは違う、もっと幅広い視野を持っていた人であったということです。

そのハーンを考える時に、僕は自分自身が東欧文学から出発したこともあって、まず比較文学的な側面、つまり一人の人間が文学についてものを考える時に、特定の言語で書かれた文学にだけ閉じこもってしまうという、大学の教員に間々ありがちなスタイルを打ち破って、それこそ何でも乱読する、面白いものは何でも面白がってみる、それをオリジナルで読まなくても、翻訳で読んでも構わないだけだから、文学はさまざまな人々によってさまざまな文化や歴史を背景にして書かれているのだと。

そういう考え方で文学一般を愛する姿勢から多くを学びたい。僕自身が考えたのが「移動文学」という研究方法です。それは何かというと、まずハーンをはじめ、19 世紀以降の作家たちの多くは 1 カ所に閉じこもらずに、世界のいろいろなところを移動しています。それは自分の趣味で、旅行で移動する場合もあれば、逆に難民や移民の形で、外圧によって移動する場合もあります。

つまり 20 世紀の文学を支えたものは、サン・テグジュペリもそうですし、ジェイムズ・ジョイスもそうです。多くの人が移動を経験し、その移動を描いているのです。移動先の生活を描いてみたり、逆にジェイムズ・ジョイスのように、どこに行こうとダブリンのことしか書かな

いような人もいて、いろいろな移動のパターンがありますけれども、そういう移動する文学というものがありました。

今度は、では文学研究者はどうすればいいかというと、自分もフットワークがよく、そういう移動に付き合っていかなくてはいけないだろうと。つまり、ジェイムズ・ジョイスを単にアイルランド、単に両大戦間期のパリのモダニズム文学などといった枠に閉じ込めずに、そのフットワークのよさをある意味でなぞるのが、文学研究の新しいスタイルになるだろう。「移動文学」とは私にとっては比較文学の方法論のことなんです。

その時にハーンというのは、要するに、一つのアイコンになっているわけです。実は今年幾つかの本を出す予定があるのですが、そのうちの一つが『移動文学論Ⅲ多言語的なアメリカ』です。アメリカ大陸には英語だけではなく、フランス語やスペイン語、ポルトガル語を「国語」とする国々に分かれています。

ただ、アメリカ大陸に住んでいる人たちの間では、別に英語やフランス語、スペイン語、ポルトガル語と完全に分断されているわけではありません。メキシコ人がどんどんアメリカに入ってくるようなことがあり、いろいろな言語を母語にする人たちがアメリカ大陸全体の文化や、文化混交のようなものを促しているのが現状なわけです。

そういう人間の移動に関する関心は今非常に高まっていて、ここにも挙げましたように『マルチリンガル・アメリカ』という本が15年前に出ています。ここには、基本的にはUnited States of Americaの文学の中には、そもそも先住民の言語や、あるいはもともとフランス領だったルイジアナにおいてはフランス語だったり、あるいは新移民として東欧からユダヤ人が持ち込んだイディッシュ語だったりと、さまざまな言語が英語文学の背後にうごめいている、そういう姿を描こうとした本です。この本に倣って、僕はアメリカ大陸全体の言語的な錯綜（さくそう）のようなものを描き出そうと思って、今度の本を計画しています。

例えば、レジュメに挙げた『チータ』という、日本に来る前にハーンが書いた二つの小説のなかのひとつが、ルイジアナのデルニエール島（英語ではそのままフランス語を英語に訳して「ラスト島」）という島が大津波に襲われて、島民のほとんど全員が死亡するという、東日本大震災のような津波が来たことがあるのですが、その時のことを書いた小説です。

この小説は、一度英語でご覧になってみるといいのですが、たしかに英語で書かれてはいるのですが、そこにはまずアメリカ合衆国が誕生するにあたって、「ニューイングランド」の北の、いまのメイン州の辺りに住んでいたフランスの入植者たちが追われて、ルイジアナにやってきます。この人たちはアカーディアンと呼ばれて、英語では「ケイジャン」Cajunと呼ばれます。それから、今度はカリブ海のフランス領の島々で、特にアフロ系の人が話しているクレオール、これもフランス語の一変型ですけれども、ケイジャンの言葉とは違います。そういう地域語を話している人たちがこれでもかというくらいに出てきます。

さらにはフィリピンからやってきているようなタガログ語話者、あるいはメキシコからやってきている、スペイン語を話している娘、しかもその被災地にやってくるお医者さんがドイツ人だったり、その間に入るのがイタリア人だったりします。ともかく今のアメリカをほうふつとさせるような、全くバベルの塔というか、多言語的な状況そのものを描こうとした小説で、それはラフカディオ・ハーン自身がまさにいろいろな文化を背後に背負った人間であって、彼

だからこそそういう現象に関心を持ち、そこにフォーカスを当てる小説が書けたのだと思います。

その当時は、散漫な小説だと思われて、あまりアメリカ人の評価は高くなかったと思います。しかし、今からすると非常に現代を先取りするような、後に上海を舞台にした小説や映画が描かれる時に、当然そういう多言語状況を背景にしないと、上海だからと登場人物が全部中国語の、上海語あるいは北京語だけ話していることはあり得ないので、それと同じような大都市、グローバルシティーのようなものが持っている多言語性のようなものに対する関心が、ハーンの中には既にあったのです。

そのニューオーリンズに住んでいた時代に、彼は『ゴンボ・ゼーブ』、先ほども少し出てきましたけれども、フレンチクレオールがインド洋やカリブ海、幾つかの地域で話されていますが、そのことわざを、これは文献学的に集めただけですけれども、そういう本を出していました。僕はハーンに関心を持ち始めた頃にこの本に出合って、アフロ系の人たちのユーモアに腰をぬかした記憶があります。

その中で、先ほども、この後話してくれるルイ・ソロさんにお話しして笑ったのですけれども、こんなクレオールのことわざがあります。セ・ボン・ケ・クラーブ・キ・ラコーズ・リ・パ・チニ・テート（C'est bon khé crâbe qui lacause li pa tini tête）と書いてあって、カニというのはお人よしだから、それが理由で頭がない、つまり心だけで出来上がっているから頭がないのだという、非常にユーモラスなことわざがあって、じつはこれはマルティニークのことわざなのだそうです。

それと並んでもう一つあったのが、コゼ・セ・マンジェ・ゾレイ（Causer cé manger zoreïe）です。「コゼ」というのはおしゃべりするという意味なので、「チャットすることは、耳の栄養」「チャットすればするだけ耳が豊かになる」そういうことわざなんですね。僕は「耳」をハーン研究のキイワードにさせてもらっていますが、今日これからする話は、これまでのの議論をふり返った話になると思います。

僕自身のハーンとの出会いは、1984 年に熊本大学にたまたま職を得たことで、同じく熊本に 3 年間いたラフカディオ・ハーンについて、機会があればきちんと勉強してみたいと思うようになり、まず関連書籍の収集と整備から始めました。もしそれが富山大学だったら、コレクションがあって、凄いアドバンテージがあったと思うのですけれども、熊本の場合はまずそこから始めなければならなかったわけです。

また、来日以前のハーンのことにも興味があったので、たまたまヨーロッパに行くついでがあった時に、マルティニークにも 1989 年には足を延ばし、それがかなり大きな励みになりました。つまり日本に来る前にマルティニークに行っていたということが、ハーンが小泉八雲になっていく上でとても重要な意味を持っていたと感じるようになったからです。

つまり西洋文化の周縁にあって、西洋文学の圧力をものすごく受けながら、しかし自分たちの遺伝子の中にあるような、さまざまな非西洋的な価値観や迷信だとして退けられるようなものを、何とかして生かそうとするような、文化的なサバイバルを夢見ているカリブのアフロ系の人々の生き方と、明治期になってどんどん文明開化が進んでいって、西洋化が全てであるかのように見えながら、しかし日本的なものをどう根絶やしにしないで済ませることができるの

かを考える日本の知識人の在り方には、どこかパラレルなところがあったんですね。

そういう意味でハーンは、マルティニークで経験してきたことと同じことが日本でも起こってほしいという気持ちと、過剰な西洋主義、欧化主義に染まってしまうことに対する恐れと、その両方を持っていました。

その時に彼が一つ重視したのが、あまり頭でっかちになるなと。つまり、カニのように頭がなくなってしまっても困るけれども、少なくとも心はとても大事だと。それは別の言い方をすれば、文字にばかりこだわり続けて、人のささやきやつぶやきに耳をふさいでしまうことが、いかに人の心を殺してしまい、あるいは人の命を奪ってしまうような暴力になってしまうか、そういう彼の危機意識とも直結していたと思います。

僕自身が『ラフカディオ・ハーンの耳』という本の中で強調したかったのは、『耳なし芳一』という作品が「耳なし」と書いてあるのですが、これは気を付けたほうがいいということなんです。もともと日本の怪談としては、「耳きれ芳一」という言い方が普通でした。ところがハーンが意図的に「耳なし」にしたのです。

なぜかというのは、きちんと『怪談』に添えられた注を見ればわかります。その部分に般若心経の「無眼耳鼻舌身意」という言葉があり、注にはマックス・ミュラー訳の「There is no eye, ear, nose, tongue, body, and mind.」と引いているんです。つまり no ear という言葉にこだわって「耳きれ」では駄目だ、「耳なし」だというふうにハーンは考えたんです。

しかも、耳がない、それでは聞こえないのかというと、そうではありません。目がなければ見えません。逆に視覚障害者ならではの別の視覚があるかもしれないけれども、いわゆる見えるということはないわけです。しかし耳が引きちぎられたぐらいで、耳が聞こえなくなるわけではありません。

僕がハーンについて文章を書いていた 1991 年という年は、思い出深い年でした。まず 6 月に雲仙・普賢岳が噴火しました。この時の火砕流が、マルティニークのプレー山の 1901 年の噴火と非常に似ていると言って、フランスの地震学者が九州までやってきたことがありました。

これはハーンとつながるなと思っていたら、今度は 9 月、ちょうどハーンの命日が 26 日なんですが、その命日をはさむ形で大型の台風が 2 つ九州の西海岸を北上しまして、熊本で最大風速 60 メートルぐらいの風が吹いて、熊本大学の前の街路樹が全部倒れて、僕が住んでいた黒髪の家は 1 週間電気が来なかったという、先だっての能登の地震の時と同じぐらいの被害が九州ほかで出たことがありました。

その時、僕はちょうど『耳なし芳一』のことを考えていました。夕方になると家は停電で真っ暗です。外は嵐が吹き荒れていて、隣の家の瓦がうちの窓を突き破って入ってきて、その時たまたま僕は一人でギターを弾いていたのです。耳なし芳一の感覚はこれかと思ったのがちょうどその年でした。

その時にふと思ったのは、その 7 年前に熊本大学に就職をするという話が来た前後ですが、

耳に脂肪の塊ができて、これは取ったほうがいいと言われて、近くの外科に行って切ってもらおうということになりました。それと、皆さん想像できると思いますが、痛いので麻酔はします。しかし耳たぶを切るぐらいで完全麻酔をかけるわけはありません。つまり、チョキチョキとはさみで耳たぶの皮を切る音、それから今度は先生がメスで真珠ぐらいの大きさの脂肪の塊を取って、コロンと膿盆（のうぼん）に落ちる音、その後糸でシーシーと縫う音がぜんぶ聞こえるのです。

その時のことを嵐の中で思い出して、耳なし芳一は、耳はないけれども、ちぎられる時に全部その物理音を聞いていたのだなと思い、それが僕の耳なし芳一論のエッセンスになっているのです。

つまり『アンダルシアの犬』という有名なブニュエルの、シュールレアリスムの代表的な映画がありますけれども、何より有名なのは目がかみそりで切られるというシーンで、そこではみんな目をつぶってしまうのですけれども。それとは違って、耳なし芳一の耳を切られるのは、逆に全ての神経が耳にいってしまう、そういう経験でもあるのだということで、ラフカディオ・ハーンの文学を読む時に耳が重要だというのは、平川先生の時代から既にいわれていたことですけれども、それにさらに肉付けを与えるのが自分の役割だとその時思った次第です。

ここからは、その後考えてきたことを駆け足でお話しして終わらせますけれども、ベトナム系アメリカ人の作家でモニク・トゥルンさんという人がいます。その彼女が日本に10年ぐらい前にやってきて、1年間滞在して、ラフカディオ・ハーンを主人公にして、小説を仕上げるんですね。『かくも甘き果実（The Sweetest Fruits）』という本なのですが、これはラフカディオ・ハーンについて、彼の母親と、オハイオ州時代に一緒に住んでいて、結婚までしようともしたアフリカンの女性、そして松江で出会ったおセツさん、その3人の女性が彼に対する思いの丈を語る形式で書かれた本です。

全部英語で書かれていますけれども、お母さんは英語などできるはずがなかったので、ギリシャ語かイタリア語で多分話したはずですし、マティ・フォリーといわれるシンシナティの女は、もともと奴隷だったのが解放奴隷になってシンシナティにやってきたわけですけれども、彼女からもある程度クレオールの響きのなかで育ったはずなので、かなりなまりの強い英語で話したはずです。

それからおセツさんは、それこそ「へるんさんことば」を交えながら話した可能性もあって、英語で書かれているテキストではあっても、そのテキストそのものの背後ではいろいろな言語が鳴り響いている、そういう構造から出来上がっている作品です。ともかく女性がハーンに対する思いの丈、もちろん愛情もありますけれども、男に対する不信感や、男はだから困るのだという部分も含め、女性ならではのハーン像というものを描いている、そういう目の覚めるような小説です。

じつは、ラフカディオ・ハーンについての評伝に当たるようなものは結構書かれていますけれども、その重要なものは、その伝記に書簡を合わせて編んだエリザベス・ビスランドから始まってモニク・トゥルンまで、ほとんどが女性なんです。つまりハーンをネタにして何か書こうという時に、男よりもむしろ女性のほうが積極的なのは、とても面白い現象だと思います。それは、これはあくまでも僕の私見ですが、やはりハーンが、女性の声が持っている力ものに

ものすごくこだわり続けた男だったからだと思っています。

まず熊本時代の『夏の日の夢』という有名なエッセーがあります。これはハーンがいかに浦島好きかを語るときに誰もが触れるテキストなのですけれども、その中に、突然自分のギリシャ時代のことを振り返るシーンがあります。

「その頃は、一日一日が今よりもずっと長かった。その土地と時間は、神のような存在によって支配され、その女性はひたすら私の幸福だけを祈っていた。昼が終わって、月が昇るにはまだ間があるような時、大いなる静寂が大地を領すると、その女性は頭のてっぺんから爪先までうれしさでぞくぞくさせてくれるような話をいっぱい聞かせてくれた。それからもいろいろな物語に耳を傾ける機会には事欠かなかったが、どれもこれも、美しさの点では、あの時に聞いた話の半ばにも及ばない」――そのように、まず牧歌的、あるいは楽園的な、母から子どもにおとぎ話を聞かせる、それこそシェヘラザード的な女性とハーンの関係がここに書かれています。

ところが、そういう女性についてモニク・トゥルンさんは、日本に来られた時に講演をされています。その時の講演は「Writing Hunger」というタイトルです。つまり彼女が『かくも甘き果実』を書く時に、ラフカディオ・ハーンが抱え込んでいた hunger、飢え、飢餓感に対して黙っていられない、どうにかしてあげなくてはいけない、乳首を吸わせてやらなければいけない、話を聞きたいのであればシェヘラザードのように話を紡いで、子どもの欲望を満たしてやらなければいけないという、今で言えばいわゆるケアの精神というのでしょうか。そういう衝動がかき立てられて、思わずラフカディオ・ハーンの欲望に応えてしまう、そんな女性を書くために、hunger をキイワードにしている。そこのところが、僕にとってはとても刺激的で、今日添えてあります『お菓子の家』という僕のエッセーは、それを論じたものですので、機会があれば読んでおいていただければと思います。（＊『立命館言語文化研究』32 巻 1 号（2020 年 8 月）https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/records/13577）

子どもというのはまだ性欲以前なので、ひたすら食欲の生き物です。ヘンゼルとグレーテルを見てもらえば分かりますけれども、食欲で苦しんでいる子どもがいるのだけれども、親も食欲で苦しんでいるので、では自分たちが食べていくためには子どもを捨てるしかないという論理から話が出来上がっている、非常に切ない話です。ラフカディオ・ハーンを語る時に、食欲あるいは飢餓感というものを抜きにして語り得ないという Truong さんの文学観は、筋が通っていると思います。

その時に、僕は学生時代からロックが結構好きだったので、この中でもご存じの方がいらっしゃるかと思いますが、ローリング・ストーンズに 1981 年の『Tattoo You』という一枚があります。そこに、「Waiting on you」という一曲が収められているのです。訳詞をみると、たいがい「君を待つ」と訳されているのですが、これは大間違いです。「waiting for you」であれば「君を待つ」ですけれども、「waiting on you」というのは「僕はあなたのそばに仕えていて、いつでもあなたがお代わりと言ったらきちんとご飯をついであげる」、つまり waiter、waitress としてふるまおうというのが「waiting on you」です。

ミック・ジャガーが歌っているのは、「I'm not waiting on a lady」「I'm only waiting on a friend」僕は君を lady として扱うのではなく、友達としていつでも君に仕えたいのだと、そう

いう歌なのです。まさにケアというのはそういうことですよね。相手のニーズにいつでも応えられるように待機している、そういう wait なわけです。そういうのが彼の人間関係を論じる時の基本だと思います。

その時に、これはある種のフェミニスト的な考え方からすると、それを全部ジェンダーとしての女性に押し付けてしまっているのがハーンだと言ってしまえば、これはそれでおしまいなのですけれども。ただその部分にきちんと目を向けたのは、まず女性の役割がそうでなければならないというよりも、そういうふうに設定されていて、それをどういうふうに男性が乱用しないか、どうそれを尊重するか、そこから何を学ぶか、むしろそういう方向で考えることが重要なんです。

しかもハーンは単に女性が男に仕えるというだけではなく、『怪談』に至ると、そこに出てくる女性たちは、むしろ男たちの教育係にさえなっていくわけです。それの代表的な例を幾つか挙げておきましょう。

例えば『怪談』の中に『おしどり』がありますが、猟師がおしどりの雄をあやめてしまうのです。捕った鳥を持ち帰って見てみると、おしどりの雄がいない。

するとその日の晩に、雌のほうがやってきて、彼に言うのです。「Why did you kill him ？」、なぜあなたは彼を殺したのか。そして有名な「日暮るればさそひしものを、あかぬまの真菰（まこも）がくれのひとりねぞうき」そういう歌を歌って、これはハーンは、おセツさんの勘違いかもしれませんが、「真菰の／くれの」Makomo no kuré no と書いています。しかし、下敷きにしたとされている『古今著聞集』によれば、「真菰のかげで夜を過ごす」というのが正解だと思いますけれども、そういうふうに、そこで女性は、まさに男に対して異議申し立てをしているのです。あるいは罪責感を植え付けようとしている。

あるいは『雪女』も、巳之吉が「おまえがあの時に見た雪女に似ている」と言った途端に、雪は顔色が変わって「あなたは約束に背いたから、今すぐにでも殺してもいいのだけれども、この子どもたちの世話を誰がするのかと考えるとそれはできない。だからあなたを殺さない、代わりに子どもたちに少しでも悲しい思いをさせたら、その時はあなたを殺します」と言って雪女が去るという有名なシーンがあります。つまり、まさに男に対して、父親としての義務というものをもう一度念を押して語る、それが雪女の声の力です。

そうして見ていくと、『耳なし芳一』の中でも、平家の亡霊に、平家物語を語るために呼ばれていく芳一がいます。そして、ここに来たことを口外してはなりませんよと、くぎを刺してくるのは、二位の尼と思われる女性の声なのです。つまり物語のクライマックスで、ハーンは女性の声を、男にわれに返らせるような、そういう役割を担うものとして描いている。これをどう評価するのかが、フェミニズムが世の中で大きな世界を変える力になりつつある今、一番考えるべきことだろうと思っています。

そのように考えていくと、単に耳で楽しむだけではなく、耳の痛いことにも耳をふさがないことが、われわれが生きていく上でいかに大事か。

そして、そういう耳がこちらを向いている時に、われわれはどのような言葉でその耳に向かって話し掛けていけばいいのだろうかと考えると、次に考えるべきことは舌だろうと思うわけです。

英語でもフランス語でも、舌と言語は同じ意味で、tongue や langue と言いますけれども、つまりラフカディオ・ハーンは物語作者になるわけですから、単なる耳で終わらずに、今度は舌を使って人をどう喜ばせたり、驚かせたり、くぎを刺したり、いさめたりするのか、自分がその役割を引き受ける形になるのです。そういう意味で、僕は『ラフカディオ・ハーンの耳』という本を書いてから 30 年になるのですけれども、いずれは『ラフカディオ・ハーンの舌』というのを書きたいと思っているのが、次の目標です。

僕は舌というのは人間の体の器官の中でも重要と、面白いものだと思っています。片方では味わう、taste するのが舌の役割です。ただこれはどこまでいっても受動的なものであって、外からやってくる食材に対して舌が反応して脳にその信号を送ります。しかしそれとは全く違った役割で、舌は、今度は脳で考えた言語的なメッセージを発生するために、ある時には舌を歯に当てたり、上顎に当てたり、舌を動かしながら話しています（図を参照）。そういうふうに、人間の体の器官はとても面白い動き方をしていて、舌は舌でそうして 2 つの役割を負っていますし、喉は喉で息を吸うことと食べ物を通すことと両方やっているわけです。

そのようにして、比較文学ではありませんが、1 つだけでは片付かない、いろいろなものを二刀流、三刀流でやらなければいけないような瀬戸際にみんな生きているのだと。そのように、いろいろなことを教えてくれているのがハーンだと思うので、極論と言うべきかもしれませんが、複雑な話になるからといってハーンの話は面倒くさいと思わないような学生を育てるのが、大学教育の仕事だと思っています。

今日のシンポジウムに向けてのメッセージとしては、人間は複雑なものなのだ、いろいろなところを移動しているのが人間なのだということをまず考えることから始めたい、そういう気持ちを授けるのが文学教育ではないかと思います。長くなりましたが以上です。

【司会】ありがとうございました。まさしく狭い、私は何の専門ですと、特に大学はなりがちです。例えば私はボードレール研究をやっていまして、韻文詩しかやりませんという形になりがちですが、私自身もハーンと出会ったことによって、そういう狭い文学研究の世界から無理やり剥がされて、マルティニークを見てきなさい、ダブリンを見てきなさい、英語が読めないなど問題外ですから読みなさいと言われながら、ここまで引っ張られてきました。それはつらいことではなく、広い世界へと広がったものです。

今、西先生が示してくださったように、一つの国にこだわらずに、日本というところでハーン研究をやっているだけではなく、世界へ出ていくことがすごく大事なことですし、その時に私は英語が苦手だからと、もったいないことを言っている場合ではないことに気が付きました。読むほうは頑張って読めるのだから、どんどんフランスだけではなくて、アメリカに行きなさいとか、去年はとうとうダブリンまで行ってしまって、ハーンも子ども時代にこういう景色を見たのかということを知るだけでも、ものすごく私にとっては刺激的なことでした。

西先生方がこうしてもたらしてくださって、ポーランドから始まったとおっしゃいましたけれども、ポーランドからヨーロッパから、そういうところを巡りながら、アメリカに行き、新大陸に行きと、自分の世界も広げながら、世界とつながることの大切さを、比較文学という学問の世界で教えていただいた部分もありますし、そういう面白さをつなげていきたいという気

持ちでいます。

3人目のスピーカーの方にお話をつなげていきたいのですけれども、3番目の話者として今回おいでいただいたのは、まさしくマルティニークご出身のルイ・ソロ・マルティネル先生です。マルティネル先生は、フランス語の講師として早稲田大学等で教鞭を執っておられますけれども、その一面、マルティニークの文学や文化についても講演もされています。

それから皆さんご存じだと思いますけれども、ラフカディオ・ハーンは日本に来る前にマルティニークに2年ほど滞在して、とても重要なことですけれども、マルティニークの民話の収集を行っています。実は日本に来る時に、先ほどヘルン文庫をご案内した時に、アメリカ時代の蔵書は500冊あまりアメリカに置いてきたと。ところが、マルティニークで民話を取材したノートは、日本に持ってきていたのです。

それはいずれ本にして発表しようと思っていたようなのですけれども、日本に来て、なかなかマルティニークの話を出版する機会がないまま、手元に何冊かのノートを持っていたのです。ハーンにすれば、本ではないので、自分が持っていて温めていたということだったと思うのですが、実はそのマルティニークで民話を採集したのは非常に重要な意味があります。

なぜかというと、先ほど西先生のお話にも出たのですけれども、ハーンが日本に来てから、マルティニークのプレー山という火山が大噴火を起こしました。確か1902年だったのですけれども、その大噴火のせいで、当時首都といわれていたところが壊滅状態になって、伝説では1名を除いて島民が全員死んだといわれているのですけれども、さすがにそうではなくて、もう少し生き残った人はいるようなのですけれども。一応都市伝説では、牢屋に入っていた囚人が1人だけ生き残って、あとはみんな死んだといわれているぐらいの大噴火でした。

これによって、都市が壊滅状態になり、当然、民話を語っていた人々も失われてしまったのです。従って、ハーンが記録したノートが、その当時の民話を伝える上ですごく重要なものになりました。ところが、ハーンはもう失われてしまった島の言葉、お話を残しているのだけれども、それをもう出版できる機会はないからと、フランスの友人のもとに送ったものが一部出版されて発表されました。ところが、そのノートが何冊かあったはずだけれども、それがなかなか見つからなかったのです。

ルイ・ソロ・マルティネルさんが見つけて、出合って、そしてフランス語といっても、先ほど西先生がクレオールというお話もあったのですけれども、私もそういうノートの一部を見たことがありますが、英語とフランス語、そしてクレオール語で書いてあるので、クレオール語が分かる人が見ないと、何が書いてあるかよく分からない、そういうノートが出てきました。実を言うと、まだ見つかっていないものもあります。どこかから出てくるのではないかと思って、いろいろ考えているのですけれども。

今日はそういうお話を中心に、ルイ・ソロ・マルティネルさんに、これまでのそういう発見についてのお話をしていただくのと、それから未来につなげるという意味で、ルイ・ソロ・マルティネルさんはFuji Scène Francophoneという劇団を主宰されていて、ラフカディオ・ハーンにまつわる演劇を今年上演しようとお話しされているのです。東京のほうではもう公演は決まっているのですけれども、ぜひ富山でこれを実現させたいと思っています。今回はその話に

もつなげていただきたい。

ハーン研究は本当に『怪談』や日本、そういうところに限定されるものではなく、世界とつながるものであって、そしてその中で、多言語というと非常に重要な鍵であって、日本語だけの世界にとどまらず、英語であり、フランス語であり、さらにクレオールでありというふうに、越境的につながっている世界を体現してくださるのがルイ・ソロさんだと思っています。

本当はコロナ前に、今度マルティニークで国際学会をやるので、一緒に行こうと言っていたところでコロナ禍にはまりまして、バージニア大学とのバレットコレクションの研究もなかなか立ちゆかなくなったのもあり、マルティニークとの共同研究の話もそこで立ちゆかなくなったままにコロナの３年間を迎えました。しかし今回、ルイ・ソロさんに来ていただいたおかげで、もう一度失われた３年間を取り戻して、マルティニークに絶対行きます、ということでお話をしていただきたいと思います。

最初にもう１つご案内しておきますけれども、今回ルイ・ソロさんに話をしてもらうに当たりまして、彼にフランス語で話してもらいますけれども、フロアの皆さんに聞いていただくのに、通訳をしてもらったほうがいいだろうと。実はプロの通訳会社というか、翻訳会社を頼んでも、多分彼のお話はうまく伝えられないだろうと思いました。なぜかというと、文学翻訳であるからということもありますが、彼の活動や思想を十分によくご存じなのが、実は奥さまなのです。

私からのご指名で、お願いでもあるのですが、今回ルイ・ソロ・マルティネルさんの奥様の志水万理さんに、通訳という形で、逐次で訳していただきます。私はこれが一番ルイ・ソロさんの思想を代弁する素晴らしい通訳だと信じているので、こういう形でやらせていただきます。逐次で翻訳していただきますので、彼がフランス語で話して、それを奥さんが訳す形で、少しお時間を取らせますけれども、今説明したようなお話の内容で話していただきますので、よろしくお願いします。

（以下ここでは逐次通訳のみを掲載）

【通訳】皆さま、こんにちは。最初に主催の皆さま、ならびに参加してくださった皆さま、特に中島淑恵先生に感謝します。そして今日の講演は少しいつもと違います。まず私がフランス語で話しますし、通訳を間に挟みますので、切れた感じにはなりますが、お許しいただけたらと思います。

【通訳】また、今日の講演のタイトルは、「プライスレスな至宝の眠る図書館」、そして特に「いかにして私はラフカディオ・ハーンの未刊行原稿を見つけたか」としました。

【通訳】富山大学附属図書館ヘルン文庫は、設立から100周年を迎えます。100周年おめでとうございます。また個人的にも郷愁を感じています。特に、特別な許可を得た訪問やガイド付

きの訪問の時に見た2,500点ものオリジナル作品に、毎回魅了されました。
【通訳】そしてここにはラフカディオ・ハーン全集16巻があり、さまざまな出版社からの無数の版があり、また数々の言語での翻訳本が所蔵されています。旅行記、エッセー、小説、短編小説やコント、記事、雑誌記事、翻訳、原稿、手紙などです。
【通訳】また『飛花落葉集（Stray Leaves from Strange Literature)』、とのタイトルの著作には、ハーンが読んだ作品について書かれていますが、その元の作品は16カ国語の言語にも及んでいます。英語、ドイツ語、アラビア語、カリブ語、ケルト語、中国語、クレオール語、エジプト語、スペイン語、フランス語、ギリシャ語、インド語、イタリア語、日本語、ラテン語、ペルシア語、ポルトガル語、まさに16を超えますが、ここに加えなければいけないのは、ハーンさんの言葉です。
【通訳】彼が読んだこれらのさまざまの、あちこちから寄せ集められた作品は、多様性、異国情緒、異質性に富み、私を優しくなでてくれているかのようです。今でも同じ優しい郷愁が私の中を駆け巡ります。特に私は5年間こちらに来られなかったのですから、老婦人、また偉大なマダムである図書館に帰ってきてみると、懐かしさで心がいっぱいになります。
　この図書館の壁、家具、所蔵本、古文書、またいろいろな資料や蔵書印など、スタッフの皆さんもとても親切な方々で、いつも帰ってくると大変うれしくなります。また、今でも貴重な宝物をたくさん見せてくれます。私の偉大なるマダム、100歳の誕生日おめでとう。
【通訳】また、図書館は貴重な宝物の宝庫です。この宝物の発見を試みるのは、私にとっていつもエキサイティングな冒険です。そこにはもう見つからない貴重な書籍、古文書、マインドを持つ私信や未出版の原稿などが隠されています。
【通訳】ハーンによる未発表の原稿を見つけたことは、個人的にも本当に素晴らしい冒険だったといえます。これらは全てハーンのついのすみかとなった日本の大学の図書館、私立・公立の図書館などにあります。希少価値の高い資料は、許可を得て閲覧することができます。それでも、達成できたのはとても幸運なことでした。それらを要約して紹介します。
　では、どのようなルートで私に届いたのでしょうか。いいえ、私がどうやってたどり着けたのでしょうか。この感動の経緯をお話しして、また次に簡単な分析を行います。
【通訳】まず「ノートブック」と題された小さな手書きのノートです。早稲田大学図書館で発見したこの未発表原稿、21センチ×15センチのかわいらしい小さなノートです。黒くて強化されたカバーが付いています。まるで詩的ともいえる幸運に守られて、将来をまた予見するような慎重さで保護されていました。ハーンはこれらの物語を守りたかったのでしょうか。この魅力的な小さなノートは、これほど長い旅をすると理解し、予測していたのでしょうか。
【通訳】：実際、地理的には複数の寄港地がある3つの大航海、マルティニーク、アメリカ、日本を経てきました。それは歴史的にも最も美しい物語にふさわしく、危険だけれども、奇跡的な擁護があったのです。何回か引っ越しし、地震やアメリカ軍の爆撃にも耐えたのです。神様に守られたのでしょうか。ノートが書かれた地であるマルティニーク、首都のサンピエール市は、1902年に噴火で消滅したのですから。
【通訳】また、最初と最後のページに、ハーンは手早くメモを乱雑に書きました。私は、ことわざ、歌、クレオール語に関する本の参照、ファーストネームのリストなどを解読することができま

した。特定のファーストネーム、アドゥ、シリリア、ユーマ、ラシエル、シェシェルなど、それはハーンの幾つかの作品にも使われています。
【通訳】本をいろいろ調べ、内容を比較して、判読不能な落書きをいろいろ推測することができました。しかし最も重要な内容は、リストされている8つの『クレオール物語』であり、これらははるかに読みやすく、完全な形で書かれていました。
【通訳】これらは保存状態がよいノートです。最初はハーン自身によって、次に子孫によって、そして最後に図書館によって大切に保存されていました。稲垣家、小泉家の保存への強い意志と、図書館の古文書保存方法に敬意を表したいです。
【通訳】次に、ノートブックと題された小さな手書きのノートです。早稲田大学図書館で、こちらも発見されました。大きさも同じです。黒いカバーに白いひし形の模様があります。ハーン自身がページ番号を入れた106ページ、本文中とページ数の数字を比較してみました。ノートは息子の一雄さんに認定されています。
【通訳者】これらは、同じ奇妙なクレオール語のメモです。ファーストネーム、歌、ことわざ、なぞなぞ、ゲーム、レシピ、ののしりの言葉など、ハーンの小さな絵や美しいイラストもあります。
　あく取りのしゃくし、お化け、また子どもが遊ぶ時の立てた指など。ハーンは普段から英語で書きますが、時にはフランス語を使って、マルティニークについて書く著書、著者、ドゥテルトル、またラガなどの書き物や、コードノアールと呼ばれる奴隷制時代の法令の条項、また例えばヴィクトル・ユゴーの詩を完全な形で書き取っています。
【通訳】しかし最も重要なのは、『マルティニーク・スケッチ』『仏領西インドの二年間』の下書きです。原稿の最初のページにハーンは13の章を列挙し、そのうち1章には取り消し線を引きました。最終的には15章が収録されています。また彼は後に他のテキストの付録として、幾つかのクレオールのメロディーというのを追加しています。またそこに『女中たち』として書かれていた記事は、出版した本では『私の女中』に変えられていました。
【通訳】3つ目は、ノーツと題された小さな手書きのノートです。現在、松江の小泉八雲記念館にあるこのノートを紹介するのに、まだ十分な調査ができていません。資料もそこにあります。急いで松江に帰って、研究を続けたい気持ちでいっぱいです。
　この魅力的な小さなノートには、43ページあります。これにはハーンがページ数を入れています。ハーンが西インド諸島、特にマルティニークのサンピエール市への旅行中に使用したノートです。同じ奇妙なクレオール語のメモがあります。ファーストネーム、歌、ことわざ、なぞなぞなど。
【通訳】4つ目は書簡の原稿、手紙類です。小泉祥子さんと一緒に、私はハーンの書簡を参照する大変光栄な機会を得ました。ハーンが受け取った30から40通の手紙は、新潟市の池田記念美術館に大切に保存されています。さまざまな発信元から、ハーンのその時の住所に応じて、さまざまな宛先へ送られたプライベートな書簡です。
【通訳】マルティニークからフィラデルフィア宛て、ニューヨーク、島根、熊本への手紙が、特に私の注意を引きました。何時間も保護用の手袋を着けて、この素晴らしい私信に触れ、解読しました。家に戻ってくるとすぐ、サンピエール市の差出人からの幾つかの手紙の書き取り

を開始しました。
【通訳者】：それは名前がありませんでしたが、とても愛情深く、感動的で、とても情熱的なすてきな手紙でした。さまざまな名の女性たちとの文通で、疑似恋愛的な関係を見つけて驚き、また面白く思いました。ボロ、それはハーンが自分自身をそう呼んでいたので、さらに、レオニー、ニノット、アルベルティーニなどの親しい友人がハーンをそう呼んでいました。
【通訳】ラフカディオ・ハーンは、マルティニークではボロと名乗っていたのです。
【通訳】1889年7月2日、サンピエールにて。私の親愛なるかわいいボロ、「とても元気です」と書かれたあなたのすてきな手紙を受け取った時、私は本当にうれしかったです。あなたが亡くなったといううわさが全く事実と違っていたことも、あなたが生きていて私のところに来てくれると知った時の私の喜びを、あなたは到底信じることができないでしょう。あなたの帰りを待っている間、かわいいボロ、あなたに優しいキスを贈ります。あなたのかわいいレオニー、ボロ。
【通訳】またアルベルティーニも、レオニーと同じ日に彼に手紙を書いて、そこにはっきりと「あなたを愛するかわいい妻」と書かれていました。1889年7月2日、サンピエールにて。親愛なるボロへ。あなたからのとてもうれしいお手紙を受け取りましたので、急いで返信します。親愛なるボロ、どうか頻繁に手紙を書くことを忘れないでください。あなたが遠くにいるので、私の唯一の慰めなのです。親愛なるボロ、あなたに心を込めたキスを贈って筆を置きます。あなたを愛しているかわいい妻より。アルベルティーニ。
【通訳】別の女性は、気が狂いそうなくらい心配していると彼に書き送ります。ハーンはちょうどマルティニークを出て、アメリカに向かうところでした。報道によると、マルティニークとアメリカの間の海域で沈没した2そうの船がありました。ハーンはその船に乗っていたとのうわさが流れました。ハーンの親しい友人たちの恐怖と愛情が読み取れます。
　1889年6月22日、サンピエールにて。親愛なるボロ、あなたの出発の翌日に手紙を書きましたら、あなたは恐らく手紙を受け取っていないでしょう。船2そうは沈没したと聞きました。私がどのようなふうだったかを想像してみてください。頭がおかしくなりそうです。
【通訳】私はこの文章に愛情を感じました。そして好奇心、新たな問題や疑問が生まれました。なぜボロなのか。1887年から1892年ごろのサンピエールの女性たち、レオニー、ニノット、アルベルティーニは誰なのでしょうか。ハーンの作品をあれこれ読んでも、残念ながらそのことに言及している箇所は見つかりませんでした。
【通訳】私たちは、ハーン自身や他の人々から、彼の西インド諸島時代についていろいろと知ることができました。著名人、例えば公証人のレオポルド・アルネオ、医師での知人クラビア・レオポルト、英国の料理人のウイリアム・ローレンス、またその他の町の名士たち、その他にも女中のシシリア、ガイドのイエベ、葉巻売りのロベレール夫人、下宿の大家の娘アドゥといった、焼津の人々と同じように素朴な人々もいました。
【通訳】ですが、これらの親密な女性たちについては、一言もありません。しかしそれは、恥ずかしがり屋で親しみ深い紳士の彼にとっては普通のことなのでしょう。参考文献がなかったので、私はより深く知ろうと分析や推測を試みました。この女性たちはきちんとした教育を受けていて、快適な社会的境遇にあったといえます。学校でよい教育を受けられる環境にあった

といえるでしょう。

【通訳】そして私は以下の事柄を証言台に呼びます。美しい四角い模様の便せん、その中の美しい筆跡、丸みを帯びて繊細で、入念に書かれ、均一で同じ内容、同じ文章、同じ筆跡で、これは同じ手で書かれたといえるでしょう。

美しく丁寧な言い回し、インクの完璧な使い方、線や形の清潔さ、秩序正しさ。非常に細い線で、高貴でロマンチックなスタイル、文法や文の誤りの少なさ。完璧な構文、格調高い語彙の選択、平凡で気楽な手紙にあっても、真摯で愛情深く、感動的で情熱的な文体、豊富なページ数。これらは全て、学校などの教育環境で学んだ者特有のものです。そして当時のマルティニークの首都であったサンピエール、こちらは本当に大都会でした。

【通訳】この図は、当時マルティニークの首都であったサンピエールです。オペラ座、劇場、この町発祥の音楽もある芸術と歴史の町。証券取引所のある金融都市。作家たち、教育施設や進学校が集まる知的で教育熱心な都市。プレー山のある火山都市、モンルージュすなわち赤い丘のある山の多い土地。ビーチは黒砂で、海水浴の場はほとんどない町。ハーンが言うように、大型客船や船舶が寄港する港がとても美しい商業港湾都市。また歌にあるように、美しく優しいサンピエールの女性たちのロマンチックで感動的な町。キャバレー、売春宿、売春婦があふれる海岸のモントコシエール通りがある快楽と悪徳の町。

【通訳】魅力的な手紙の文章は、愛情深く穏やかで優しく、とても情熱的であり、非難すべきところはありません。レオニーとボロの名前を愛で結ぶようなハートの形にしたボロの美、それは何と美しいのでしょう。M と書く時の美しい M の字、何と紳士な手紙でしょう。

【通訳】これは 1930 年代に教師をしていた私の叔母が書いた文章と同じで、1970 年ごろに、私にも同じスタイルの書き方を教えてくれました。しかし全て忘れてしまいましたが。

【通訳】最後に、私の証人であるペー・パヤデル氏を証言台に呼びたいと思います。男性または女性の差出人。実際、彼の名前にも、文章のスタイルにも性別を示すものはありません。これは次の手紙で分かると思います。この手紙は 1887 年から 1889 年にハーンが通ったマルティニーク、サンピエール市の神学系の学校から送られていました。

1892 年 12 月 11 日、マルティニーク、サンピエール神学校にて。親愛なるハーン様、お手紙を受け取りとてもうれしく思います。あなたからの幸せを聞いて、父も私も本当に幸せでした。私たちはあなたがマルティニークに帰ってこられる人を心待ちにしています。私は現在、2 年目の勉強中です。1 年後には試験を受けるつもりです。親愛なるハーン様、ますますのご健勝をお祈り申し上げます。ペー・パヤデル。

【通訳】パヤデルは他の人たちのように情熱的ではないですが「親愛なるハーン様」に見られるよう、

敬意を払って、人称にも敬語の「あなた（vous)」、を使って距離を置いています。そのスタイルは愛情深く、とてもうれしい、本当に幸せ、心待ちになどと書きつづっています。内容は真面目なもので、教育と試験について書いています。私は２年目の勉強中です。試験を受けるつもりです。これらはサンピエール神学校の２年目で、試験は恐らく教職試験のことだと思われます。また、アルベルティーニやレオニー、ニノットとは異なって、パヤデルには曖昧さがありません。

【通訳】レオニー、ニノット、アルベルティーニは手紙の中で、彼が借りた家、手入れをした庭、そして彼が愛した猫について書いています。また近く帰るであろうことにも言及しています。これは、守られなかった約束か、みんなの希望をハーンがかなえたのでしょうか。

【通訳】時間がなくなってしまいましたので、最後に、図書館の変革についてお話しします。図書館は今、革新的なミッションと将来の目的が組み合わされて、新しいアイデンティティーとより優れた視野を見つけなければいけません。一部の専門家は、もはや若者への魅力を失った書籍を保管する場所である図書館という名を避けたいと考えています。駅や病院、郵便局などのように、都市に図書館を定着させるための共通のロゴを探している人もいます。

どうすれば空間と精神を変革し、ネットワークにつながり、社会につながる時代に合ったアイデンティティーを見つけることができるのでしょう。革命か死か、どのような名前、ロゴ、イノベーションがあれば、若者が携帯から手を離して、図書館へ足を向けてくれるでしょうか。このことを僕も考え続けています。

【通訳】それは私にもまだ分かりません。生徒たちは私のことを、まるで古い図書館のように時代遅れだと言います。でも僕はまだ若いです。

【通訳】そして最後にもう一度、主催者の皆さまならびに参加してくださった皆さま、Zoomでご参加の皆さま、感謝します。特に中島淑恵教授に御礼申し上げます。

【司会】ありがとうございました。今、ハーンに宛てられた手紙の幾つかが紹介されたのですけれども、これは日本に来る前のハーンというものを知るための、非常に重要な資料です。家庭人ハーンや先生ハーンという像を、また増幅させて複雑な様相を見せる話です。

これらの書簡の出版は今交渉中で、いずれ公開されるということですけれども、大変興味深い資料で、図書館には本になったものではなく、メモ書きがあって、大体今、文学研究者の仕事はこういう総合研究といって、メモ書きや未発表のものを調べにいって、そこから新しく意外な事実を調べるやり方が、私が別のところでやっているのはそういうことなのですけれども。そういうところで非常に面白いと思いました。いろいろ提言をいただきました。今の学生は筆記体も勉強していないので、こういう研究の弟子入りさせるのに、まず筆記体のお稽古からやらなければいけないのですけれども。

それで、スマホを外して、青空文庫にないものからきちんと文学を読むという学生たちを育てていくために、非常に重要な提言だったと思います。時間が短くて、遮ってしまって申し訳ありませんでした。とても面白かったと思います。短い時間ですが、お話しいただきました先生方、前のほうに出ていただければと思いますので、よろしくお願いします。

【司会】終了の時間ではあるのですけれども、本当に少し質疑というか、もしもご意見やコメント、ご感想でもいいのですが、ありましたら、少し受けたいと思います。Zoom の方もまたコメントやご質問をいただければと思うのですけれども、予定の時刻を少し過ぎていますので、Zoom のほうは幸いレコーディングさせていただけますので、また先生方に見ていただきながら、後日回答していただくこともあるかと思います。まずフロアのほうから、せっかくの機会ですので、何かありましたらマイクを回しますので、発言していただければと思います。

【質問】ではマルティネル先生に質問です。図書館の死というか、図書館どう生き返らせるかという話です。ちょうど今朝、私が起きてスマートフォンの一番初めに出てきたイギリスのガーディアンの記事で、デジタルに飽きた若者、Z 世代が図書館や本をセクシーだと言い出したと。昔、バブルの頃活躍したシンディ・クロフォードさんというモデルさんがいらっしゃいます。この娘さんがまた今超人気者になっています。その方がアメリカやイギリスで、そういったものを再び呼び掛けて、それが話題になっていたらしいのです。

そういった意味では、図書館がよみがえるか、私が、実は文学ではないのですが、外交史のほうでずっと公文書館でリサーチをしていた人間だったので、非常に公文書館や図書館に行くといくらでも新しい小説が出てきたり、みんなが見ていたけれども、少し見方を変えると全然違うものが出てきたりと、非常にあると思います。今後ヘルン文庫、あるいは池田記念図書館などいろいろなところで、それこそ焼津でもやられるそうですけれども、まだまだいろいろな発見があったので、今後ますます発展していくでしょう。ここまででもヘルン文庫のますますの発展を期待します。以上です。

【通訳】とはいえ、図書館は若い人になかなか来てもらえないということで、私も図書館に定期的に行って研究しているわけですけれども、若い人が本当に来ません。新しい本が、自分が最初に手を出すことがよくありまして、その傾向はなかなか打ち破れないと思っています。それから図書館に通う率がどんどん減っていて、今フランスでは 15％ぐらいだといわれているので、それは本当に憂うべき傾向であると思います。確かに、図書館は閉館されていることもあるので、先ほどのマルティネルさんのお言葉にいくのですけれども、何か革新がなければ、恐らくこれは死を待つばかりで、何かすべきであるというのが、マルティネルさんの提言です。

それから先ほど訳したほうがいいかと思ったのだけれども、フランス語で「図書館（bibliothèque）は女性名詞なのです。la bibliothèque というふうに。ですからそれを女性になぞらえて、「la grande dame（大いなる貴婦人）」などとルイ・ソロさんが呼んでいるのは、女性だからなのです。

それから大聖堂も実はフランスでは女性名詞なので、大いなる母の掌の中で新しい発見があるということ、自分自身はこういう発見があるということを伝えたいし、そういう面白さを伝えられるといいなと思っています。先ほどセクシーという言葉が出てきたのですけれども、もし若い人たちがそういうふうに思って戻ってきてくれることになるといいなと、私も思います。

【通訳】図書館というと、こもって、飲食禁止などといって、勉強だけしなければいけないというイメージがあるのだけれども、ぜひ飲食スペースやカフェが付いているような、一遍にそういう気晴らしもできるようなスペースであって、みんなが行きやすいところになるといいと思います。

つい、フランスなどでは特に、図書館で勉強するというと、何かの罰則というか、課題が与えられて、仕方がないからやらなければいけないという、こもって拘禁されている印象を受けるのですけれども、むしろ喜んでこもりに行くようなところになればいいと思っています。

【司会】 長くなりましたが、申し訳ありません。もしよろしければ、一言ずつ先生方に、他の先生のお話などを聞きながら思われたこともあると思うので、いただいて終わりにさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。田中先生からお願いします。

【田中】旧制高校は本当に文学と相性がよく、一高はきら星のごとく、芥川や正岡子規など、二高であれば魯迅、三高であれば梶井基次郎、三好達治、織田作、四高であれば井上靖、五高はハーン、漱石です。そうしたことを踏まえても、やはり高踏的で地域から遊離したエリートたちの集団ではありましたけれども、地域の文学の核としてそれなりに地域に受け入れられという、一つの拠点的な役割を果たしてきたのが旧制高校という場だったと思っています。

ですので、今日先生のほうから地域資源という言葉が出て、これは今、文化財の方面でもすごくよく聞く言葉で、実証という立場から言うと、危うさを感じつつも、やはりそこになにがしかの接点というのも探っていかなければいけないというのは、常日頃感じているところです。旧制高校が松本にとどまらずといったら、永続的な核に、文化拠点になり得るかというのは、自分でも追及していきたいなと思っています。

【司会】ありがとうございます。今日、このセッションで本当に興味深いお話をたくさん伺いまして、ありがとうございました。多分聞いている皆さんもそうだと思うのですけれども。来ていただいてありがとうございました。

富山大学の前身は富山高等学校で、ただ伝統を守るということではなく、今までやってきたことにさらに付け加えて、今後発展していくことを考えなければいけません。ありがとうござ

います。那須野先生、お願いします。

【那須野】ありがとうございます。今先生から拠点という話が出たのですけれども、今回、私は初めて富山のヘルン文庫を訪問させていただきました。いろいろシンポジウムをやられていることを知っていましたし、Zoom などでも話でも参加させていただいたことはあったのですけれども、実際に自分で訪れてみて、ハーンの文学を後世に発信する拠点としての非常に重要な役割を負っている図書館だということを、改めて感じました。

焼津もそういう意味では、全国から見たら、小泉八雲という人物を個人で顕彰する個人博物館は、世界的に見ても松江と焼津の２つだけですので、負っているものは非常に大きいと思います。運営していくのは楽なことではないですけれども、後世に何とかそういった小泉八雲の文学を残していけるように、改めていろいろ頑張っていきたいなと、先生方のお話を聞いて思いました。本当にこの連携を大事にして、八雲のゆかりの地の方々と一緒に、いろいろな事業をやっていければいいと思います。またよろしくお願いします。

【司会】ありがとうございました。地域同士の連携はすごく大事なことですので、また引き続き連携を取りながら、お話させていただければと思います。西先生、最後に締めていただきたいので、先にルイ・ソロさん、お話をお願いします。

【通訳】ありがとうございます。彼の言葉は本当はすごく詩的、ポエティックなので、いつまで聞いていても気持ちのいい言葉で、彼は本当に詩人だと思うのですけれども、時間もありますので手短に。今日のお話を伺っていて、中等教育の重要性を自分はすごく感じました。今の時代のフランスで「lycée（高等中学校）」という言葉があるのですけれども、それもそうですし、自分の話の中にも出てきた「神学校」、collège や séminaire と言っているものですけれども、そういうものも含めて、その重要性に思い至りました。あとは焼津の魚屋さん、乙吉さんのことや、いろいろなことがつながってきてうれしく思いました。ありがとうございました。

【司会】最後に西先生、まとめていただけるとありがたいです。

【西】２つ話します。まずルイ・ソロさんのお話は本当に驚きました。ハーンが女好きだったのは知っていましたし、女にモテる男だったというううらやましいところもあるのですけれども。これは僕も書いたことがあるのですが、例えばおセツさんのことをわれわれはとてもよく知っています。ただ、彼の書いたものしか読んでいない人、つまり手紙を含めて、彼の書いたものの中におセツさんは一切出てきません。むしろ「万衛門」という名前の老人が出てきて、それがおセツさんのことらしいということになっていて、周到にカムフラージュしているのです。

他の女中のことはたくさん書いているのだけれども、自分にとって最愛の人のことを書かな

い。だからそれと同じことが起こってしまっているのだと思って、そこをほじってどうなるのか、それを公表してどうなるのか、逆にその彼女たちがプレー山の噴火で死んでいる可能性もあるので、いっそう意表を突かれました。それが第一の感想です。

それから図書館のことですが、これは確かに憂鬱な話です。アーカイブというのはこれからの人間が生きていく上でとても重要ですけれども、今の若い人たちは古いものを掘り起こすというよりも、今あるビッグデータのようなものにどうアクセスするかということの一部に、古いテキストを位置づけているに過ぎないという状態になっています。

そして、僕が文学を教えていていつも暗たんたる気持ちになるのは、フィクションに対する不信感が根強くて、本当の声はむしろ社会学者の聞き取りや生活誌のようなもののほうにあるのだという、そういう思い込みが広がっていて、そういうこともあって文学を避ける傾向がある。

それは逆に言うと、今のハーンの恋愛のことも含まれているのですけれども、文学は非常に生々しい、人間が友人や恋人、あるいや子どもなどいろいろな人と付き合っていく中で、つまずいたりするような時、それをどうにかクリアしていくような、negotiate していくような力を授けてくれるのが、過去の先達の苦労話だと思うのです。文学はそういうところで生き延びていくしかありません。

しかもそういう中で日本の国語教育が文学を排除するような、つまり日常的な言語能力を身に付ければいい、英語と同じように日本語も話せればいいという話になっていってしまっていて、人間の心の機微にまで触れるような機会をどんどん奪っていってしまって、それがゲームぐらいでしかない。今度はゲーム産業の作り方はまさに文学からいろいろなアイデアを取ってきて、今日の那須野さんの話にもありましたよね。つまりハーンやら漱石やらがイケメンになってしまっているという。そんなふうに、ゲーム創造のために、クリエイターは文学を読むのです。

ただそれがその目的のためなのであって、人間の心を掘り下げるための読書の機会がどんどん失われていくことに対する対策を練ることが、最終的に一番大事なことだと思いました。今日は皆さん、充実したご発表をありがとうございました。勉強になりました。

中島：どうもありがとうございました。それではこれで終わりにさせていただきます。先生方、本当にありがとうございました。

旧制富山高等学校設立100周年記念事業

記念講演会及び国際シンポジウム

日 時：2024年2月10日(土) 13時00分～18時10分
場 所：富山大学人文学部棟3階第6講義室

13時00分～14時30分
記念講演会　旧制高校設立史のなかの富山高等学校
－歴史的位置と意義－
田中　智子(京都大学・教授)

14時45分～15時05分
旧制富山高等学校の至宝「ヘルン文庫」紹介
中島　淑恵(富山大学・教授)

15時10分～16時00分
ヘルン文庫訪問（ヘルン文庫を公開します。自由にご見学いただけます。）

16時10分～18時10分
国際シンポジウム　旧制富山高等学校の至宝「ヘルン文庫」を未来に生かす

焼津における地域資源としての小泉八雲
～静岡県の文学資源との比較を交えて～
那須野　絢子(常葉大学・助教)

おしゃべりは耳の栄養、ハーンの耳から舌へ
西　成彦(立命館大学・特任教授)

Les bibliothèques, dépositaires de trésors inestimables.
Comment j'ai retrouvé des inédits de Lafcadio Hearn ?
プライスレスな至宝の眠る図書館
いかにして私はラフカディオ・ハーンの未刊行原稿を見つけたか
Louis-Solo Martinel(劇団Fuji Scène Francophone主宰)
通訳付き

全体討論

本企画はZoomにて同時配信します。Zoom参加をご希望の方は、下記の申込みフォームから2月8日(木)までにお申込みください。
申込みフォーム： https://forms.office.com/r/b1yNaQQ0iq

右記QRコードからも
申込みが可能です。

【お問い合わせ先】
五福高岡地区事務部人社系総務課（人文学部担当）
電話番号： 076-445-6131
E-mail　： jinbuns@adm.u-toyama.ac.jp

旧制高校設立史のなかの
富山高等学校
―歴史的位置と意義―

2024.2.10

旧制富山高等学校設立100周年記念　於：富山大学人文学部

田中智子（京都大学大学院教育学研究科）

1

【自己紹介】

京都の第三高等（中）学校をはじめ、旧制高等学校の設立史を研究

主な関連論考

- 「第三高等中学校設置再考 府県と官立学校」（拙著『近代日本高等教育体制の黎明』思文閣出版、2012）
- 『官立学校と地方都市』（旧制松本高等学校第18回夏期教育セミナー講演記録、松本市教育委員会、2013）
- 「官立学校と地方都市 教育拠点の設置実態とその特質」（高木博志編『近代日本の歴史都市 古都と城下町』思文閣出版、2013）
- 『「学都」創生史探訪―エリート校と地方都市』（同志社大学人文研ブックレットNo.55、2017）
- 「富山県の中学校形成史」（神辺靖光編『明治前期中学校形成史 府県別編Ⅳ 北陸東海』梓出版、2018）

☛（本日の話）主に明治・大正期の富山県に着目し、「高尚なる学校」（ハイレベル教育機関）の設立過程を掘り下げる。富山県にフォーカスすることで、高等学校史・高等学校制度全体の性格を捉え直す機会とする。

2

【話の構成】

Ⅰ　富山県の中学校～高等学校設立の前提
　1870s～80s前半

Ⅱ　第四高等（中）学校設立と富山県
　1880s後半

Ⅲ　世紀転換期の高等学校設立要求と富山県
　1890s末

Ⅳ　富山高等学校の誕生
　1920s

おわりに

3

Ⅰ 富山県の中学校～高等学校設立の前提

富山県は義務教育にあたる初等教育（小学校）を超える教育をどのように考えていたのか

富山県とはどのような県か

廃藩置県以後10年ほど複雑な経緯をたどる

①M4（1871）.11.20　新川県設置（射水郡は七尾県）

②1876.4.18　石川県に併合

③1883.5.3　富山県再置

4

①の新川県時代は「中学校」設置構想どまり

文部省の学制（1872）に基づき、中学区５を設け各１校設置。

魚津／富山（神通川より東／西）／高岡／福野

②の石川県時代に「中学校」が誕生

1877.11　「致遠中学校」開校

県の支出はなし。地元町村の住民が経費支出。

石川県中学校はない（金沢区中学校のみ）。

大・石川県は、中学校は「周辺」「小単位」が設置するものと認識（石川県には、より高度な専門学校を設置）

1881.　高岡に「越中義塾」開校

中学校とはみなされないが、致遠中学校（65名より規模が大きかったと思われる（高岡に男子各種学校5校・331名）。

5

⇒民間が資金提供する文化が、石川県のいわば周縁であったがゆえに継続。

③の富山県再置後に「県立中学校」が成立

富山県令国重正文（長州出身）や県官員らの主導。

設立にあたっては、県予算のほか有志7000円の寄附。

越中義塾をもとにした「高岡分校」など、分校計画も出たが頓挫。

越中義塾は1883.12の徴兵令改正の余波で窮地に。

福野や魚津の名も口にされる。

⇒県立中学校が、民間の資金を仰ぎつつも、県下中等教育の核となっていく。

6

II 第四高等（中）学校と富山県

1886.4.10　中学校令公布
　高等中学校制度の発足（第4条 全国5か所に設置）　　→表A
　県立中学校は尋常中学校に（県費支出は1校に、との制限）
1886.11.30　第四高等中学校の金沢設置の決定（文部省）
　石川県の議員らによる陳情や接待、他と比べて出色の「誘致」
　初期費用（約10万円）は、旧藩主前田家が8割方を支出し、
　残りは県官の寄附（まるで「藩校」。ただしあらたに台頭した
　商工業者層の協力も生まれる。）
1886.11.30　設置区域の決定（第四区）

7

高等中学校設置区域制

「第四区域」：構成県数が極端に少ない

　おそらく石川県（金沢）の予想外の「がんばり」が、予定外のアンバランスな区割りを招いてしまった

＝「北陸4県」の発祥か？

中学校令第5条は、これを維持費用（国と府県の折半）の単位としている
　（通学区であり経費負担区）

8

1887.10　第四区域府県連合委員会
　　高等中学校の通常経費をめぐる4府県の相談
　　一種の広域県会。各県会から3名選出。
　→石川県になるべく多くを押し付ける
新潟県の激しい抵抗（全国でもっとも損をしている県）→表B
　なまじ裕福→負担額の多さ
　＋地理的な不便さ
　　cf.　北陸本線　金沢駅ー富山駅間の開通（1899）
　　新潟駅ー富山駅間の開通（1913）
　→金沢になど行かない、東京or仙台のほうがまだ便利

9

cf. 新潟県の動き

1887.1　新潟高等中学校設置の趣旨（篠崎五郎県知事）
　　新潟単独での高等中学校設立の呼びかけ
　　山口（←防長教育会）や鹿児島（←島津家）の前例
　　県下一円に50万円以上の寄附を求める
　　文明を成り立たせるには「智富兼有」が必要
　　あまりにも達成困難、実現に至らず
1887.10　第四区連合委員会
1887.12　新潟県通常県会
　　ともに第一区への移動の建議をはかる

10

cf. 福井県の場合

1871.8.29　廃藩置県(7県)→12.31福井県・敦賀県→73.1.14　敦賀県
1876.8.21　石川県と滋賀県に分割　　1881.2.7福井県再置
1887.10　第四区連合委員会
　　福井県からも金沢・四高へは来ないだろうとの
　　新潟県議員の発言（捨て台詞?）
（交通事情）　1880 京都ー大津間開業　1882 大津長浜間に鉄道連絡船
　　1884 長浜ー敦賀間開業
　　1896 敦賀ー福井間、1897福井ー小松間、1898小松ー金沢間開業

＊富山県：新潟県・福井県のような第四高等中学校との疎遠さとは
　　無縁（いわば忠実な第四区の構成員・傘下県）

11

III 世紀転換期の高等学校設立要求と富山県

外山正一（とやままさかず）
　学歴：（幕臣）蕃書調所→開成所→英米留学
　職歴：東京開成学校→東京大学→帝国大学
　　文科大学長/文部大臣等を歴任
　通称「赤門天狗」
1890年代後半、自前の高等中学校設立を各地の講演にて促すなど、高等教育の自生を主張

著作集『丶山存稿』（1909）より↑

12

外山正一『藩閥の将来』（1899）

教育程度からみたいわば県の格付けランキング　　→表C
近世以前の郷土の偉人を想起させて教育振興を呼びかける
「我が輩は各府県人に忠告するのである。彼らの祖先がその地方 に与えたる名誉を、今日、我等の代に至りて失つては決してならぬということを我が輩は忠告するのである」
具体的には「各府県自力」の高等学校設立にハッパをかける
（文部省の仕事は大学教育と教員養成と義務教育）
but実態としては、地元は文部省による官立校の設置・維持を期待、
文部省は地元の初期費用分担を期待
＝戦前日本の官立学校設立の基本的構図ができあがる

13

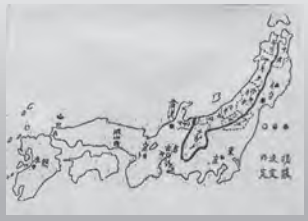
当時の富山県の進学実績
（1899、47道府県中。『藩閥の将来』調べによる。単位:人）

帝国大学32（第33位）
高等学校49（第26位）
高等商業6（第42位）
陸軍系学校（士官・戸山・砲工・中幼）13（第39位）
海軍兵学校5（第41位）
慶應義塾4（第41位）
その他専門学校8（第38位）

帝大学生の人口比割合では全国第29位（武学生数も多くはなく、さらに低い位置）

14

1899 文部省「八年計画」
明治40（1907）年までの
8年間で各種高等教育機関を
増設していく計画
高等学校は12校まで増やす
が、計画は青写真どまり
（ナンバースクール8校設置に
とどまる）、しかし各地の
誘致合戦を招く
富山県はこの動きとほぼ無縁
cf. 新潟で再燃する高等学校
設立運動



↑『新潟新聞』1899.5.4にみる区割り
＝新潟は富山との接続を想定していない

15

IV 富山高等学校の誕生

1918.12　新高等学校令
公・私立の高等学校設置を可能とする
７年制高等学校制を標準と提示
男子高等普通教育完成の機関：尋常科4年+高等科3年
官立新設7年制高校は、大正期においては、東京（1921）・台北（1922）のみ。武蔵（1921）、甲南（1923）、成蹊（1925）、成城（1926）が私立校として発足。公立は富山（1923）、浪速（1926）、昭和期に入り、府立（1929（東京））が発足。
＝大都市中心（背景：進学希望者激増）　→あきらかに富山は異質。

16

1924.1　富山高等学校開校
＝全国初の公立、唯一の県の（地方の）中学として誕生
外山正一がさぞかし喜んだであろう形態

1923.7　廻船問屋馬場家から富山県に134万円の寄附
7年制高等学校建設資金として。
74万円　設備費
50万円　維持基金（県費による毎年次経費の軽減）
10万円　職員外国留学基金

17

私立新設校の設置資金調達法

武蔵　実業家（東武鉄道など）根津嘉一郎の資産
学習院　華族の既存校（初等6・中等5年制あり）の拡張
甲南　実業家（東京海上・のち川崎造船など）平尾釟三郎ら
関西在住財界人の資産
成蹊　教育家・中村春二の構想（既設小学校あり）
←岩崎小弥太（三菱）、今村繁三（銀行）の資産
成城　教育家・沢柳政太郎の構想（既設小学校あり）
←広岡恵三（大同生命）など保護者の資産

18

官立高等学校（地名校）設立資金支弁法　→表D

①府県や市や郡の税＋地域有志の寄附：ほぼすべて（水戸以外）
②地元住民への賦課：山形
③旧藩主家からの拠金：山口・松江・高知
④資産家（財閥・成金）の拠金：山口・高知・水戸

富山：私立各校や③のタイプ
　しかし近世以来の地域の有力資産家である点が独特

19

馬場家（＝保護者・母はる）の思い

私の一人の子供が本年慶応大学へ入学いたしましたが、其の試験を受けますに就て試験勉強のため苦労を致しますのを傍で見て居りますと痛々しくて不愍でなりませんでした。・・もし此所に高等学校の一ツも出来ましたなら幾分は緩和されて入学難で困つて居る人が救はれると考へましたのと本県には近く高等商業ができますものゝ現在では薬事専門学校の外、中等以上の学校はなく本県に此れがありますれば他県へ出る必要もあるまいと考へまして高等学校と定めました次第でありまして七年制といたしましたのも、中等科から高等科へ入学試験を経ずして進まれますので・・

（『富山新報』1923.5.15、旧制高等学校資料保存会編『旧制高等学校全書』第五巻（丸善、1982）所収、以下同じ）

息子・正治：富山中学校1923.3卒業→.8 慶応大学

20

富山県高等教育の自立　～中等教育の発展

高等学校設置の儀に付認可申請（1923.8.27）
（富山県知事伊藤喜八郎より文部大臣篠田栄吉宛）
本県に於ける中等教育の施設は最近著しく其の発達を見、今や師範学校男女各一校、中学校五、高等女学校六、実科高等女学校三、工業学校二、商業学校二、農学校七、商船学校一、女子職業学校二、総計三十校を算し・・

（『公文類聚』第二教育門をⅣ　前掲所収）

21

富山県高等教育の自立　～県の本音

隣県の石川、新潟、長野には既に高等学校の設置あるに拘らず、独り本県には未た其設置を見ず（『富山新報』1923.5.15）

文部省に交渉して之を官立校と為すべく政府当局の諒解に力めなかったのは遺憾で、教授の人選上将た又生徒募集に困難な状態に陥るならんと憂慮されつゝあるが、右に就き県当局の談によれば現に石川、新潟、松本に官立高等校ができ本県に於ても同様の取扱ひを得たく主務省当局に交渉を試みたが、其意志無く止むなく県営の計画を立てた次第であると云ふ（同 1923.7.7）

入学志望者の募集に就いては文部省は県内のものなるがゆえに入学上の優先権を与へるが如きは認めない方針である（同 1923.7.12）

22

おわりに

1943.3　富山高等学校の文部省移管（官立化）

敗戦時（1945）に官立高等学校を有した府県
青森・宮城・山形・茨城・埼玉・東京・新潟・富山・石川・長野・静岡・愛知・京都・大阪・兵庫・松江・岡山・広島・山口・愛媛・高知・福岡・佐賀・熊本・鹿児島　（北海道：帝大予科、台北・旅順）
＝25/47府県（半数強）のうちの一角に収まる

23

背景～維持経費の膨張（単位：円）

1923	3,686	
1924	25,896	
1925	60,994	
1926	89,755	
1927	131,042	
1928	151,850	
1929	154,522	
1930	154,427	←地方官立地名校とほぼ同等の額
1931	142,834	
1932	139,927	
1933	136,308	

（前掲『旧制高等学校全書』第5巻所収資料より作成）

24

青色が官立高校所在府県

富山は結局、官立校３の設置県（高・薬・商）となる。
沖縄を除き、敗戦時にはすべての府県に官立校が置かれていたが、平均は２前後なので、多い方。

石川４（高・医・工・師）
新潟は3（高・医・工）
福井は1（工）

25

現行学校教育法（1947.3.29制定）

第二条　学校は、国、地方公共団体及び別に法律で定める法人のみが、これを設置することができる。
　この法律で、国立学校とは、国の設置する学校を、
　公立学校とは、地方公共団体の設置する学校を、
　私立学校とは、別に法律で定める法人の設置する学校をいう。

第五条　学校の設置者は、その設置する学校を管理し、法令に特別の定のある場合を除いては、その学校の経費を負担する。

26

富山県の高等教育の個性

石川県時代＋隣に石川県が存在したことの影響
県の主導力をある意味で削ぐ　（→民力の存置）

旧制富山高等学校＝七年制地方公立校
（唯一無二）の誕生

石川県（金沢）からの自立、国からの自立
高等学校が広域の拠点的なものから自府県域のためのものになった時代

27

高等教育に「熱心」な地域とは？

官立校を呼ぶことか
「学都」の要件　　cf.「教育県」
自前での教育（府県教育）か
cf. 京都（官立好き）と大阪（官立嫌い）の位置づけ
他に任せることは「教育不熱心」なのか
官立に、あるいは他府県に
地域における高等教育の「自主性」とは？

28

表A　第一～第五高等中学校設置状況

高等中学校	設置箇所(府県)	設置決定年月日	府県の費用準備方法
第一高等中学校	東京	1886. 4. 29	(地元負担なし)
同上医学部	千葉	1887. 9. 27	地方税4万と寄附金1万
第二高等中学校(医学部含む)	仙台(宮城)	1886. 12. 9 1887. 8. 19(医学部)	寄附金7.5万(各郡区5万、仙台区2万、旧藩主と官吏で0.5万)と地所建物寄附2.5万相当
第三高等中学校	大阪→京都	1886. 4. 29 1886. 11. 30移転決定	地方税6.8万と京都府中学校資本金3.1万
同上医学部	岡山	1887. 8. 19	地方税4.5万と寄附金0.5万
第四高等中学校(医学部含む)	金沢(石川)	1886. 11. 30 1887. 8. 19(医学部)	寄附金10万(うち旧藩主7.8万)
第五高等中学校	熊本	1887. 4. 15	地方税8万と寄附金2万(うち旧藩主1万)
同上医学部	長崎	1887. 8. 27	地方税4.3万、寄附金0.7万

以下、表A～Dはいずれも拙稿より

表B　1888年度高等中学校運営経費各府県分担額(円)

第一区 (1府10県) 計45,000	東京府	12,061	(備考) 東京1.5割千葉1割増課の原案廃棄、民力富み入学生多い東京が2割増課、千葉が1割増課と決定。
	神奈川県	2,378	
	埼玉県	3,318	
	千葉県	7,879	
	茨城県	3,008	
	群馬県	2,077	
	栃木県	2,113	
	愛知県	4,560	
	静岡県	3,127	
	山梨県	1,321	
	長野県	3,158	
第二区 (6県) 計25,000	宮城県	11,108	人口のみを率に2.5割を宮城に増課の原案廃棄、宮城が総額の1／3を負担、残りを全6県が人口率で配分と決定。
	福島県	3,544	
	岩手県	2,636	
	青森県	2,088	
	山形県	2,935	
	秋田県	2,688	
第三区 (2府13県) 計32,500	京都府	4,613	移転未完のため医学部設置の岡山にのみ1割増課の原案廃棄。京都に1割5分の増課案出るも、京都・大阪・岡山がそれぞれ1割増課と決定。
	大阪府	5,995	
	兵庫県	2,731	
	三重県	1,602	
	滋賀県	1,238	
	岐阜県	1,401	
	鳥取県	635	
	島根県	992	
	岡山県	5,088	
	広島県	1,885	
	山口県	1,233	
	和歌山県	973	
	徳島県	1,000	
	愛媛県	2,288	
	高知県	826	
第四区 (4県) 計22,500	新潟県	6,361	石川2.5割増課の原案廃棄、3.5割増課と決定。
	福井県	2,422	
	石川県	10,794	
	富山県	2,921	
第五区 (7県) 計25,000	長崎県	2,865	熊本1.5割・長崎1割増課の原案廃棄、税高・人口による一律分配と決定。
	福岡県	5,793	
	大分県	3,533	
	佐賀県	2,743	
	熊本県	4,583	
	宮崎県	1,780	
	鹿児島県	3,703	

表C

文学生数順位（各道府県別諸学校在学・卒業生数）

文学生数順位	道府県	帝国大学	高等学校	高等商業	慶応義塾	専門学校	文学生数計	帝大学生数人口比割合順位	武学生数順位
1	東京府	341	308	201	285	136	1271	1	1
2	福岡県	131	163	40	22	31	387	6	7
3	山口県	117	201	23	8	14	363	3	4
4	新潟県	104	103	26	22	52	307	16	21
5	兵庫県	68	76	34	31	26	235	32	18
6	静岡県	69	68	30	31	35	233	17	9
7	佐賀県	74	119	15	9	15	232	2	3
8	長野県	68	72	19	32	38	229	19	12
9	熊本県	73	103	13	15	24	228	11	10
10	愛知県	84	53	25	33	27	222	21	8
11	高知県	70	77	21	3	16	187	4	6
12	北海道	72	38	16	43	14	183	7	39
13	京都府	61	69	13	18	18	179	13	28
14	鹿児島県	71	65	19	9	14	178	10	2
15	岡山県	49	70	25	13	20	177	27	15
16	山形県	66	80	12	5	10	173	8	13
17	三重県	47	64	21	18	21	171	25	21
18	宮城県	54	82	8	10	14	168	12	16
19	大阪府	40	58	20	34	14	166	44	34
20	千葉県	40	44	22	32	26	164	39	27
21	石川県	75	55	11	7	6	154	5	5
22	長崎県	53	48	20	16	12	149	14	23
23	広島県	36	59	18	12	18	143	45	11
24	埼玉県	37	33	15	30	27	142	40	41
25	神奈川県	32	36	13	45	15	141	36	29
26	福島県	46	51	12	16	15	140	28	19
26	愛媛県	49	59	11	8	13	140	22	14
28	茨城県	39	37	16	23	19	134	35	24
29	大分県	39	54	12	10	17	132	26	29
30	福井県	41	61	12	7	7	128	9	17
31	栃木県	39	29	13	19	18	118	23	41
31	岐阜県	37	55	9	11	6	118	20	38
33	島根県	40	47	5	4	12	108	18	43
34	和歌山県	32	34	17	9	10	102	24	20
35	群馬県	26	26	15	18	14	99	38	36
35	富山県	32	49	6	4	8	99	29	43
37	滋賀県	22	26	15	13	16	92	41	31
37	秋田県	32	27	8	13	12	92	31	45
39	山梨県	20	30	6	16	12	84	33	40
40	香川県	16	38	8	8	8	78	46	36
41	岩手県	19	29	14	5	9	76	42	24
42	鳥取県	25	22	6	8	10	71	15	24
43	青森県	13	27	7	4	17	68	47	35
44	徳島県	18	24	11	1	7	61	43	33
45	奈良県	17	29	3	3	7	59	37	46
46	宮崎県	17	20	5	3	8	53	34	31
47	沖縄県	19	11	7	6	2	45	30	47
	（総計）						8279		

※外山正一（とやままさかず）『藩閥之将来（はんばつ）』（1899年）データから算出。文学生数は、表中の帝大以下各校、武学生数は陸軍の士官・戸山・砲工・中央幼年の各学校と海軍兵学校の総計。

並べ直し

ⓐ	ⓑ（ ）内:人数
1 東京府	1 東京府（321）
2 佐賀県	2 鹿児島県（210）
3 山口県	3 佐賀県（204）
4 高知県	4 山口県（156）
5 石川県	5 石川県（135）
6 福岡県	6 高知県（101）
7 北海道	7 福岡県（100）
8 山形県	8 愛知県（92）
9 福井県	9 静岡県（90）
10 鹿児島県	10 熊本県（89）
11 熊本県	11 広島県（87）
12 宮城県	12 長野県（78）
13 京都府	13 山形県（73）
14 長崎県	14 愛媛県（69）
15 鳥取県	15 岡山県（64）
16 新潟県	16 宮城県（55）
17 静岡県	17 福井県（51）
18 島根県	18 兵庫県（50）
19 長野県	19 福島県（46）
20 岐阜県	20 和歌山県（42）
21 愛知県	21 新潟県（41）
22 愛媛県	21 三重県（41）
23 栃木県	23 長崎県（40）
24 和歌山県	24 茨城県（36）
25 三重県	24 岩手県（36）
26 大分県	24 鳥取県（36）
27 岡山県	27 千葉県（34）
28 福島県	28 京都府（33）
29 富山県	29 神奈川県（32）
30 沖縄県	29 大分県（32）
31 秋田県	31 滋賀県（31）
32 兵庫県	31 宮崎県（31）
33 山梨県	33 徳島県（30）
34 宮崎県	34 大阪府（28）
35 茨城県	35 青森県（27）
36 神奈川県	36 群馬県（24）
37 奈良県	36 香川県（24）
38 群馬県	38 岐阜県（31）
39 千葉県	39 北海道（21）
40 埼玉県	40 山梨県（20）
41 滋賀県	41 埼玉県（19）
42 岩手県	41 栃木県（19）
43 徳島県	43 島根県（18）
44 大阪府	43 富山県（18）
45 広島県	45 秋田県（17）
46 香川県	46 奈良県（14）
47 青森県	47 沖縄県（5）

表D 官立「地名校」の設置経緯

官立高等学校名	官制公布	地元の運動・負担など
新潟高等学校	1919.4.15 (勅112)	1916.12.7、1917.11.17に県会議長から後藤内相宛に設立意見書。寄附56万+土地買収費6万。4年間で11+15+14.7+14.7万。
松本高等学校	同上	1916.12県会から後藤内相宛に九高設置意見書。1917.11松本・長野市会寄附決議、知事宛文部省より松本への設置内示。50万。松本市が10万と敷地を寄附。
山口高等学校	同上	県3.3万。10万毛利家、20万藤田・久原財閥、20万防長教育会(利息)、6万山口町。計60万。
松山高等学校	同上	1917.8～市・県参事会、愛媛教育協会の運動。.12松山設置内定。県30万。松山市7.5万、温泉郡2.1万、伊予郡0.4万。寄附が集まらず市長批判激化。
水戸高等学校	1920.4.19 (勅110)	1918.8内田信也が創設費として100万(含敷地2.4万坪価格)を寄附(予算79万)。1919.8.28政府に完納。
山形高等学校	同上	1917.10山形市会、誘致を非公式に決定。1917.12県会、内相宛要望書提出決定。1918.9臨時県会、敷地10万円分献納決定。寄附のための起債は内務省に許されず。山形市25万寄附(20万は資産家、5万は慈恵救済資金)。残金は戸数割×42銭で賦課。
佐賀高等学校	同上	1917.12.21　県会で文部省指定金額の寄附を決定。1918.9.23内定。69.5万。30万県費、24万有志寄附、残り県下市郡。市から2万坪。
弘前高等学校	1920.11.27 (勅551)	1917.9弘前市の文相他への設置請願。.11青森県でも県下設置の建議書。1918.3県民大会。.12青森県設置の内定。1919.1～弘前、青森それぞれ上京陳情。1.26弘前に決定。1919.7県会で寄附案件採択。寄附40万。土地2万坪。10万は弘前市(うち5万は個人)。
松江高等学校	同上	高等農林学校問題が先。1918.12.21島根県会で寄附決定。80万の条件→60→40→30。＋敷地買収地均し費。計49万。1919.11決定。松平家、実業家岸誠一の多額寄附など。
東京高等学校	1921.11.9 (勅432)	東京高等師範学校附属七年制高校を府内に設立する旨、1921年府会にて府議24名が発議、可決。
大阪高等学校	同上	寄附51万円。1919.5臨時府会で20万負担決定(前年通常府会にて設置は言明)。用地買収費を市部11.3万郡部8.7万負担。収用法適用の可能性から1920.3の臨時府会で用地買収費は寄附金扱いに(坪数約半分)。
浦和高等学校	同上	文相69.5万提示、浦和町が30万寄附を公約。熊谷・大宮・岩槻・川越で運動。埼玉県敷地2万坪。1919.6県会、有志の寄附により不足があれば県費から、と決定。.9.10浦和に決定。.12負担は30万、うち5万東京の埼玉県人、10万北足立郡、15万他8郡(直接国税と人口で半分ずつ)。
福岡高等学校	同上	1919福岡県会30万(敷地買収費含む)の寄附決定。後42.5万に。市も10.5万の高等学校新設費寄附。
静岡高等学校	1922.8.25 (勅391)	高等工業学校問題が先(静岡か浜松か沼津か)。1919.3静岡市長から文相宛、高等学校設置ノ議ニ付申請書。.12.13静岡県会、設置費用総額80万のうち40万を10万×4年でと決定。32万が静岡市と一般寄附金。静岡市より1.9万余坪。
高知高等学校	同上	1917.9板垣退助の後藤内相宛設置願書。1919～高等学校誘致期成同盟会。岩崎家(25万)・山内家からの寄附。高知市からは7万円(5年で。後に4年でと県から依頼あり)。
姫路高等学校	1923.12.11 (勅501)	高等工業学校問題が先(神戸か姫路か)。1919.1臨時県会、20.3万県負担決定(12.5万敷地購入費、7.8万建築・設備寄附)。姫路市20万、飾磨郡4.5万。
広島高等学校	同上	1919～広島経済研究会、設置期成会(.5～)が運動。1920.3設置内定の報。40万。1922.1県会で寄附決定。県と市で20万ずつ。
富山高等学校	1943.3.31 (勅249)	公立七年制を移管。(1923富山県に馬場家から150万の寄附、.10文部省より設置認可され設置。)

各校史、所在府県・市議会史、各府県・市議会録、各地方紙等により判明した限りでの未定稿。「内地」に限る。旧姓高等学校資料保存会編『旧制高等学校全書』第五巻設置・運営編(丸善、1985)も参照。

2024年2月10日（土）

富山大学附属図書館所蔵小泉八雲旧蔵書（ヘルン文庫）紹介

中島淑恵（富山大学人文学部教授）
toshie@hmt.u-toyama.ac.jp

富山大学附属図書館5階小泉八雲旧蔵書（ヘルン文庫）

1

ヘルン文庫（小泉八雲旧蔵書）の由来

ハーン没後　1904（明治37）年、蔵書は東京大久保の小泉家に置かれていた。しかし、近隣で火事があったことなどから、小泉家では安全に保管できる大学等へ一括譲渡したいと考えるようになった。

ちょうどその頃富山では、のちに初代校長となる南日恒太郎氏を中心に、富山大学の前身校のひとつである旧制富山高等学校の設立準備が進められていた。南日氏は実弟でハーンの教え子である田部隆次氏から小泉家の意向を聞き、すぐに譲渡の申し入れをした。新学校に優秀な教師を集め、当地の文化の中心とするに相応しい蔵書であると判断したためである。同時に、旧制富山高等学校の創設に私財を投じた馬場はる氏に寄附を仰いで、蔵書の購入が実現した。

こうして蔵書は、1924（大正13年）開校記念に馬場家から寄贈され、現在「ヘルン文庫」は富山大学に受け継がれている。

なお、旧蔵書の多くは日本へ来てから購入したものだが、うち500冊ほどはアメリカ滞在中に購入し、来日するときにはアメリカにおいてきたもの（ハーンの死後1918年（大正7年）にアメリカから小泉家に返還された）である。

2

旧制富山高等学校および富山大学で作成された3つのカタログ

Catalogue of the Lafcadio Hearn Library in the Toyama High School
1927年

富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録改訂版
1999年

富山大学ヘルン文庫所蔵小泉八雲関係文献目録改訂版
1998年

（富山大学ヘルン文庫所蔵ヘルン関係文献解説目録）　1959年

3

旧制富山高等学校1923年開学

初代校長　南日恒太郎
英語学・英文学者

南日三兄弟
南日恒太郎（1871年-1928年）
田部隆次（1875年-1957年）
英語毒・英文学者、ハーンの門弟
田部重治（1884年-1972年）
英文学者、登山家、『山と渓谷』

馬場はる刀自の寄附

東京神田の北星堂を出る旧蔵書

関東大震災があったため、小泉家はヘルン文庫の譲渡を決意したとある。いくつか譲渡先の候補はあったが、最終的に富山高等学校への譲渡が決定された。

4

5

ヘルン文庫の構成

洋書　2,069冊　　英語で書かれた本　1,350冊
フランス語で書かれた本　719冊

このうち500冊余りが、来日時にハーンがアメリカにおいてきた本（1918年に返還）

＝ハーンは生前二度と眼にすることはなかった。
カタログでは＊がついている。

和漢書　364冊

Japan: An Attempt at Interpretation『日本一つの解明』
手書き原稿上下1,200枚

6

ヘルン文庫の構成

和漢書
ハーンは日本語は読めなかった？

しかし、絵草紙本のようなものも沢山ある→挿絵は見ていた？

冊数

英語本は来日して教師となってから「大人買い」した本が多い（全集など）。

また、英文学や英文学史の教科書的なものが多い。

洋書の3分の1は
フランス語本
ニューオリンズ時代に
購入したものが多い
アメリカ時代のハーンはフランス文学の翻訳
にいそしんでいた。
ハーンの処女出版：ゴーティエ『クレオパトラの一夜とその他の幻想物語集』

7

『耳なし芳一』の原話
『臥遊奇談』の「霓裳秘曲泣幽霊

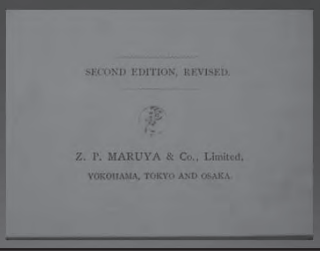
『神国日本』の手書き原稿

8

アメリカ時代に購入した本にある蔵書印

日本で購入した本にある蔵書印

→ヘルン文庫の名称の由来



9

ハーンの著作①　米国時代 7冊

1884年　*Stray Leaves from Strange Literature*　『飛花落葉集』
1885年　*Gombo Zhèbes*　『ゴンボ・ゼーブ』
1885年　*La Cuisine Creole: A Collection of Culinary Recipes*　『クレオール料理』
1887年　*Some Chinese Ghosts*　『中国怪談集』
1889年　*Chita: A Memory of Last Island*　『チータ』
1890年　*Youma, the Story of a West-Indian Slave*　『ユーマ』
1890年　*Two Years in the French West Indies*　『仏領西インドの二年間』

10

ハーンの著作②　来日後12冊

1894年　*Glimpses of Unfamiliar Japan*　『知られざる日本の面影』
1895年　*Out of the East*　『東の国より』
1896年　*Kokoro*　『心』
1897年　*Gleanings in Buddha-Fields*　『仏陀の国の落穂』
1898年　*Exotics and Retrospectives*　『異国風物と回想』
1899年　*In Ghostly Japan*　『霊の日本にて』
1900年　*Shadowings*　『影』
1901年　*A Japanese Miscellany*　『日本雑録』
1902年　*Kotto*　『骨董』
1904年　*Kwaidan*　『怪談』
1904年　*Japan: An Attempt at Interpretation*　『日本―一つの解明』
1905年　*The Romance of the Milky Way and other studies and stories*　『天の河綺譚その他』

11

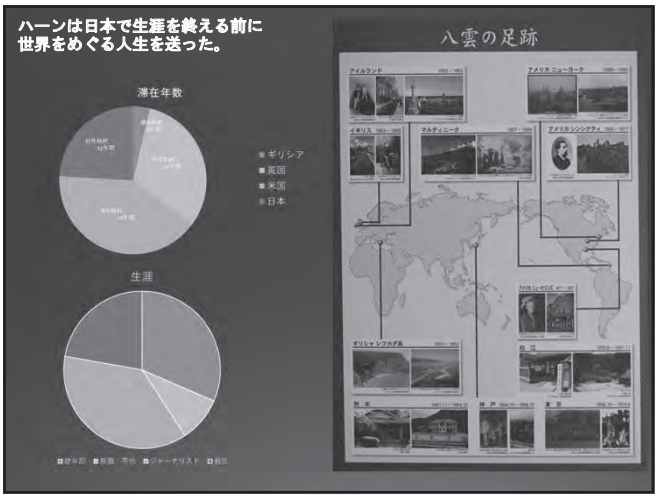
ハーンの著作③　ちりめん本5冊
長谷川武次郎刊行の日本昔噺シリーズ
(*Japanese Fairy Tales*)

1898年　*The boy who drew cats*
『猫を描いた少年』
1899年　*The goblin spider*
『化け蜘蛛』
1902年　*The old woman who lost her dumpling*
『団子をなくしたお婆さん』
1903年　*Chin Chin Kobakama*
『ちんちん小袴』
1922年　*The Fountain of Youth*
『若返りの泉』

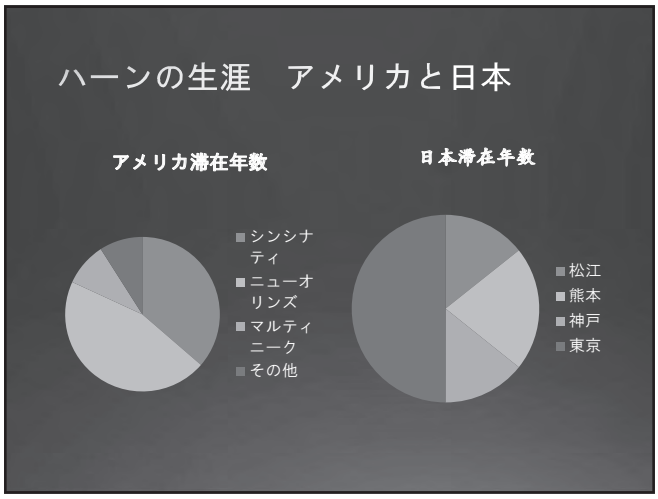
12

この他に…
アメリカ時代の新聞記事・コラム・文芸批評
シンシナティ時代
『シンシナティ・インクワイアラー』
ニューオリンズ時代
『アイテム』
『タイムズ・デモクラット』のちに文芸部長
これらの多くは無署名
どうしてハーンのものと同定できるのか？
KOTTŌ
LAFCADIO HEARN
KWAIDAN
ハーンの講義録
第五高等学校（熊本・現熊本大学）
東京帝国大学（東京・現東京大学）
で
「英語」「英文学」「英文学史」「文学論」の
講義を行った。
SHADOWINGS
その時の学生のノートをもとに講義録が出版されている。

13


ハーンは日本で生涯を終える前に
世界をめぐる人生を送った。
八雲の足跡
滞在年数
ギリシア
英国
米国
日本
生涯

14


ハーンの生涯　アメリカと日本
アメリカ滞在年数
シンシナティ
ニューオリンズ
マルティニーク
その他
日本滞在年数
松江
熊本
神戸
東京

15

八雲に出会える図書館 博物館

16

旧制富山高等学校設立100年記念事業
記念講演会及び国際シンポジウム

焼津における地域資源としての小泉八雲
～静岡県の文学資源との比較を交えて～

常葉大学外国語学部助教 那須野 絢子

1

親友

親友

西田千太郎
ハーンの松江中学時代の同僚で親友、1897年3月逝去。

ラフカディオ・ハーン
（小泉八雲）

山口乙吉
ハーンの焼津での逗留先の家主であり親友、1897年8月に出会う。

1896年の島根での夏のハーンの世話人
西田亡き後、ハーンに焼津を紹介

田村豊久

松江中学での西田の同僚。西田の没後静岡県の浜松中学校へ転任。

2

3

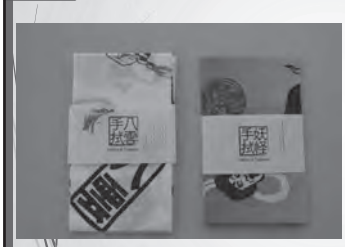
焼津小泉八雲記念館（２００７年オープン）

4

八雲滞在の家は１９６８年に愛知県犬山市の野外博物館明治村へ移設され、跡地に「小泉八雲滞在の家跡の碑」が建立された

5

八雲手ぬぐい・妖怪手ぬぐい



6

文学館を巡るバスツー「するが文化の散歩道」

7

ゲーム聖地巡礼の展開

8

常葉大学での地域連携事業 浜 to Me

9

ご清聴ありがとうございます。
Thank you for listening!

10

旧制富山高等学校設立 100 周年記念事業　記念講演会及び国際シンポジウム　2024/2/10
パネリスト　那須野絢子（常葉大学外国語学部英米語学科助教）

焼津における地域資源としての小泉八雲
～静岡県の文学資源との比較を交えて～

＜小泉八雲と焼津について＞

1. 小泉八雲と焼津

1897 年 8 月 4 日、八雲は田村豊久の紹介で焼津を訪れ、当地の深くて荒い海が気に入り、以降 1904 年の亡くなる年まで、6 度の夏を息子や書生とともに焼津で過ごした。焼津での逗留先となった海岸通り（浜通り）の魚屋山口乙吉とは強い信頼関係で結ばれ、その関係は“Otokichi’s Daruma”（「乙吉のだるま」）にも描かれている。

2. 西田千太郎が紡いだ山口乙吉との縁

焼津に来る前年、八雲は家族とともに松江、美保関、出雲を再訪し、夏期休暇を過ごしている。島根では、松江中学校時代からの八雲の親友西田千太郎が八雲一家の世話役で付き添うのが常であったが、この年は体調がすぐれず、西田は自身の代わりに一家のサポートを当時松江中学校で教鞭をとっていた田村豊久に頼んだ。西田と八雲はこの島根での夏が今生の別れとなり、西田は翌 1897 年 3 月に逝去、田村は西田の急逝を心に病んだ八雲を気遣い、焼津での海水浴をすすめたのである。田村は西田の没後、松江中学校から浜松中学校に転任していたため、静岡県の焼津を八雲に避暑地として紹介したと思われる。この年から、同地で出会った山口乙吉が、まるで西田の代わりを務めるかのように八雲一家の夏の世話係となったことを考えると、生涯の友となる乙吉との出会いは、亡き親友の西田が紡いだ縁といえるのではないだろうか。

3. 休息だけではない！八雲文学に霊感を与えた焼津の海

アイルランドでの幼少時代に水泳を覚え、以降生涯の趣味となった海での遊泳は、八雲の文学にも影響を及ぼすものであった。焼津の海は深くて波が荒く、一般的には海水浴には適さないが、八雲はそんな焼津の海に惹かれた。その第一の理由は、荒波による海の轟きだと思われる。目が悪かった八雲は海を感じる際には聴覚を使ったはずであり、焼津の海の音に聞き入った。“At Yaidzu”（「焼津にて」）には八雲の耳が捉えた焼津の海と、そこから導かれる海と人間の魂の関わりが語られている。

★焼津が登場する八雲作品★
「海辺」（ “Beside the Sea”）、「漂流」（“Drifting”）、「乙吉のだるま」（“Otokichi’s Daruma”）、「夜光幻想」（“Noctiluca”）、「焼津にて」（“At Yaidzu”）、「富士の山」（“Fuji-no-Yama”）、「地域社会の祭り」（“The Communal Cult”）

<焼津における地域資源としての小泉八雲と静岡県の文学資源>

1. 焼津小泉八雲記念館

2007 年に焼津市文化センター内にオープン。記念館開館以前は、焼津市歴史民俗資料館内の一部のスペースに八雲を紹介するコーナーがあったのみ。記念館が開館することで、焼津市が所蔵する八雲関係資料の一般公開、企画展や講演会などのイベント開催が可能となり、小泉八雲を焼津との関わりだけではなく、その文学性も含め広く発信できるようになった。今後も松江の小泉八雲記念館とともに、日本における八雲文学の発信拠点として機能させていきたい。

2. 地域資源としての小泉八雲を活用した焼津での取り組み

◎焼津＆八雲 YY プロジェクト（2016～）

・・・静岡県立大学国際関係学部細川ゼミ、焼津小泉八雲記念館、焼津市観光協会が共同で立ち上げたプロジェクト。八雲を地域の文化資源として活用し、大学生のアイディアを活かして商品開発やイベントを開催。2016 年～始動。

◎するが文化の散歩道（2019～）

・・・静岡県中部にある文学館（焼津小泉八雲記念館、藤枝文学館、中勘助文学記念館）をめぐるバスツアー（昼食、学芸員解説、学生ガイド、お土産付）。2020 年からは新型コロナウイルス感染拡大に伴いバスツアーではなく、文学館を巡って記念品をもらうスタンプラリーを開催している。

◎ DMM GAMES「文豪とアルケミスト」とのコラボ展示会の開催

・・・企画展「小泉八雲と日本の文豪」（2019）、企画展「世紀末を生きたイギリス幻想文学作家たち」（2021）を開催し、ゲームで登場するキャラクターのパネルを館内に展示、関連企画としてファンのオフ会などを開催した。

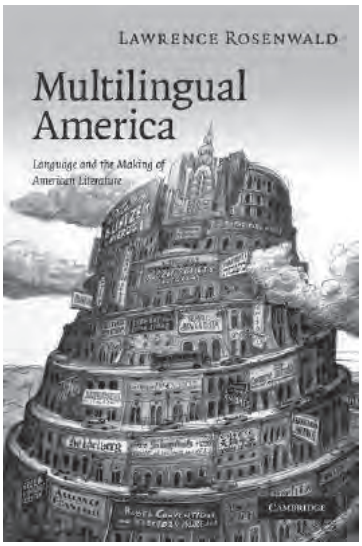
3. 小泉八雲が静岡県の文学資源として活かされるために（今後の課題）

記念館のオープンにより、市内においては焼津と八雲の関わりが徐々に周知されてきている実感はあるが、静岡県レベルで考えた際、小泉八雲は地域の文学資源として周知されている存在とはまだ言いえない。静岡県では文学資源が豊富な伊豆地域が単独の文学自治を築いている傾向があり、中西部の文学資源に光が当たらない状況になっている。文学資源が豊富な割に県立の文学館が無いのはこのためだと思われる。また、記念館の来場者やイベント参加者の年代が比較的高く、若者世代への発信も大きな課題となっている。若者（社会全般?）の文学離れが進んでいる中で、文学の持続可能性を高める試みとして、今後は文学をツーリズムと結びつけた観光資源としての活用に力を入れていきたいと考える。

おしゃべりは耳の栄養、ハーンの耳から舌へ

西成彦

１．「多言語的なアメリカとハーン」（ラフカディオ・ハーン研究シンポジウム基調講演、2017.02.11⇒『ハーン研究』2 号）



1984.04　熊本大学赴任
1989.07　マルチニーク訪問
1993.02　『ラフカディオ・ハーンの耳』

２．「耳なし芳一」の誕生

耳きれ芳一　⇒　耳なし芳一

色即是空、空即是色（・・・）無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意

Form is emptiness; and emptiness is form. […] Perception, name, concept, and knowledge, are also emptiness. […] There is no eye, ear, nose, tongue, body, and mind.　(translated by Max Müller)

1991.06　雲仙・普賢岳噴火
1991.09　19 号台風（Mireille）
1983.10　耳の手術

眼球の切断（「アンダルシアの犬」）　／　耳殻の切断（「耳なし芳一」）

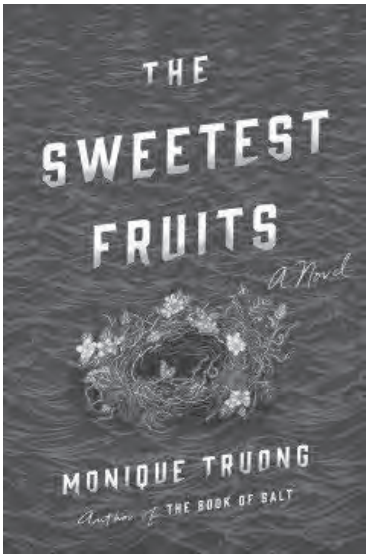
３．女の声が持つ力

「語る女の系譜」（初出『比較文学研究』60 号、東大比較文学会、1991）
　母ローザ、アレシア・フォリー、シリリア、セツ

そのころは、一日一日が今よりもずっと長かった。（……）その土地と時間は、神のような存在によって支配され、その女性はひたすら私の幸福だけを祈っていた。（……）昼が終わって、月が昇るにはまだ間があるようなとき、大いなる静寂が大地を領すると、その女性は頭の天辺から爪先まで嬉しさでぞくぞくさせてくれるような話をいっぱい聞かせてくれた。それからもいろいろな物語に耳を傾ける機会にはこと欠かなかったが、どれもこれも、美しさの点では、あの時に聞いた話の半ばにも及ばない。（「夏の日の夢」）

Monique Truong『かくも甘き果実』*The Sweetest Fruits*（2019；吉田恭子訳、集英社、2023）

耳を楽しませる女の声
（参考：「「お菓子の家」という夢」in 『立命館言語文化研究』32 巻 1 号）



It's […] the hunger of the spirit, more so than the body, though they are, of course, often intertwined […] that my novels and essays fixate on.
（'Writing Hunger', in 『立命館言語文化研究』28 巻 2 号）

Cook, Wait on ⇔ Eat, Taste, Appreciate

４．『怪談』*Kwaidan* のなかの女の声

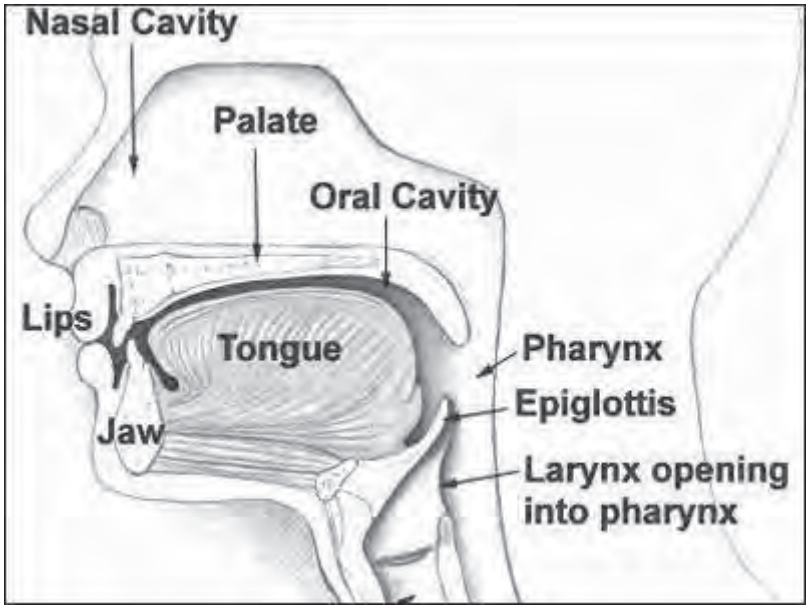
Hi kurureba
Sasoëshi mono wo --
Akanuma no
Makomo no kuré no
Hitori-né zo uki !　（「おしどり」）

“[…] But for those children asleep there, I would kill you this moment! And now you had better take very, very good care of them; for if ever they have reason to complain of you, I will treat as you deserve!” （「雪女」）

She said:--
“[…] To-morrow night, therefore, you are to come here at the same hour. […] It is required that you shall speak to no one of your visits here, during the time of our lord’s august sojourn at Akamagaséki.”（「耳なし芳一」）

５．語り手（＝舌の名手）になるということ

「耳の悦楽」から「舌の冒険」へ
“How marvelous an artist !” （「耳なし芳一」）



受動的な舌（味覚）から能動的な舌（発声）へ

Les bibliothèques, dépositaires de trésors inestimables.

Comment j'ai retrouvé des inédits de Lafcadio Hearn [1] ?

Introduction : Joyeux centenaire à la bibliothèque Lafcadio Hearn de l'Université de Toyama.

La bibliothèque Lafcadio Hearn de l'Université de Toyama a 100 ans, et, une tendre nostalgie me traverse. En consultation privilégiée ou en visite guidée, je fus toujours émerveillé devant ses 2500 pièces originales.

Et voici les écritures de LH en 16 volumes et des myriades d'éditions, de traductions, en plusieurs langues. (récits de voyage, essais, romans, nouvelles, contes, articles, revues, traductions, manuscrits, lettres, …). Voici ses lectures en 16 langues, en « *Feuilles éparses de littératures étranges* » (*Stray Leaves From Strange Literature)* [2]. (anglais, allemand, arabe, caraïbe, celte, chinois, créole, égyptien, espagnol, français, grec, indien, italien, japonais, latin, perse, polynésien). Plus de 16. Et pour être tout à juste il faut ajouter le *Hearn san no Kotoba.*

Ces éparpillements (diversité, exotisme, altérité) qui transitent en lui, flottent devant moi et me frôlent. Aujourd'hui encore, la même tendre nostalgie me traverse. Surtout que je ne l'avais pas revue depuis 5 ans. Le moindre contact avec elle, la vieille, la grande dame, je veux dire la bibliothèque, est une émotion. J'aime ses murs et ses meubles, ses livres et ses archives, ses documents et ses instruments, son personnel. Elle me révèle encore ses trésors inestimables. Joyeux centenaire ma grande, ma vieille !

Les bibliothèques sont les dépositaires de trésors inestimables. Les découvrir, c'est une heureuse aventure. Livres rares et introuvables, archives et réserves, correspondances privées et manuscrits inédits s'y cachent.

I/ Ma plus belle et fabuleuse aventure avec des manuscrits inédits de LH retrouvés au Japon.

Je peux témoigner de ma plus belle et fabuleuse aventure personnelle avec des manuscrits inédits de LH. Tous retrouvés dans des bibliothèques universitaires, privées, publiques au Japon. La dernière halte de LH. Documents rares, précieux, consultables sous habilitation. Et, c'est vous dire ma chance d'y être parvenu. Je vous les présente, de façon sommaire. Puis, je dirai par quel chemin sont-ils parvenus jusqu'à moi? Non! Comment suis-je arrivé jusqu'à eux ? Ce chemin d'émotions ! Puis je ferai de courtes analyses.

I-1/ Un petit carnet manuscrit inédit intitulé [Contes II].

Manuscrit inédit retrouvé à la bibliothèque de l'université Waseda. Charmant petit carnet de 21 cm x 15 cm. Couverture noire, cartonnée, renforcée. Heureuse protection poétique! Magnifique prophétique précaution! LH avait-il voulu protéger ces contes ? Avait-il compris ou prédit que son carnet ferait ce si long voyage. C'est en effet, géographiquement, un triple périple aux escales multiples (Martinique-Amérique-Japon). C'est aussi historiquement, une sauvegarde fabuleuse, miraculeuse et périlleuse, digne du plus beau conte. C'est, qu'il survit aux déménagements, aux tremblements de terre et aux bombardements américains. Sauvegarde prophétique ! Puisque son lieu originel, Saint-Pierre, capitale martiniquaise, sombra en 1902.

Sur les premières et les dernières pages, LH griffonna rapidement et partiellement quelques notes en vrac. J'ai pu déchiffrer des proverbes, des chansons, une référence d'un livre sur le créole, une liste de prénoms. Certains prénoms *(Adou, Cyrillia, Youma, Rachelle-chèchelle, …)* sont déjà utilisés dans plusieurs de ses œuvres. Passant d'un livre à l'autre, je suis parvenu à comparer les éléments pour deviner ses griffonnages illisibles. Mais le contenu le plus important, ce sont les 8 contes créoles répertoriés, beaucoup plus lisibles et entiers.

C'est un carnet bien conservé. D'abord par LH lui-même, puis par ses héritiers, et enfin par la bibliothèque. Saluons la conscience conservatrice des familles Inagaki et Koizumi et l'archivage de la bibliothèque.

I-2/ Un petit carnet manuscrit inédit intitulé [Note Book].

Retrouvé à la bibliothèque à l'université Waseda. Mêmes dimensions. Couverture noire/losanges blancs. 160 p numérotées par LH. J'ai comparé les chiffres (texte/pagination). Note book certifié par son fils Kazuo *«I certify herewith that:this is a note book used by my late father Yakumo when he was travelling in French west indies (1887-1889)»*

Ce sont les mêmes notes créoles bizarres (prénoms, chansons, proverbes, devinettes, jeux, recettes, jurons). *« La pluie et le soleil sont ensemble ! C'est le diable qui marie sa fille derrière la porte de l'église »* p.30 *« sacré trablati »* p.30. On trouve aussi des petits dessins et de belles petites illustrations *écumoire* p.30, *fantôme* p.14, *doigt levé* p.13. Il écrit en anglais *« Dutertre writes like Montaigne, Labat like Boileau »* p.59 Est-ce une discussion, une remarque ? Il use du français pour recopier des auteurs sur la Martinique *(Dutertre/Labat/Rutz),* des articles *(code noir)* p.91. On trouve aussi de la poésie. *La chanson de Sophocle à Salamine* de Victor Hugo.

Mais, le contenu le plus important est celui qui esquissa *Martinique Sketches* in *Two Years in the French West Indies.*

En première page du manuscrit, il lista 13 chapitres dont il en raya un. Son volume final en contiendra 15.

Il a donc ajouté d'autres textes et l'appendice *Some Creole Melodies. Les bonnes* deviennent *Ma bonne.*

I-3/ Un petit carnet manuscrit inédit intitulé [notes].

Il manque des éléments pour mieux présenter ce carnet qui se trouve au musée Lafcadio Hearn de Matsue. D'autres documents s'y cachent. Je n'ai qu'une hâte, c'est d'y retourner pour poursuivre mes recherches. C'est aussi un charmant petit carnet de 43 pages. Paginé aussi par LH. Le contenu ne fait aucun doute. C'est un carnet de notes utilisé par LH lors de son voyage aux Antilles, surtout à Saint-Pierre, Martinique. Ce sont les mêmes notes créoles bizarres (prénoms, chansons, proverbes, devinettes, jeux, recettes, jurons).

Que puis-je citer ? Si vous insistez : *« Si l'amour prend racine, je le planterai dans mon jardin »* p.26 manuscrit/p.37

---

[1] Lafcadio Hearn sera désormais indiqué par LH

[2] « *Feuilles éparses de littératures étranges* » (*Stray Leaves From Strange Literature)*

I-4/ Une correspondance manuscrite inédite [des lettres].

Accompagné de Shoko Koizumi, j'ai eu cette immense privilège de consulter une correspondance de LH. 30~40 lettres manuscrites reçues par LH sont précieusement conservées au musée d'art Ikeda à Niigata. Correspondance privée de diverses provenances, à destinations diverses, selon l'adresse du moment de LH. Des lettres de Martinique pour Philadelphie, New York, *Chu Gakko*, Shimane, Kumamoto m'ont attiré. Durant des heures, avec des gants de protection, j'ai touché, lu, déchiffré cette jolie correspondance privée. Dès mon retour chez moi, j'ai entamé la transcription de quelques lettres d'expéditrices de Saint-Pierre. Rien de littéraire, mais une jolie correspondance si affectueuse et touchante, si émotionnelle et passionnée. Je me surpris, amusé, à déceler d'hypothétiques relations épistolaires amoureuses *Léonie-Bolo, Albertine-Bolo*. *Bolo !* C'est ainsi que LH se fait appeler. Ou, les intimes *Léonie, Ninotte, Albertine*, l'appellent ainsi.

« Saint-Pierre, le 2 juillet 1889
Mon cher petit Bolo
Que j'étais heureuse quand j'ai reçu ta charmante lettre dans laquelle tu m'apprends que tu es très bien.
Et que ce faux bruit que tu avais péri n'était pas du tout vrai.
Tu ne saurais croire la joie que j'ai éprouvée en sachant que tu es vivant et que je te verrai venir auprès de moi.
Aussi je t'attends avec impatience. Je ne demande que ton retour. Je ne puis aller dans la petite maison sans penser à Bolo.
Si tu voyais ton petit chat, il est très beau et tu serais bien content de le voir.
Tu me dis dans ta lettre que tu as beaucoup à faire dans le pays où tu te trouves …
En attendant ton retour, cher petit Bolo je t'embrasse tendrement. Ta petite Léonie-Bolo »

Albertine, qui lui écrit le même jour que *Léonie*, est sans équivoque : *« Ta petite femme qui t'aime bien »*

« Saint-Pierre, le 2 juillet 1889
Mon cher Bolo
J'ai reçu ta lettre qui m'a fait beaucoup de plaisir aussi je m'empresse de t'écrire …
Je t'en prie cher Bolo n'oublie pas de m'écrire souvent c'est ma seule consolation puisque tu es éloigné de moi …
Je termine cher Bolo en t'embrassant de tout mon cœur. Ta petite femme qui t'aime bien. Albertine »

Une autre femme lui fait part de sa folle inquiétude. LH venait de quitter la Martinique pour l'Amérique. La presse parlait de deux navires qui avaient coulé dans les environs entre la Martinique et l'Amérique. Une rumeur circulait que c'était le bateau de LH. On peut lire la peur et l'affection des amis intimes de LH.

« Saint-Pierre, le 22 juin 1889
Mon cher Bolo
Je t'ai écrit le lendemain de ton départ peut-être que tu n'as pas reçu cette lettre. On disait que deux bâtiments avaient péri.
Figure-toi quel était mon état. Je me voyais devenir folle … »

J'ai trouvé cette correspondance affectueuse. Elle attisait ma curiosité, ma réflexion, mes questions. Pourquoi *Bolo* ? Qui sont ces femmes de Saint-Pierre, *Léonie, Ninotte, Albertine,* … entre 1887-1892 ? Parcourant en diagonale, l' œuvre de LH et sur LH, je n'ai trouvé, hélas, aucun passage qui y fait référence. Nous sommes informés par LH lui-même et d'autres sur quelques connaissances de sa période antillaise. Des notables, le notaire *Léopold Arnoux, le docteur Cornillac, le poète Flavia Léopold, le consul anglais M. William Lawless, …* Des gens simples aussi, *la bonne Cyrillia, le guide Yébé, la marchande de cigares, Mme Robert, la fille de la logeuse, Adou*. Mais pas un mot sur ces autres connaissances intimes. C'est bien normal, pour un dandy, timide et discret.

Faute de références livresques, je me suis livré à des analyses et des spéculations pour mieux les connaître. Je vous révèle que cette gente féminine dans son ensemble est bien éduquée et est d'un bon milieu social. Je peux affirmer que c'est un milieu éducatif, scolaire. Et, j'appelle à la barre ces éléments comme témoins.

Le beau papier à lettre à carreau, la belle écriture attachée, arrondie, fine, soignée, uniforme, commune, identique ; on pourrait même penser qu'il s'agit de la même écriture, des lettres écrites de la même main ; la belle formule de politesse, le bon usage parfait de l'encre, la propreté et l'ordre des lignes et des formes, le trait très fin, le style noble et romantique, le peu d'erreurs de grammaire/vocabulaire, la parfaite syntaxe, le lexique soutenu, le contenu, même dans une lettre banale et légère, le ton sérieux, affectueux, touchant et passionnant, la longueur généreuse (plusieurs pages). Tout est typique d'un haut milieu éducatif et scolaire. Et, j'ajouterai d'une grande ville digne, comme Saint-Pierre, la capitale de l'époque de la Martinique.

Ville d'art et d'histoire avec un opéra, un théâtre, sa musique. Ville financière avec sa maison de la bourse. Ville intellectuelle et éducative avec ses écrivains, ses établissements scolaires et son séminaire collège. Ville volcanique avec la pelé, montagneuse, avec le morne rouge (en feu), peu balnéaire avec le sable noir. Ville commerciale et portuaire avec ses paquebots et ses navires et sa rade, la plus belle, comme dit LH. Ville romantique, sensuelle de femmes de Saint-Pierre, plus belles et plus douces comme dit une chanson. Ville de plaisirs et de vices avec ses cabarets, ses maisons closes, ses rues de prostituées, *Rue monte au ciel*.

Alors ! Que reprocher à notre charmante Léonie pour son ton si affectueux, si doux, si tendre, si passionné ! Quel beau *B de Bolo* en cœur final liant d'amour le couple *Léonie-Bolo* ! Quel beau *M de aime.* Lettres sérieuses ! C'est l'écriture de ma tante, institutrice vers 1930 et qui m'a appris à écrire vers 1970 dans le même style. Enfin, je veux appeler à la barre P. Payardelle, mon dernier témoin. un autre expéditeur ou une expéditrice. En effet rien dans son nom, ni dans son style, n'indique son sexe. Mais on a la preuve de ce que j'avance. Sa lettre vient du séminaire collège de Saint-Pierre en Martinique que fréquentait LH en 1887-1889.

« Séminaire collège, le 11 décembre 1892,
Saint-Pierre, Martinique
Mon cher Monsieur Hearn,
J'ai reçu votre lettre avec un extrême plaisir …
Mon père et moi nous avons éprouvé un véritable bonheur en recevant de vos nouvelles …
C'est avec une grande impatience que nous attendons le jour qui vous ramènera à la Martinique…
Quant à moi, je fais actuellement ma seconde. Dans un an je me présenterai à l'examen.
Recevez, mon cher monsieur Hearn, l'expression de mes dévoués sentiments. P. Payardelle »

Payardelle n'est donc pas dans la passion comme les autres, mais dans le respect « *Mon cher Monsieur Hearn* », et la distance avec l'emploi du *vous*. Ton et style restent affectueux *extrême plaisir/véritable bonheur/grande impatience.* Ici, le contenu est sérieux, il est question de scolarité et d'examen : *je fais ma seconde/Je me présenterai à l'examen.* On parle de 2e année scolaire au séminaire collège de Saint-Pierre et d'examen sans doute pour enseigner. Aucune ambiguïté chez *Payardelle,* contrairement aux autres *Léonie, Ninotte, Albertine* avec fleurs, cœurs, prières, qui lui rappellent sa petite maison qu'il louait, son petit jardin qu'il entretenait, son petit chat qu'il aimait. Et, elles insistent sur son proche et probable retour. Promesse qu'il n'a pas tenue ? Espoirs qu'il a déçus ?

Comment suis-je arrivé aux manuscrits ? Je vous dévoile rapidement ce chemin d'émotions.

Comment j'ai retrouvé des inédits de Lafcadio Hearn au Japon (3-28/09/93, 10/05/1996 à nos jours).

Projet de thèse, projet de recherches, projet professionnel en tête, je décide de partir au Japon sous conseils de Mmes Pigeot et Sakai, M. Shinoda, professeurs Paris VII qui m'initiaient au japonais langue et culture. Mon premier voyage en septembre 1993 est celui d'un étudiant pauvre en auto-stop de Shinjuku à Matsue. J'ai voulu visiter les bibliothèques, mais, trop difficile d'accès. J'ai fait mon pèlerinage, mais en auto-stop. J'ai un brin d'humour sur le sujet. Sans le vouloir, sans le programmer, je suis arrivé à Matsue le 15/09/93. J'ai alors assisté incognito et involontaire, spontané au 89e anniversaire de la mort de LH dans son jardin. La famille Koizumi (Toki, Bon, sans doute Shoko) est là. Je ne connaissais personne. Me présenter ? Une honte ! J'étais sale et mal dans mes baskets, Jeans et T-Shirt, après des jours d'auto-stop. J'évite tout contact. J'aurai voulu redire à Shoko et Bon Koizumi, comment j'ai raté ma première rencontre avec leur famille. Mais, ils ne sont pas avec nous. Ils sont au carnaval de la Nouvelle Orléans dont le thème est *Lafcadio Hearn*. *Rex Parade* choisit d'honorer LH pour son carnaval 2024 *The Two Worlds of Lafcadio Hearn - New Orleans and Japan.* Ils vous saluent et vous souhaitent un bon symposium et un *Happy Birthday* à la grande dame.

Mon deuxième voyage en 1996 est celui d'un bon étudiant chercheur en fin de thèse sur les traces de LH. Pistes bibliothécaire (Tokyo/Waseda/Toyama), muséale (Matsue/Kumamoto), familiale (Koizumi/Inagaki). J'étais mieux préparé. Car, je voulais voir les salles des archives et documents précieux des bibliothèques. Lieux pas faciles d'accès. J'ai attendu des mois pour pouvoir y accéder avec une habilitation, une carte. Mme Pigeot m'avait recommandé auprès de M. Sukehiro Hirakawa, professeur émérite de l'université de Tokyo, spécialiste et traducteur de LH, auteur d'essais, d'articles. Imaginez, ma fascination et ma timidité ! Il m'a recommandé auprès de Mme Kaoru Sekita, conservatrice de la bibliothèque de l'université Waseda. Il m'a aussi parlé d'un manuscrit de textes créoles qui s'y trouvait. C'était *Contes II*.

Quand, j'eus pour la première fois posé mes yeux sur ce manuscrit inédit, je fus traversé par une émotion. Ce fut hallucinant. Je n'imaginais pas trouver matière à nouvelle étude loin du sujet de ma thèse doctorale. Je ne soupçonnais pas que le lit où « *sommeille une belle part de notre être* » [3] pouvait se trouver ici dans ces pages. Ce tout petit carnet, caché dans un coin du Japon, contenait « *l'expression primordiale de notre génie populaire.* » [4] J'étais loin de penser que *« paroles sous l'écriture »* [5] veillaient dans ces pages jaunies, vieilles de + de 100 ans. Le mêlé des survivances des traditions africaines, amérindiennes, européennes est en voltige permanente. Mais un chercheur se doit de rester froid devant de telles découvertes. Je devais en vérifier l'authenticité. Confirmer le caractère inédit des contes me semblait être la première étape avant transcription et traduction. Des textes de LH sont partiellement dans des revues, des journaux aux États-Unis, au Japon, en France ? Charles-Marie Garnier (1869-1956) professeur de langue et littérature anglaises, traducteur de Shakespeare avait demandé à LH des contes japonais pour illustrer une revue pour enfants. Il envoya le carnet *Contes I* Dans sa préface de *Trois fois bel cont*e [6], Garnier raconte qu'il n'a pas pu voir LH, souffrant, lors de sa visite. En 1903, il lui adressa sa lettre en français et le manuscrit *Contes I* plus proche du petit français que *Kwaidan* : *« Pendant mon séjour à la Martinique, j'ai recueilli un nombre de contes créoles, très baroques, qui sont à la fois amusants et dignes de l'attention de quelques folkloristes … Je puis vous envoyer le texte ; mais je n'ose point entreprendre la traduction … Ce que je vous offre ne se trouve pas facilement ailleurs, car la Martinique est finie pour jamais. C'est comme un manuscrit de Pompéi… »* [7] En 1932, Serge Denis, philologue guadeloupéen publia *Trois fois bel cont*e. Joie double découverte/publication. J'ai connu ça pour *Contes II* que j'ai transcrit, traduit, publié en France en 2001 sous le titre *Contes créoles II* [8]

Au siècle de Denis, scripteurs, transcripteurs, traducteurs créoles ne faisaient pas office. Garnier reconnaît la chance qu'il a eue d'avoir croisé l'expert qui *« réunissait toutes les qualités demandées par Hearn : Antillais, il avait, outre l'instinct de la langue créole, les connaissances philologiques indispensables…. Comme l'avait prévu Hearn, elle intéressera les folkloristes,… les érudits, mais tous les amis de ces peuples jeunes.* » [9] Hirakawa et Sekita m'ont aussi ainsi su gré.

Avant la naissance des premiers poètes, il était une fois, L. Hearn, « marqueur de paroles ».

Le manuscrit *Contes II* fut présenté au public japonais, français, martiniquais en conférences internationales. Le Japon en a fait en 1998, 2000. Pour la publication de *Contes créoles II,* j'en ai fait en Martinique 2001-02. Les contes ont ainsi fait leur retour au pays natal, à Saint-Pierre, Martinique. Je suis satisfait d'avoir suivi mon instinct, poursuivi ma démarche. *Contes créoles II* est au programme de l'agrégation créole. J'en suis fier. L'équipe Garnier-Denis avait publié la table de matière de l'original avec 34 contes. LH lui envoie 6 contes. D'autres contes étaient cachés au Japon. J'en ai trouvé 8. Quelle joie ! Dénicher les 20 autres. Quel rêve ! Je mourrai sans doute au Japon pour cela.

---

[3] Bernabé Jean, Chamoiseau Patrick, Confiant Raphael, *L'éloge de la créolité*, Gallimard, Paris, 1989, p.35

[4] Ibidem

[5] Ibidem

[6] Hearn Lafcadio, *Trois fois bel conte*, Paris, Mercure de France, 1932, 1e éd

[7] Hearn Lafcadio, *Trois fois bel conte*, Paris, Mercure de France, 1932, 1e éd, p.11/Vaduz, Liechtenstein, Calivran Anhalt, 1978, rééd, p.8

[8] Hearn Lafcadio, *Contes créoles II*, transcrits, traduits et commentés par Martinel Louis Solo, Paris, Ibis Rouge, 2001

[9] Hearn Lafcadio, *Trois fois bel conte, Idem*

LH rencontra des difficultés. D'abord, écouter et transcrire le créole n'ont pas dû être aussi simples. Ensuite, il est en face d'une langue réduite au statut de patois et qui souffre du mépris des uns et du manque de considération des autres y compris par ses locuteurs. Sa bonne ne comprend pas pourquoi il note tout ça. Ensuite, les sources écrites lui manquent. Il consulte quelques livres disponibles chez ses amis notables. Mais, le marqueur gréco-irlandais est libre et avertit en terre créole. D'abord, il a l'avantage d'une connaissance du créole depuis la Louisiane. Ensuite, il ne respire, ni ne partage l'air des soupçons, le mépris et la condescendance imposés à la langue créole. Enfin, il ne se tient à aucune distance hautaine.

Lecteur du célèbre auteur français Prosper Mérimée, il applique la méthode *mériméènne* très prospère. D'abord, il convoque et écoute le locuteur le plus *basilectal*. Ce que j'appelle le conteur de circonstances (bonne, guide). Ensuite il interroge et confirme avec l'élite (notaire, docteur, écrivain). Copiste, il note tout, le banal et l'insolite.

Le conte créole dispose de ce que Vladimir Propp nomme fonctions universelles *(lieu/temps/élément convoité/…) (musashi/arutokoroni/kokoroyasashiku utsukushi ohimesama/il était une fois/dans un lieu lointain/vivait la gentille, jolie princesse).* Le créole a aussi ses mentions originales *(atouts exotiques, origines diverses et saveurs locales)*, utiles au diversel.

Je dérange aux Antilles car je nomme LH *précurseur de la créolité.* LH fut le premier *marqueur* de contes créoles. Il dit *littérature martiniquaise.* Il comble à sa façon *le silence, la rupture* signalé par les auteurs de *l'éloge de la créolité*. *«Après nos conteurs traditionnels, ce fut donc une manière de silence. (…) Ailleurs, les aèdes, les bardes, les griots, les ménestrels et les troubadours avaient passé le relais à des scripteurs (marqueurs de paroles) qui progressivement prirent leur autonomie littéraire. Ici ce fut la rupture, le fossé, la ravine profonde…*» [10]

LH note la parole du conteur de circonstance et le colporte et l'emporte jusqu'au Japon. Il devient alors premier scripteur, transcripteur, marqueur et aussi un colporteur. Il se contente du conteur de circonstance, sans fonction ni condition, sans chanson et musique, ni talent. LH n'a pas rencontré un autre type conteur. Je veux dire un conteur *professionnel* dont c'est la fonction en échange d'un gîte et d'un couvert comme le troubadour-poète-chanteur français du moyen-âge ou le griot-poète-musicien africain, dépositaire de la tradition orale, ou l'aède-poète-chanteur grec, ou le barde-poète-chanteur celte célébrant les héros.

Ces contes ont donné à LH un tableau en raccourci de la Martinique. Y figurent, ses mœurs, ses manières, ses comportements, ses mentalités, son parlé, sa langue, sa géographie humaine et sociale, son humanité. Cette oralité secrète une mine d'informations sur le génie de cette jeune humanité à la croisée des chemins. La genèse du tout-monde est en ses plis. Dès lors, ce petit carnet avait un statut et nécessitait une attention. Le statut à défendre était clair. C'était celui de l'oraliture qui devrait avoir le même destin que la littérature.

Au commencement était le verbe, la parole. Toute littérature prend sa source dans sa lente transcription. Aux Antilles, la transmission et le relais n'eurent pas lieu. Pénétrer ainsi « *l'abysse de notre parole ancestrale* » [11] se révèle être alors une haute mission laborieuse. L'écrivain créole de nos jours tente d'écouter la parole du vieux conteur et de l'habiter, se dédoublant, en marqueur de paroles. « *Si l'écrivain parvient à convoquer la parole à ses côtés dans ces conditions-là, il peut alors commencer à écrire.* » [12]

Quelles émotions partager avec vous rapidement pour les autres manuscrits ?
Avec M. Bon Koizumi, j'ai présenté le *carnet de notes* de Matsue à la télévision (France 5), venue à Matsue. Je lui ai promis de publier les deux carnets de note, celui de Waseda et celui de Matsue. Projets en cours.

Pour les *lettres manuscrites* du musée Ikeda. Les négociations sont aussi en cours. Aujourd'hui, vous avez l'exclusivité mondiale de courtes lectures. J'espère que vous achèterez donc mes livres, en masse, très vite !

La transformation des bibliothèques, espace et esprit.
Qu'elle soit universitaire, publique, privée, la bibliothèque a sa fréquentation qui diminue. C'est Mondial ! Au témoignage, de tristes statistiques (baisse des inscriptions, fréquentations, emprunts), de drastiques coupures budgétaires, de fermetures de bibliothèques urbaines/rurales, de grosses suppressions de postes. En France, le nombre de personnes inscrites baisse chaque année pour atteindre le seuil critique de 15 %.

Les causes sont multiples. La mauvaise image : hors du temps, loin de la modernité, longs couloirs froids, gros livres moites. La jeunesse vit la bibliothèque comme la retenue de l'école, la prolongation de l'étude. Missions innovatrices et objectifs futurs fusent pour lui trouver nouvelle identité et meilleure visibilité. Certains spécialistes veulent éluder son nom *bibliothèque, lieu de stockage de livres* qui n'attire plus les jeunes. D'autres cherchent un logo pour ancrer la bibliothèque dans la ville comme la gare, l'hôpital, la poste, …

La reconfiguration complète de son image de marque est sur le bureau des experts en stratégie marketing. Comment transformer l'espace et l'esprit, trouver une nouvelle identité branchée, connectée aux réseaux modernes, reliée à la société ? « *Innovate or die* » *Innover ou mourir*

Quel nom, quel logo ?
Quelle innovation pour attirer le jeune d'aujourd'hui avec son pouce sur le portable vers la bibliothèque ? Je n'en sais rien. Mes étudiant(e)s me trouvent ringard. Comme une vieille bibliothèque. Je suis jeune.

Je remercie les organisateurs et le public. En premier lieu, Mme Toshie Nakajima. *And Pardone my French*.

Toyama, le 10/02/2024
Louis Solo Martinel

---

[10] *Eloge de la créolité*, op cit, idem

[11] Bernabé Jean, Chamoiseau Patrick, Confiant Raphael, *L'éloge de la créolité*, Paris, Gallimard, 1989

[12] Chamoiseau Patrick, *Que faire de la parole*, in Ludwig Ralph, *Écrire la "parole de nuit" nouvelle littérature antillaise*, Gallimard, Paris, 1994,p.157

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。